

金沢大学・  
知識集約型社会を支える  
人材育成事業 (KU-DP)  
アニュアルレポート2023

# 金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP） アニュアルレポート 2023

## 目 次

### I. はじめに

1. 巻頭言 . . . 4

### II. 金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP）実績概要

1. 令和5年度の事業取組概要 . . . 6
2. 数値目標の達成状況 . . . 14
3. 幹事校としての取組実績 . . . 15
4. KU-DP 事業を通じた人材育成エコシステムの構築 . . . 16

### III. 融合学域に関する取組実績

1. 融合学域3学類の取組概要 . . . 19
2. 融合学域のカリキュラム概要 . . . 24
3. 融合学域における学修の進捗状況・達成状況（学修成果の把握・可視化） . . . 27
4. 融合学域先導学類における留学・国際インターンシッププログラム . . . 31
5. 融合学域における学生を中心とした各種活動 . . . 32

### IV. 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）に関する取組実績

1. 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）のカリキュラム概要 . . . 34
2. 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の学修目標 . . . 36
3. 「融合先導知概論」「融合先導知実践演習」の取組 . . . 37
4. 「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」  
令和5年度追跡調査結果 . . . 46
5. アカデミック・アドバイジングとピア・サポートを融合した学修支援の取組 . . . 60
6. KU-STEAM 学生スタッフの取組 . . . 63

### V. 新しいリベラルアーツ教育・STEAM 教育に関する取組実績

1. 共通教育科目 GS 科目6群の取組 . . . 65
2. 学域 GS 科目の取組 . . . 66
3. デザイン思考テストの実施 . . . 67
4. 大学院 GS 科目の拡充 . . . 72

## VI. 教学マネジメントセンターに関する取組実績

1. 教学マネジメントセンターの業務概要 …… 75
2. FD・SD 活動の枠組と実績 …… 77
3. 学位プログラムレベル・授業科目レベルを中心とした  
教学マネジメント環境整備 …… 79
4. 教学 IR 環境整備 …… 86
5. 未来創成教育環の取組 …… 87

## VII. 金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業 (KU-DP) イベント報告

1. 令和 5 年度第 2 回全学 FD 研修会「分野を超えた専門知の組み合わせとは～Society 5.0 における人材育成の姿～」【「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」幹事校企画】 …… 90
2. 令和 5 年度第 3 回全学 FD 研修会・KU-DP アドバイザリーボード「実践インターンシップを通じた学びの成果発表と意見交換」 …… 92
3. 「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」共通テーマ 4 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2023「文理横断・分離融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」【「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」幹事校企画】 …… 94
4. 高大接続ラウンドテーブル特別企画「探究・STEAM フェスタ 2023 ～高校生の探究心に火を灯す～」 …… 97
5. 令和 5 年度第 1 回採択校連絡会 …… 100
6. 令和 5 年度「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」成果発信シンポジウム「STEAM 教育を通じた高大院接続による人材育成エコシステムの構築を目指して」【「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」幹事校企画】 …… 102
7. 令和 5 年度「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」成果発信シンポジウム 第二部 令和 5 年度第 2 回採択校連絡会 (情報交換会) …… 106

## VIII. 活動日誌・編集後記

1. 活動日誌 …… 109
2. 編集後記 …… 111

# I. はじめに



## 巻頭言



金沢大学長 和田 隆志

私たちは今、コロナ禍以降のニューノーマルと、国際秩序の変容という「時代の大きな転換点」に直面しています。同時に、DX（デジタルトランスフォーメーション）の活用によって描き出す「未来世界への出発点」に立っています。

本学は、文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業」の採択をうけ、令和2年度から「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」に取り組んできました。このプログラムは、かつてない変化に直面する社会に対応するための教育改革です。深い専門性を基盤としながら、広範な教養と文理融合の知識をもって新たな世界の価値創造に挑む、領域横断型のSTEAM人材の育成を柱としています。

本プログラムではこれまで、金沢大学<グローバル>スタンダード(KUGS)を体現するリベラルアーツ教育を大幅に拡充してきました。また文理融合の「総合知」により現代の課題解決を先導する新学域「融合学域」を設置する等、大胆な教育改革も進めてまいりました。今後は、この融合学域を中心に展開する未来志向型教育をすべての学域に浸透するべく「先導STEAM人材育成プログラム」の拡充に注力します。総合大学が誇る多分野の専門性に、広範な教養と文理融合の知識を組合せ、次なる時代を描き出す知性、すなわち「未来知」をもったSTEAM人材を、全学体制で育てていきます。

また、本学は「知識集約型社会を支える人材育成事業」の幹事校に選定されています。他の採択校と連携を図り、各大学が集約し磨き上げた多彩な「知」を、全国の高等教育機関に波及させます。この「時代の大きな転換点」から、持続可能な、希望ある未来社会を創成するべく、着実に歩を進めてまいります。

関係の皆様におかれましては、本学の取り組みに今後ともご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## Ⅱ. 金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業 (KU-DP) 事業実績概要

## 1. 令和5年度の事業取組概要

### 1.1 進捗状況の概要

#### (1) 本事業計画の進捗状況や成果

本事業計画の主要項目は、「①融合学域の設置」「②先導STEAM人材育成プログラム(KU-STEAM)の新設」「③学士課程のリベラルアーツ科目である共通教育科目GS科目と学域GS科目の拡充」「④全学的な教育改革の司令塔としての教学マネジメントセンターの設置」である。学長が機構長を務めるグローバル人材育成推進機構の下に、教育担当理事を委員長とする「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム運営委員会」、教学マネジメントセンター長を兼務する学長補佐を委員長とする「同プログラム企画実行委員会」を設置し、学長・理事のリーダーシップにより事業推進している。

令和5年度には、本事業で開発した教育プログラムの有効性や学修成果を把握するため、融合学域先導学類生(1年次～3年次)を対象としたアセスメントテストの導入、共通教育科目GS科目6群の一つである「デザイン思考入門」受講生を対象としたデザイン思考テストの継続実施、さらには、先導STEAM人材育成プログラム(KU-STEAM)コア科目に当たる「融合先導知実践演習A(ちょこっとマイプロジェクト)」受講生を対象とした追跡調査を新たに実施し、現状把握と効果検証を行うことで、事業取組の改善充実に活かしている。

また、高大接続を目的とした「探究・STEAMフェスタ」の継続実施や、実践インターンシップ成果合同発表会を兼ねたアドバイザリーボードの新たな企画実施を通して、大学教育に留まらず、学校教育から社会への接続を意識した人材育成エコシステムの構築と定着を進めた。

さらに、幹事校として、前年度に設置した採択校同士による共通テーマチームの各種取組をリードしつつ、各共通テーマに応じた成果発信(セミナー開催、ガイドライン作成など)を行い、全国の高等教育機関への利活用促進を進めている。

#### (2) 目標の達成状況

本事業計画の主要項目が掲げる目標の達成状況を列挙すると以下のとおりである。

「①融合学域の設置」では、令和5年度開設3年目の先導学類において49名の学生を新たに受け入れ、アントレプレナーシップやデザイン思考を軸とした講義・演習のほか、プロジェクト演習科目を新たに開講し、イノベーションの創成をリードする社会変革人材の育成を目指している。そのほか、第2の学類「観光デザイン学類」では21名、第3の学類「スマート創成科学類」では1期生・19名の学生を受け入れた。また、入試広報を強化し、専門スタッフの配置等を通して戦略的な活動を進め、令和6年度入学者選抜では、一般選抜志願倍率が前年度を上回る2.44倍(融合学域全体)となり、特に、先導学類及びスマート創成科学類の文系傾斜区分では、3倍を超える倍率となった。

「②先導STEAM人材育成プログラム(KU-STEAM)の新設」では、融合先導知実践演習及び実践インターンシップの開講クラス数の充実を図り、受講者数が増加した。アカデミック・アドバイザー教員による履修指導や学生スタッフによるピア・サポートを通じたラーニング・コミュニティの充実を図った。全新入学者約1,800名対象の履修ガイダンスや全学域学生対象のランチオンセミナーによる説明会を対面にて開催した。

「③学士課程のリベラルアーツ科目である共通教育科目 GS 科目と学域 GS 科目の拡充」では、前年度より、AI・データサイエンス教育、デザイン思考といった 21 世紀型スキルを修得する新しいリベラルアーツ教育を全学展開しており、令和 5 年度には、6,310 名（延べ）の学生が共通教育科目 GS 科目 6 群を受講した。

「④全学的な教育改革の司令塔としての教学マネジメントセンターの設置」では、教学マネジメントを統括する立場から FD・SD 及び教学 IR の刷新を進め、令和 5 年度には FD 研修会を計 20 回開催し、1,258 名の参加者を集めたほか、アセスメントプランに当たる「教育の内部質保証に関する指針」を新たに策定し、学位プログラムを中心とした教学マネジメントの強化を図った。

### (3) 今後の展開等

令和 4 年 6 月公表「Society 5.0 の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」（内閣府 総合科学技術・イノベーション会議）が示すとおり、文理融合・分野横断による STEAM 教育の重要性が増している。本学が目指す「金沢大学発・STEAM 教育モデル」の使命は大きく、その成果を分かりやすく社会に発信していきたい。併せて、幹事校として、本事業共通の成果を全国の大学等が利活用できるプラットフォームを構築し、補助事業期間終了後の各取組の持続性を確保していきたい。

## 1.2 事業計画の実施体制

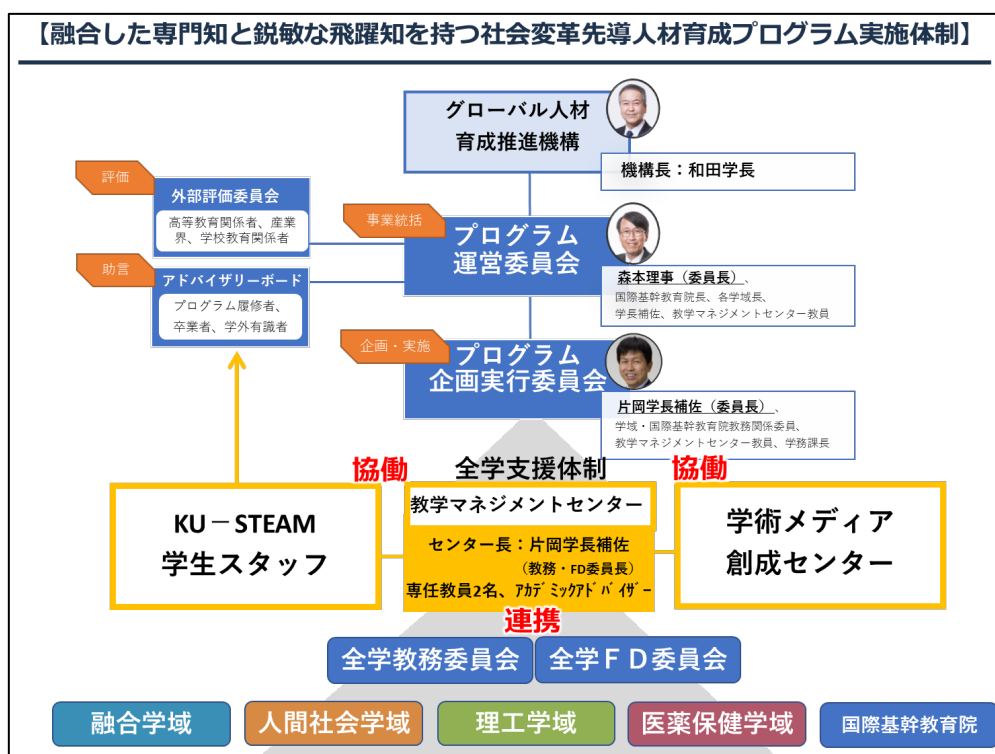
### (1) 学内の実施体制

本事業は、学長を機構長とする「グローバル人材育成推進機構」の下で展開する。「グローバル人材育成推進機構」は、本学の憲章に掲げるグローバル人材の育成を学士課程から博士課程まで、全学を挙げて実現するため、その方針を策定し、学域間、研究科間の横断的な教育プログラムを企画・運営する組織である。本事業の実施にあたり、令和2年度に「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム運営委員会」（プログラム運営委員会）を設置する諸規程の整備を行った。教育担当理事を委員長とし、学域長、国際基幹教育院長等が参画することで、全学的な見地に立った事業運営を行う体制とした。運営委員会の下には、本事業の企画(Plan, Action)の実務を担う「プログラム企画実行委員会」、評価 (Check) を担う「外部評価委員会」及び本事業取組に関する助言や支援を行うステークホルダーからなる「アドバイザリーボード」を置いた。

事業の実施(Do)は、全学の教務委員会・FD委員会の所轄下で、本事業で設置した「教学マネジメントセンター」が中心となり、教育DXを掌る学術メディア創成センターと協働しながら、各学域等部局と連携する体制とし、客観的な視点によるPDCA サイクルの確立とプログラムの質保証を図った。プログラム企画実行委員会は、教学マネジメントセンター長を務める学長補佐（教育改革・学修支援担当）を委員長として、各学域の教務・FD委員などから構成する。本学の教学マネジメントを一元管理する「教学マネジメントセンター」に関しては、本事業の要として位置づけるものであり、戦略的な人員配置の見直しを学内で行い、国際基幹教育院高等教育開発・支援部門における経験を有する教員を教学マネジメントセンターに配置するとともに、他大学での教学マネジメントに関し経験豊富な教員を新た

に配置したほか、アカデミック・アドバイジング担当の特任教員を採用した。また、共通教育科目GS科目6群の新設科目を担当する教員の配置も優先的に実施している。更に、幹事校業務遂行のため、非常勤事務職員1名を雇用し、大学間調整・情報発信を進めた。

令和5年度において、プログラム運営委員会を2回、プログラム企画実行委員会を4回、教学マネジメントセンター運営会議を11回開催したほか、KU-STEAM 学生スタッフ47名を得て、教職学協働による事業推進に取り組んでいる。また、本事業に関する外部評価委員及びアドバイザリーボードメンバーを委嘱し、事業2年目以降の取組内容の外部評価及び指導助言を受けながら、改善充実を図るPDCAサイクルを構築している。事業取組の進捗管理と好循環サイクルを創出しながら、本事業取組全体及び教育プログラムの質保証を進めている。外部評価委員は、高等教育関係有識者3名、学校教育関係者1名、企業関係者1名の5名で構成している。アドバイザリーボードは、プログラム・授業科目開発パートナー・サポーター、本学卒業者などの多様なステークホルダーからなる本事業の応援団という位置付けで、現在71の個人または組織が参画しており、今後さらに拡充予定である。



図表 II-1 「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」実施体制

## (2) FD・SD 実施体制

本学では、教育担当理事が所掌する本学の基幹会議である教育企画会議の下に、学長補佐、各学域、各研究科を担当する教員、国際基幹教育院教員、教学マネジメントセンター教員から成る「全学FD委員会」を組織し、「金沢大学におけるFD活動指針」のもと、FDだけでなく、SDも含めた基本的事項を定め、全教職員に共通認識を図っている。毎年度の具体的な企画立案については、教学マネジメントセンターが主導しながら、FD・SD、教学IR

の改善充実を図りつつ、全学的な FD・SD 活動とともに、各部局において独自に実施する FD（部局 FD）の支援に取り組んでいる。特に、令和 3 年度以降、教育成果と学修成果の把握と可視化を強化するため、学生授業評価アンケート、卒業・修了者アンケートの見直し及び卒業・修了後アンケートの新規実施などを通して教学 IR 環境基盤を整備し、大学全体・学位プログラム・授業科目レベルの教学マネジメント強化を目的とした FD・SD を展開している。さらに、文理融合教育を通して個別最適化した学修支援をきめ細かく行う観点から、附属図書館、高大接続コア・センター、キャリア支援室などの関連部署と連携しながら、アカデミック・アドバイジングやピア・サポート等をテーマとした FD・SD 活動の充実を進めている。

### (3) 学内への周知徹底

令和 2 年度に構築した金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP）専用 Web サイトに加え、令和 3 年度からの事業取組の本格実施に伴い、学内向け広報を強化し、目的に応じた広報資料の計画的刊行を進め、本学公式 Web サイトや SNS を活用した周知徹底を図っている。新たに開発した広報資料は、各種取組のダイジェストを広報する『教学マネジメントセンターニュースレター』、令和 3 年度に先行実施した先導 STEAM 人材育成プログラムの教材コンテンツを集めた『先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）実践報告書 2021（教材コンテンツ集）』、学生向け『先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）紹介パンフレット』、各年度の事業報告書を兼ねた『KU-DP アニュアルレポート』であり、定期的に刊行している。令和 5 年度には、『先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）履修ガイドブック』を新たに刊行し、当該プログラムの履修内容や履修手続きの浸透に尽力している。

また、KU-STEAM 学生スタッフが中心となり、事業取組紹介等の動画作成・配信も進めている。さらに、先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）のロゴマークについて、KU-STEAM 学生スタッフの意見等を取り入れながら、右図のとおり作成・公表し、学生・教職員の認知度向上に努めている。

多様な広報媒体を利活用しながら、全学域の入学者を対象としたガイダンス及び初年次科目『大学・社会生活論』における先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の紹介に

加えて、本事業取組紹介及び KU-STEAM 受講者獲得を目的としたランチョンセミナー（昼休み時間のミニセミナー）を創設し、連続的に企画開催している。ランチョンセミナーでは、教学マネジメントセンター教員、KU-STEAM 学生スタッフ、関係する学内部署の教職員が登壇することで、学生・教職員が気軽に集い、ネットワーキングできる場づくりを行っている。同セミナーでは毎回、参加者アンケートを行って参加者の満足度やニーズを把握し、学内広報や各種企画の改善充実に役立てている。



図表 II-2 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）ロゴマーク

#### (4) 評価体制の整備

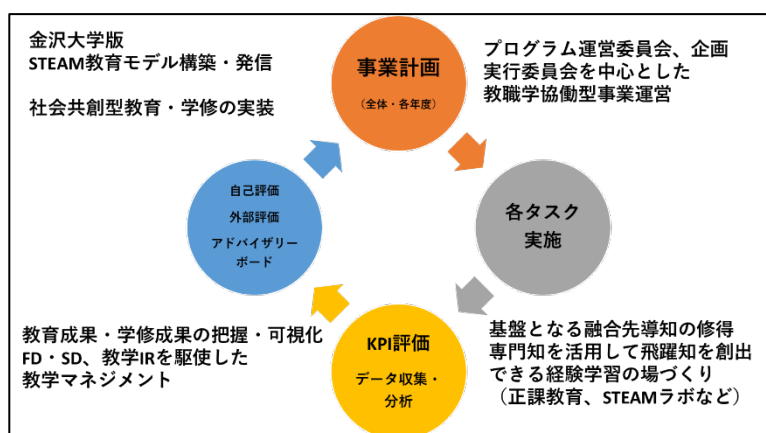
本事業では、年度ごとの事業取組の自己評価を適切に実施できる体制を整備している。内部評価として、教学マネジメントセンターが毎年度作成する自己点検・評価報告書『KU-DP アニュアルレポート』に基づき、プログラム運営委員会及びプログラム企画実行委員会が点検・評価を行っている。

また、外部評価として、事業内容に精通した高等教育専門家 3 名（カリキュラム・マネジメントや FD の専門家 1 名、理工系教育や教育 DX の専門家 1 名、教学 IR やアセスメントの専門家 1 名）、高等学校関係者 1 名、企業関係者 1 名の計 5 名を外部評価委員に委嘱し、令和 3 年度から毎年度末に外部評価委員会を開催している。外部評価委員会については、事前に提示した評価の観点に基づき「KU-DP アニュアルレポート（自己点検・評価報告書）に記された当該年度の事業取組」に関する事前コメントの準備を依頼し、外部評価委員会当日に講評を受ける形式で行っている。なお、当該外部評価では、事業進捗状況だけでなく、補助金の執行状況も評価することとしている。当該講評は関係者に公表され、翌年度の事業計画に反映する仕組みを確立している。

さらに、本事業プログラムオフィサー（PO）による指導助言を改善充実に活かしているほか、ステークホルダーや学生の意見を取り入れる仕組みを導入し、事業実施のPDCAサイクルが実質化するように努めている。具体的には、アドバイザリーボードメンバーによる各種助言のほか、毎年度末に開催する事業成果発信シンポジウムを活用し、教育改革や授業改善に関する意見聴取や新規提案を受ける場としている。これらの機会を通して、専門家による外部評価とは違う観点からの評価を得られるとともに、事業取組の客観性を担保することができ、適切な自己評価に資している。

本事業では、検証可能かつ明確な目標を指標設定して、各種取組を推進している。毎年度作成する自己点検・評価報告書『KU-DP アニュアルレポート』では、当該指標に基づく定量的または定性的なエビデンスを明示しながら、当該取組を分析・検証している。また、プログラム企画実行委員会及び教学マネジメントセンターでは、学生授業評価アンケートやルーブリックを活用した学修成果の可視化を中心に、各年度の経年変化や多角的な分析を通して、改善・充実に取り組んでいる。さらには、他の DP 事業採択校の取組、関連する国内外の文理融合教育等に関する情報収集に努め、本学の DP 事業の進捗状況や独自性について比較検証しながら、さらなる事業推進を図っている。

特に、令和 3 年度からは、内部評価と外部評価を連携させながら、評価体制を強化・充実した。外部評価で受けた講評やコメントを重視し、翌年度の事業計画に最大限活用する PDCA サイクルを構築（右図参照）している。



図表 II-3 事業取組の好循環サイクル（質保証）の概要



具体的には、外部評価を受けた翌年度最初のプログラム運営委員会及びプログラム企画実行委員会において、外部評価委員からの講評やコメントに関する対応策を作成し、具体的な活動計画を立案するようになった。このことにより、事業取組の改善・充実に積極的に取り組むことができるようになり、次回の外部評価委員会における事業報告項目が明確化されることとなった。外部評価を活かした PDCA サイクルを軸とすることで、事業取組の改善点が明確化し、かつ、改善方策の方向性が具体化され、事業全体の進捗状況が一層可視化された。なお、毎年度の外部評価では、評価の観点を事前に提示し、当該観点に沿ったエビデンスを準備し、各種検証を行うこととしている。

### 【評価体制（外部評価）及び令和 4 年度取組概要】

金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP）では、適切な進捗管理と改善のため、外部評価委員として、事業内容に精通した高等教育専門家のほか、学校教育関係者、企業関係者に委嘱している。外部評価は、毎年度作成するアニュアルレポート（自己点検・評価報告書）をもとに、外部評価委員が事業の進捗状況や補助金の執行状況を評価する形式で行う。令和 4 年度の外部評価については、以下に掲げる対象項目及び観点に沿って行う。

#### 《外部評価の対象項目》

- (1) 事業全体に関する取組
  - ① 事業実施体制
  - ② 学内における事業取組の進捗・成果
  - ③ 学外に向けた事業取組の情報発信・波及
  - ④ 幹事校としての取組状況
- (2) 教育プログラム開発と学修成果の取組（融合学域、先導 STEAM 人材育成プログラム、共通教育科目 GS 科目・学域 GS 科目など）
  - ① 融合学域の取組状況
  - ② 先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）の取組状況
  - ③ 共通教育科目 GS 科目・学域 GS 科目によるリベラルアーツ教育・STEAM 教育の取組状況
  - ④ 上記の教育プログラム開発を通じた学修成果の状況
- (3) 教学マネジメント体制とその取組
  - ① 教学マネジメントセンターの取組状況
  - ② 教学マネジメント関連の FD・SD、教学 IR の取組状況
  - ③ アカデミック・アドバイジング等の学修支援体制の整備状況

### 1.3 本事業プログラムを通じた全学的なマネジメント改革への対応状況

#### (1) 全学的教学マネジメント体制の構築

令和 2 年度の本事業採択を契機に、全学的な教学マネジメント改革を推進するため、国際基幹教育院に設置されていた FD 支援組織である高等教育開発・支援部門を発展的に解消し、教育担当理事直下に教学マネジメントセンターを新たに設置することで、全学的視点



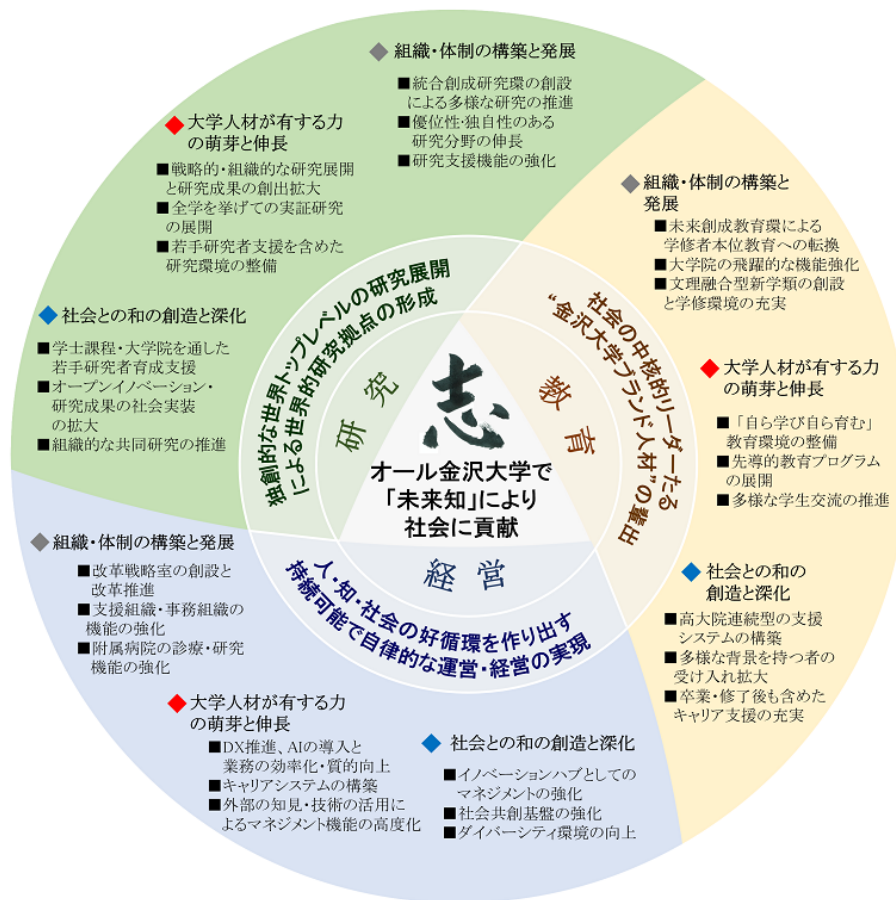
に立った FD・SD 活動の充実に加え、教育成果・学修成果の把握・可視化を徹底するために、教学 IR 機能を強化した。令和 3 年度には、教育担当理事の指示のもと、学生授業評価アンケート及び卒業・修了者アンケートの大幅な見直しに加え、卒業・修了後アンケートを新たに実施することで、入口から出口にかけてのエンrollment・マネジメントを意識した教育・学修データ活用による教学マネジメントのための環境整備を図ることができた。令和 4 年度には、学士課程教育・大学院教育を対象に、3つのポリシーに基づく学位プログラムレベルの教学マネジメントの強化を進めた。

教学マネジメントセンターは、本事業が掲げる STEAM 教育の全学展開の司令塔として、学長・理事のリーダーシップのもと、「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム運営委員会」及び「プログラム企画実行委員会」での企画立案及び執行管理を掌っている。STEAM 教育のカリキュラム・マネジメントでは、学校教育や地域・企業等のステークホルダーと協働した高大連携やインターンシップ等の取組を通して、相互評価しながら人材育成の質向上を図っている。

また、学修者本位の教育の実現に向け、本事業取組をエンジンとして、教員・職員・学生が協働した「教職学協働」の仕組みを取り入れ、全学的な教学マネジメント体制に波及させる。具体的には、KU-STEAM 学生スタッフを本事業に参画させながら、先導 STEAM 人材育成プログラムにおける授業サポーターとしてピア・サポート活動に従事させ、受講者が「自ら学び、自ら育む」自律的学修者として成長する支援を行っている。教員によるアカデミック・アドバイジングと学生同士によるピア・サポートを融合した学修支援モデルを確立し、全学的な教学マネジメント体制を強化している。併せて、ICT 技術の活用により「個別最適化した学修」の実現に向け、ポストコロナ時代の新たな教育手法の実現・開発を目指し、デジタルコンテンツ・VR 教材の活用等、教育 DX の推進にも取り組んでいる。

## (2) 学長のリーダーシップによる迅速かつ強力なガバナンス改革

本学では、世界の潮流を見据え、国の動向とも連動しながら、学長の強いリーダーシップによるガバナンス強化と戦略的な大学マネジメントを基盤に、「地域と社会に開かれた教育重視の研究大学」を基本理念とし、機能強化に向けた大学改革を推進してきた。その行動計画として平成 26 年度に策定し、改革の進捗を踏まえ、以降 2 年おきに改定を重ねた「YAMAZAKI プラン」に基づき、数多くの成果を挙げてきた。令和 2 年度に新たに策定した「YAMAZAKI プラン 2020～Next Stage～」では、「全学的な教育方法、教育支援、教育システムの開発・普及」を掲げ、その取組として「国内外の動向調査に基づく、STEAM 教育、遠隔（オンライン）授業、対面授業と遠隔授業の組み合わせ、アクティブ・ラーニング、アダプティブ学修、授業英語化、モジュール化に焦点をあてた各種 FD 研修会の実施と検証」が明文化され、融合学域をはじめ、文理融合型教育組織の創設などの行動計画が本事業を一つのエンジンとして推進された。さらに、令和 4 年度には、和田新学長による「金沢大学未来ビジョン『志』」（図表 II-4 参照）にその精神が継承され、学長が機構長を務める「グローバル人材育成推進機構」の下で事業全体を運営する学内体制により、学長主導で迅速かつ強力に大学全体の教学改革を断行している。



図表 II-4 和田新学長体制による金沢大学未来ビジョン『志』の概要

本事業では、社会の変化に対応し、学問領域の壁を越えた幅広い知識と深い専門性を併せ持つ社会変革先導人材を育成するため、文理融合型の教育組織・教育課程である「融合学域・先導学類」を令和3年4月に設置したことに加え、令和4年4月には第2の学類「観光デザイン学類」を新たに設置した。さらに、令和5年4月には、第3の学類「スマート創成科学類」を設置し、学生受け入れを始めている。本学が推進する文理融合教育の動きは、学士課程教育に留まらず、大学院教育にも波及させるため、令和4年度から研究科横断型の大学院GS科目の拡充を図っている。

以上のとおり、本事業で新たに設置した「教学マネジメントセンター」を司令塔として、学士課程教育のみならず、大学院教育を含めた全学的な教学マネジメント改革に邁進している。

## 2. 数値目標の達成状況

令和 5 年度は、融合学域創設 3 年目であり、第 3 の学類であるスマート創成科学類の学生受入れを開始した年度であるとともに、文理融合型教育の全学展開を目指す先導 STEAM 人材育成プログラムの本格実施、さらには、本事業運営の司令塔である教学マネジメントセンターが整備を進める教学マネジメント体制の強化や教学 IR 環境の運用を展開した年度であった。

融合学域先導学類の学生募集では、令和 5 年度において入試広報を強化し、広報専門スタッフを新たに配置し、融合学域 NEWS の発行、高校訪問、母校訪問、入試説明会等の多様な募集活動を積極的に展開することで、令和 6 年度入学者選抜のうち、一般選抜の志願状況が前年度を上回る 2.44 倍（融合学域全体）となった。特に、先導学類及びスマート創成科学類の文系傾斜区分では、3 倍を超える倍率となった。

令和 4 年度に引き続き、新入生全員へのガイダンスや各種説明を徹底したことから、令和 5 年度には「本事業参画学生数」が 5,108 名、「先導 STEAM 人材育成プログラム・プログラム説明会参加者数」は 2,103 名、「アカデミック・アドバイザー面談数」は 789 回となり、実績値が目標値を大きく上回る結果となった。特に、先導 STEAM 人材育成プログラムのうち、導入科目「融合先導知実践演習 A」、発展科目「融合先導知実践演習 B」「融合先導知実践演習 C」は多くの学類・学年から履修希望があり、毎回定員を上回る人気振りとなった。また、令和 3 年度から全学域学生対象に開講を展開している共通教育科目 GS 科目 6 群については、全学域学生 6,310 名（延べ）が履修した。これらの科目履修を通じた授業評価アンケートによる学修満足度は「94.7%」（Q1・Q2による暫定値）である。

教学マネジメントセンターでは、前年度に続き、STEAM 教育や教学マネジメントなどをテーマとした全学 FD・SD 研修会を開催するほか、学生・教職員参加型の KU-STEAM ランチョンセミナーを企画し、FD 研修会は計 20 回開催、1,258 名の参加者数を得ることができた。

全学的な STEAM 教育推進に資するブレンド型授業デジタルコンテンツ・教材作成の取組では、KU-STEAM 学生スタッフによる正課教育・正課外活動に関するデジタルコンテンツ作成が進むとともに、従来からの融合学域をはじめ、学術メディア創成センターや VBL（ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー）等との連携を通じた授業デジタルコンテンツ・教材作成を含め、順調に増加している。

また、令和 3 年度後期から先行実施した「先導 STEAM 人材育成プログラム」受講経験者を KU-STEAM 学生スタッフに登録する仕組みを構築することで、ラーニングアドバイザー経験者数の実績を順調に蓄積できる環境整備ができています。

以上のように、令和 5 年度までの目標に対する達成状況は順調であり、補助事業最終年度となる令和 6 年度においても引き続き、STEAM 教育の全学展開を通じた具体的な学修成果の把握や情報発信に努める。

図表Ⅱ-5 数値目標の達成状況（令和6年3月1日現在）

	R2年度		R3年度		R4年度		R5年度		R6年度	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
本事業参画学生数	－	－	50名	1,864名	130名	3,692名	210名	5,108名	290名	－
先導 STEAM 人材育成プログラム・プログラム説明会参加者数	－	－	60名	232名	60名	2,139名	90名	2,103名	90名	－
学修満足度アンケートにおける満足率	－	－	70%	84.5%	80%	90.6%	90%	94.7%	95%	－
アカデミック・アドバイザー面談数	－	－	50回	55回	130回	666回	210回	789回	290回	－
FD 研修会参加者数（本事業実施分）	－	－	100名	1,149名	100名	1,229名	150名	1,258名	150名	－
GS 科目第6群履修者数	－	－	3,600名	3,917名	3,600名	5,405名	4,000名	6,310名	4,000名	－
ブレンド型授業デジタルコンテンツ・教材作成数	5件	10件	20件	28件	40件	76件	60件	123件	80件	－
プログラム受講者でラーニングアドバイザー経験者数	－	－	－	－	20名	24名	40名	47名	60名	－

### 3. 幹事校としての取組実績

本事業の幹事校として、採択校の情報交換・企画検討のための場づくりとともに、採択校間のチームとしての協働力を強化し、採択校同士だけでなく、国内外の高等教育関係者への成果発信、知識集約型社会における人材育成モデル普及を推進している。

令和4年度は、前年度においてメニューⅠ・Ⅱ・Ⅲの採択校9機関が揃い、各採択校の取組内容に関する情報交換を行う体制が整ったことから、「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」全体の相乗効果及び情報発信を一層有効なものとするため、3つのメニューを横断する共通テーマを4つ設けた「共通テーマチーム」を編成し、当該テーマに関する意見交換を重ねた。このような取組を行う過程において、幹事校として、各採択校を個別に訪問し、情報収集を行うとともに、相互の人的ネットワークの充実を図った。

令和5年度において、幹事校として企画実行した取組は以下のとおりである。特に、共通テーマチームによる具体的な活動が積極的に行われ、共通テーマ2では参加大学を会場とした意見交換会（受講学生との意見交換を含む）による相互交流、共通テーマ3では学修支援ガイドラインの公表、共通テーマ4では学修成果の把握と可視化に関する共同主催セミナーの実施などの成果が表れた。

- (1) 採択校連絡会の開催（2回開催（うち、1回オンライン会議、1回対面会議））
- (2) 採択校9大学による合同成果発信シンポジウムの開催（2月27日（火）開催）
- (3) 共通テーマチームの編成と情報交換・情報発信（共通テーマごとに、オンラインまたは対面による会議を開催）

共通テーマ 1 :

知識集約型社会を支える人材育成の価値創出及び持続性のあり方を情報交換・検討

▶金沢大学 (チーム代表), 信州大学, 東京都市大学, 麻布大学, 千葉大学

共通テーマ 2 :

文理融合教育における課題テーマやイシュー設定のあり方を情報交換・検討

▶千葉大学 (チーム代表), 名古屋商科大学, 新潟大学, 金沢大学

共通テーマ 3 :

多様な学びを支援する方法及びシステムのあり方を情報交換・検討

(アカデミック・アドバイジング, ピア・サポート, チューターなど)

▶新潟大学 (チーム代表), 大正大学, 早稲田大学, 金沢大学

共通テーマ 4 :

多様な学びの成果の測定及び社会通用性のあり方を情報交換・検討

▶早稲田大学 (チーム代表), 東京都市大学, 麻布大学, 金沢大学

#### 4. KU-DP 事業を通じた人材育成エコシステムの構築

本学では、平成 20 年度の学域・学類制の導入に始まり、平成 28 年度の国際基幹教育院の設置、平成 30 年度の国際基幹教育院総合教育部の設置を通じたレイトスペシャライゼーションの導入、さらには、令和 3 年度入学者選抜から全学類での後期日程廃止といった、一貫した教育改革を通して、学修者本位の教育の理念のもと、伝統的なディシプリンを超えた柔軟性ある教育プログラム提供と、学生が主体的に進路選択できる機会提供を図ってきた。本学がリードしてきた教育改革の積み重ねの集大成が、本事業で推進する第 4 の学域である「融合学域」の設置と全学域学生を対象とする「先導 STEAM 人材育成プログラム」の開設を通じた、文理融合・分野横断による STEAM 教育の推進によるイノベーション人材育成である。本事業では、その取組を学内外に波及させていることで、人材育成の川上である「学校教育」から川下である「就業」へと繋がる知識集約型社会を支える人材育成のための協働型エコシステムの構築に尽力し、生涯学び続けられる Well-Being な社会のために貢献できる人材を育成することにある。

具体的には、融合先導知概論や融合先導知実践演習を軸としたプロジェクト型学修の推進を通して、高等学校での必修科目である「探究学修」から大学・大学院での「STEAM 教育」に繋がる高等学校・大学・大学院接続型教育の実現を推進している。具体的には、先導 STEAM 人材育成プログラムの導入科目「融合先導知実践演習 A (ちょこっとマイプロジェクト)」では、高等学校での探究学修コンテンツを活用した授業設計を行っているほか、高校生と大学生・大学院学生が学び合う探究・STEAM フェスタを実施した。既に、高大接続コア・センター主催のラウンドテーブルを通じて、参加した高校生に本事業の PR を行うなど、高大連携の取組を進めている。

一方、地域や企業等が抱える社会課題について社会人と一緒に考え、提案するワークショップ型授業、地域や企業等の現場で社会人と一緒に実践、行動する課題解決型インターンシップ (PBI) を通じた大学・社会接続型教育の実現を推進している。具体的には、融合学域や先導 STEAM 人材育成プログラムでは、地域や企業等の関係者が学生と一緒に議論し提

案アイデアをまとめ、当該地域や企業等の諸活動に反映させる実践型授業を提供するほか、実践インターンシップでは文理融合・分野横断のテーマについて社会人と協働しながらカタチにする「0 から 1 を創り上げる」挑戦・実践力育成のインターンシップを提供している。

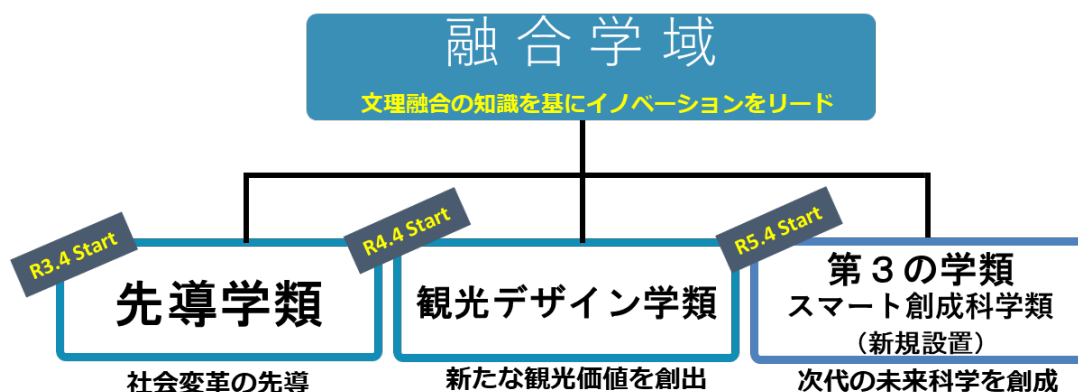
### Ⅲ. 融合学域に関する取組実績

## 1. 融合学域 3 学類の取組概要

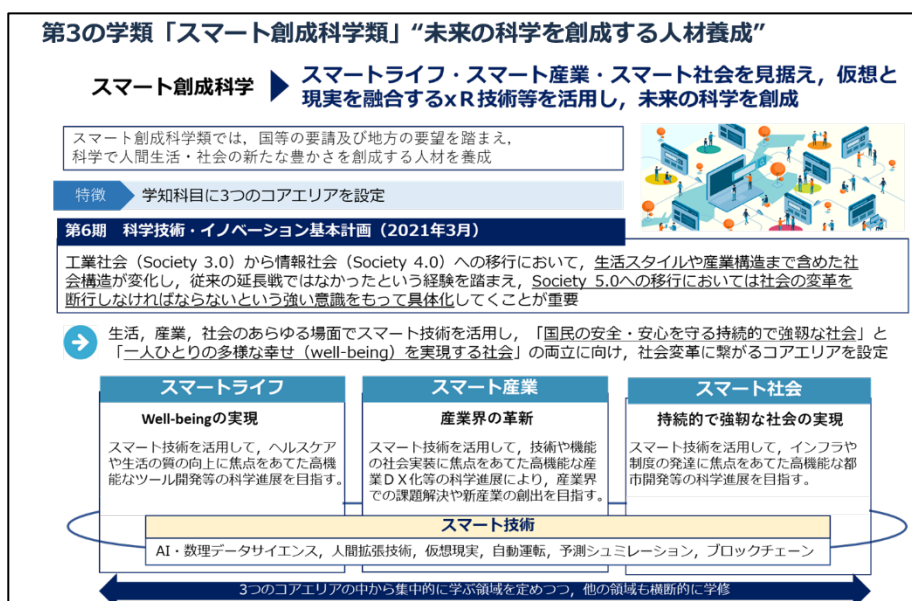
### 1.1 融合学域第 3 の学類の設置と入学定員増

令和 5 年度、融合学域では、スマートライフ・スマート産業・スマート社会を見据え、仮想と現実を融合する xR 技術等を活用し、未来の科学を創成する人材の育成を目指し、第 3 の学類であるスマート創成科学類を設置した。融合学域では、先導学類（令和 3 年度設置）、観光デザイン学類（令和 4 年度設置）、スマート創成科学類（令和 5 年度設置）を順次、設置申請し、認可・開設してきた。

また、観光デザイン学類では、文部科学省「令和 6 年度 魅力ある地方大学の実現に資する地方国立大学の定員増」事業に選定され、令和 6 年度から入学定員が 35 名増員し 55 名となるほか、スマート創成科学類では、文部科学省「大学・高専機能強化支援事業（高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援）」の採択を受け、令和 6 年度から入学定員が 35 名増員し 55 名となる。



図表Ⅲ-1 融合学域における 3 学類



図表Ⅲ-2 融合学域スマート創成科学類における人材育成の概要



## 1.2 融合学域の入学者獲得状況

融合学域における令和6年度入学者選抜のうち、一般選抜の志願状況は図表Ⅲ-3のとおりであり、先導学類及びスマート創成科学類の文系傾斜では志願倍率は3倍を超えるなど、全体として前年度を上回る志願倍率となった。融合学域全体の志願倍率2.44倍は、大学全体の志願倍率2.25倍を上回っている。

図表Ⅲ-3 令和6年度融合学域入学志願状況（一般選抜）

学 域	学 類 等		前 期 日 程		
			募集人員	志願者数	志願倍率
融 合 学 域	先 導 学 類	文系傾斜	20	62	3.10
		理系傾斜	20	45	2.25
		小計	40	107	2.68
	観 光 デ ザ イ ン 学 類	文系傾斜	26	62	2.38
		理系傾斜	14	23	1.64
		小計	40	85	2.13
	ス マ ー ト 創 成 科 学 類	文系傾斜	15	48	3.20
		理系傾斜	27	58	2.15
		小計	42	106	2.52
	計		122	298	2.44

融合学域では、英語総合選抜型、社会人選抜や在外留学生選抜といった同学域独自の入学者選抜をはじめとした多様な入試を実施している。令和5年度入学者は、先導学類49名、観光デザイン学類21名、スマート創成科学類19名であり、このうち、北陸3県出身者は25名(28.1%)で(大学全体の平均は42.9%)、広く全国から学生が結集した。入学者アンケートで約1/3の学生(29名)が、融合学域への入学理由に「文理融合、幅広い学修」を挙げているほか、同アンケートで半数以上の学生(54名)が卒業後の進路として「産業界での開発者・管理者」「国際機関等でのグローバル要員」「新分野でのアントレプレナー」を掲げるなど、「イノベーションをリードする」という融合学域のキャッチコピーに合致した、アクティブで意欲の高い学生が多い印象である。

図表Ⅲ-4 令和5年度融合学域先導学類入学者選抜試験実施状況

区分		募集人員	志願者	志願倍率	受験者	合格者	競争倍率	辞退者	追加合格者	入学者	
一般選抜	前期日程	文系傾斜	20	36	1.8	36	28	1.3	3		25
		理系傾斜	20	23	1.2	21	21	1.0	1		20
	一般計	40	59	1.5	57	49	1.2	4	0	45	
特別選抜	KUGS特別	総合型Ⅱ	6	4	0.7	4	4	1.0			4
		英語総合Ⅱ	若干名	0							0
	超然特別	A-lympiadⅠ	若干名	0							0
		超然文学	若干名	0							0
	在外留学生推薦	3	0							0	
	社会人	若干名	1		0					0	
	帰国生徒	若干名	0							0	
	国際バカロレア	若干名	0							0	
	私費外国人留学生	若干名	0							0	
	特別計	-	5	-	4	4	1.0	0	0	4	
合計		49	64	-	61	53	1.2	4	0	49	

※令和6年4月に、一括入試入学者(1年次は総合教育部所属)から6名が2年次に加わる予定。  
令和7年4月に、編入学試験合格者から25名が3年次に加わる予定。

図表Ⅲ-5 令和5年度融合学域観光デザイン学類入学者選抜試験実施状況

区分		募集人員	志願者	志願倍率	受験者	合格者	競争倍率	辞退者	追加合格者	入学者	
一般選抜	前期日程	文系傾斜	12	18	1.5	17	12	1.4			12
		理系傾斜	6	12	2.0	12	6	2.0	1		5
	一般計	18	30	1.7	29	18	1.6	1	0	17	
特別選抜	KUGS特別	総合型Ⅱ	若干名	5		5	4	1.3			4
		英語総合Ⅱ	若干名	0							0
	超然特別	A-lympiadⅠ	若干名	0							0
		超然文学	若干名	0							0
	在外留学生推薦	若干名	0							0	
	社会人	若干名	0							0	
	帰国生徒	若干名	0							0	
	国際バカロレア	若干名	0							0	
	私費外国人留学生	若干名	1		1	1	1.0	1		0	
	特別計	-	6	-	6	5	1.2	1	0	4	
合計		18	36	-	35	23	1.5	2	0	21	

※令和6年4月に、一括入試入学者(1年次は総合教育部所属)から2名が2年次に加わる予定。  
令和7年4月に、編入学試験合格者から15名が3年次に加わる予定。

図表Ⅲ-6 令和5年度融合学域スマート創成科学類入学者選抜試験実施状況

区分		募集人員	志願者	志願倍率	受験者	合格者	競争倍率	辞退者	追加合格者	入学者
一般選抜	前期日程	文系傾斜	6	10	1.7	9	6	1.5		6
		理系傾斜	12	26	2.2	26	12	2.2		12
	一般計	18	36	2.0	35	18	1.9	0	0	18
特別選抜	KUGS特別	総合型Ⅱ	若干名	0						0
		英語総合Ⅱ	若干名	0						0
	超然特別	A-lympiad I	若干名	0						0
		超然文学	若干名	0						0
	在外留学生推薦	若干名	0						0	
	社会人	若干名	1		1	1	1.0			1
	帰国生徒	若干名	0						0	
	国際バカロレア	若干名	0						0	
	私費外国人留学生	若干名	0						0	
	特別計	-	1	-	1	1	1.0	0	0	1
合計		18	37	-	36	19	1.9	0	0	19

※令和6年4月に、一括入試入学者（1年次は総合教育部所属）から2名が2年次に加わる予定。  
令和7年4月に、編入学試験合格者から15名が3年次に加わる予定。

融合学域では、令和5年10月より、広報専門スタッフを置き、広報戦略の強化を図った。新たに取り組んだ広報活動は下記のとおりである。

■融合学域 NEWS を発行

学域や学類の名称からは中身について想像しがたい、よくわからない、という高校生や保護者たちが多くいるという現状がある中、定員増と KUGS 特別入試の出願資格が一部広がったことを広く通知するため、身近な言葉を使って作成した「融合学域 NEWS」（A4 両面）を、北陸3県の全高校（139校）に送付した。



図表Ⅲ-7 金沢大学融合学域 NEWS

#### ■高校訪問

上記「融合学域 NEWS」の送付時に、高校に伺い融合学域や入試の説明をさせていただく旨記した案内状を同封し、希望があった高校、また、新潟、長野、愛知等の本学域への受験や入学につながりそうな高校に、融合学域教員と広報専門スタッフが赴き（もしくは Zoom を利用し）説明を行った。訪問高校数は、33 校。

融合学域についての理解を高校の進路指導教員に直接深めてもらうことで、生徒への志望意向を間接的に促すことができた。

#### ■母校訪問

在学学生の希望者に、帰省する機会に母校を訪問し、教諭や後輩たちに、融合学域や学類のこと、実感している融合学域の大学生としての実感などを話しに行ってもらった。なお、学生の経験のためにも、高校へのアポ取りから学生自身に行ってもらい、往復旅費を支給した。令和 6 年 2 月末現在、6 校の母校訪問が実施済みである。

#### ■融合学域クリアファイルを作成

共通テスト翌日に実施した「融合学域オンライン入試説明会」の開催通知が記載された融合学域クリアファイルを作成し、訪問した高校に対して、訪問の御礼文章を添えて 3 年生の人数分 8,000 部を送付した。



図表Ⅲ-8 融合学域クリアファイル（オンライン入試説明会開催通知を明記）

#### ■メールなどによる融合学域案内の送付

高校訪問をした星稜高校は全生徒タブレットを所持し大学案内や Newsなどをタブレット配信されているので、「融合学域案内」と「融合学域オンライン説明会」の開催通知を全生徒と保護者向けにオンライン配信をしてもらった。また、訪問できなかった遠隔地の探究学習に注力している 90 校に対しては、メールにて「融合学域案内」「融合学域オンライン説明会」の開催通知、地震による受験への影響がないことのお知らせメールを 3 回配信し、融合学域の認知を促した。

### 1.3 融合学域における学生の経済的支援の取組

多様な学生確保に向け、社会人及び外国人留学生を対象とした大学独自の奨学制度を導入している（図表Ⅲ-9 参照）。対象となる学生には、入学料、授業料の全額免除に加え、卒業後に地域定着する留学生に対しては、奨学金（10万円/月）の給付や宿舍費の支援を実施する経済的支援策を構築し、学修に専念できる環境を整備している。令和4年度に4名、令和5年度に9名の学生が融合学域独自奨学制度の支援を受けている。

図表Ⅲ-9 融合学域独自奨学制度一覧

入試成績優秀者修学支援制度
融合学域では、学修に専念できる環境を整えることを目的として、本学入学者選抜試験（3年次編入学試験を含む。）において優秀な成績で合格した外国人留学生及び社会人を経済的に支援する、入試成績優秀者修学支援制度を設けています。
地域定着外国人留学生修学支援
優秀な成績で合格し、日本での就職を目指す外国人留学生には、入学時からビジネス活用や日本語能力獲得を重視しながら融合学域の教育課程を学修する「文理融合の地方創生イノベーションを共修するブリッジングプログラム」を指導し、学費免除や給付型奨学制度、学生・留学生宿舍費助成等の支援を行います。
社会人修学支援
優秀な成績で合格した社会人には、入学料の全額及び授業料の全額を免除します。

## 2. 融合学域のカリキュラム概要

### 2.1 融合学域の学修目標設定

融合学域3学類では、「三つの方針」を通じた学修目標の具体化を図っており、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー、AP：Admission Policy）において求める人材像を明確化しているほか、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー、DP：Diploma Policy）において学士（学術）の学位を取得するための達成すべき学修成果を具体的に明示している。DPに定めた学修成果の達成のため、教育課程編成方針（カリキュラム・ポリシー、CP：Curriculum Policy）を定め、かつ、カリキュラムを構成する各授業科目の学修目標とDPとの関係性を明確化したカリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーを学生に明示している。

融合学域では、令和5年度より「学びの計画書」の充実を図り、DP達成度可視化システムの運用を始めた（詳細は後述）。このことにより、学年・学期ごとにおけるDP達成度を参照しつつ、学生自らの学修状況の把握と振り返り、さらには、次期の学修計画に活用する自律学修支援の環境が整っている。

#### 先導学類 入学者受入方針

- ・様々な分野の知識を学び、それらを統合して課題発見・解決を率先したい人
- ・多様な制度・慣習等に知的関心を有し、より良い未来社会づくりに貢献したい人
- ・最先端の学知を連携・融合し、社会変革に資する新たな先導に挑戦したい人

#### 先導学類 学位授与方針

- ・社会変革を先導するための多面的な最新の知見を学び、それを理解する力
- ・未来課題を理解し、ヒト・モノ・コトに関する多様な情報を収集・分析する力
- ・総合知を背景に課題解決や社会展開に向けて論理的に考える力
- ・語学や異文化に関する知見を有し、自己の使命を果たすべく、国際社会で積極的に発信する力
- ・事業創造等に高い意欲を持ち、主体的・積極的に挑戦していく姿勢や発想、行動する力

#### 観光デザイン学類 入学者受入方針

- ・様々な分野の知識を学び、それらを統合して課題発見・解決を率先したい人
- ・多様な制度・慣習等に知的関心を有し、より良い未来社会づくりに貢献したい人
- ・最先端の学知を連携・融合し、観光に資する新たな価値創出に挑戦したい人

#### 観光デザイン学類 学位授与方針

- ・観光価値をデザインするための多面的な最新の知見を学び、それを理解する力
- ・未来課題を理解し、ヒト・モノ・コトに関する多様な情報を収集・分析する力
- ・総合知を背景に課題解決や社会展開に向けて論理的に考える力
- ・語学や異文化に関する知見を有し、自己の使命を果たすべく、国際社会で積極的に発信する力
- ・価値創出等に高い意欲を持ち、主体的・積極的に挑戦していく姿勢や発想、行動する力

#### スマート創成科学類 入学者受入方針

- ・様々な分野の知識を学び、それらを統合して課題発見・解決を率先したい人
- ・多様な制度・慣習等に知的関心を有し、より良い未来社会づくりに貢献したい人
- ・最先端の学知を連携・融合し、未来に資する新たな科学創成に挑戦したい人

#### スマート創成科学類 学位授与方針

- ・未来の科学を創成するための多面的な最新の知見を学び、それを理解する力
- ・未来課題を理解し、ヒト・モノ・コトに関する多様な情報を収集・分析する力
- ・総合知を背景に課題解決や社会展開に向けて論理的に考える力
- ・語学や異文化に関する知見を有し、自己の使命を果たすべく、国際社会で積極的に発信する力
- ・スマート創成等に高い意欲を持ち、主体的・積極的に挑戦していく姿勢や発想、行動する力

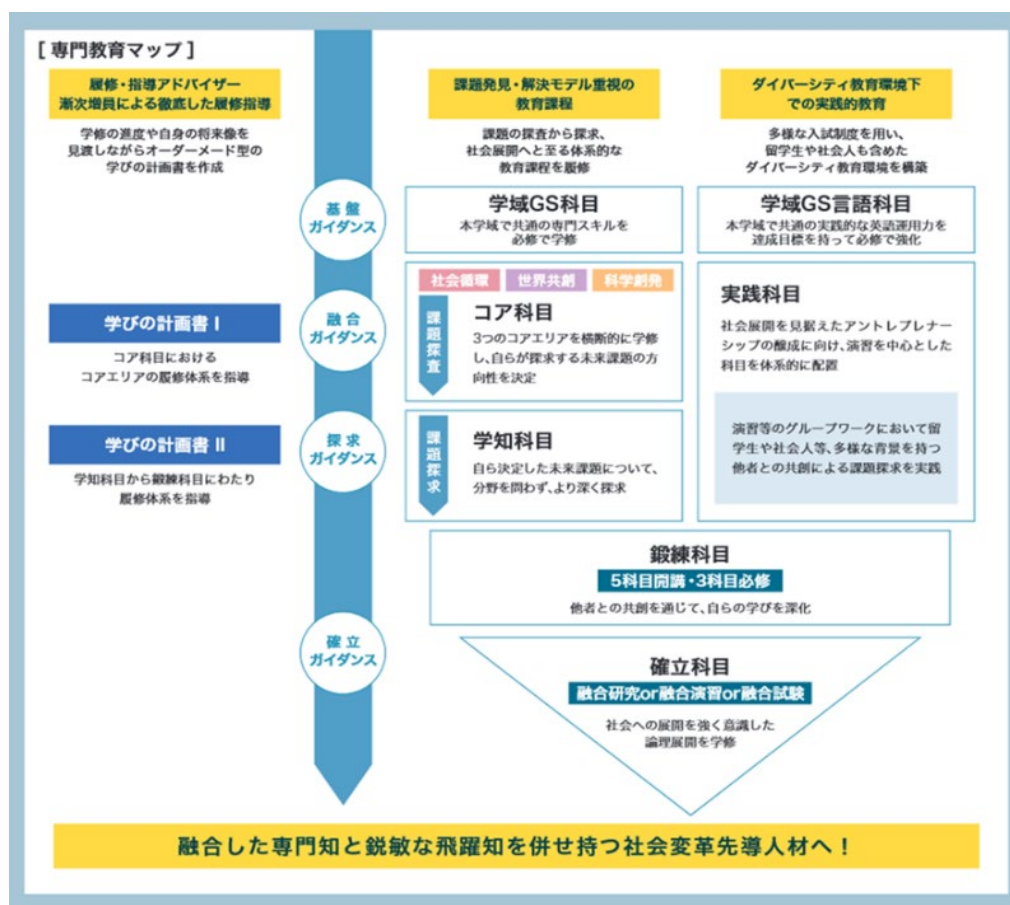
図表Ⅲ-10 融合学域 3 学類の入学者受入方針、学位授与方針

## 2.2 融合学域の教育課程等

融合学域では、3 学類ともに、教育課程編成方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、卒業時に学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる能力を修得できるよう、「基礎」「融合」「探求」「確立」という四つのステップに沿った教育課程を編成している。同学域では、担当教員間の FD 活動を通して、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー、さらには、履修モデルを作成し、適宜、学生に明示している。また、各授業科目シラバスの記載、ディプロマ・ポリシーと各授業科目の学修目標の関係について、全学の新任教員説明会等の FD 研修で周知徹底するとともに、毎年度作成する FD 活動報告書を通して、大学全体と各学域・学類で検証する仕組みを整えている。

学生は、下図の専門教育マップのとおり、履修・指導アドバイザーによる履修指導を受けながら、オーダーメイド型の「学びの計画書」を作成し、自らの学修を進める仕組みとなっている。





図表Ⅲ-11 融合学域先導学類における専門教育マップ

例えば、先導学類では、専門教育における各科目群の具体的な内容は以下のとおりである。

- アントレプレナーシップを醸成し、社会展開に向けた発想力と実践力を獲得するため、「実践科目」を設け、演習等を中心とした科目を配置。
- 社会変革に向けて必要となるイノベーションの根幹と、未来課題に係る多面的な最新知見を修得するため、「コア科目」を設け、さらに3つのコアエリアに区分し、科目を配置。
- 未来課題の解決に資する知見を獲得するため、「学知科目」を設け、多様な分野の科目を配置する。
- 国際社会における最新の知見や他者との共創による新たな知見の獲得に向け、「鍛練科目」を設け、海外留学や国際インターンシップ、グループワークを行う演習等を中心とした科目を配置。
- 修得した多分野にわたる知見を基に課題発見・解決や事業創造を含めた社会展開を主体的・計画的に行うため、「確立科目」を設け、課題発見・解決や事業創造を含めた社会展開を行うための手法や理論をまとめる科目を配置。

先導学類における具体的な授業実践の事例として、1年次第1クォーターに開講される実践科目「アントレプレナー基礎（必修）」は、地域でのフィールドワークを取り入れた課題発見・解決型授業が繰り返され、最終総括として、当該地域に対して提案プレゼンを行っている。今後の学びの出発点となるアントレプレナー・マインドセットの第一歩と位置付ける必修科目であり、アントレプレナー演習Ⅰ/Ⅱ、アントレプレナーインターンシップ、さらには、アントレプレナーコンテストなど、その後も体系的な科目編成としアントレプレナーシップの醸成を行うカリキュラム構成となっている。

令和5年度から開講が始まった鍛練科目に当たる「先導プロジェクト演習」について、令和6年2月に成果発表会が行われ、個人またはグループによる学生発表と質疑応答が活発に行われた。



図表Ⅲ-12 融合学域における「先導プロジェクト演習」発表会の風景

### 3. 融合学域における学修の進捗状況・達成状況（学修成果の把握・可視化）

融合学域では、先導学類1期生が3年次となる中で、学修成果の把握・可視化について、「(1)「学びの計画書」による学修の進捗状況・達成状況の把握・可視化を通じた自律学修機能」「(2) DP（ディプロマ・ポリシー）達成状況や履修科目のバランス等を一覧にて可視化する環境整備」「(3) 外部アセスメントテストの導入により、思考力・態度・行動力を測定し、全国平均との比較」の3項目を中心に環境整備を進めた。

#### 3.1 「学びの計画書」システム整備

融合学域では、学修者自らが文理融合・分野横断の学びについて計画し、自己成長していくことを人材育成の柱としている。そのため、「学びの計画書」を通して、学生が自分自身で学びについて考える機会を設けている。具体的には、1年次の学年末に作成する「学びの計画書」ではコア科目におけるコアエリアの履修体系の説明を受け、2年次の学年末に作成する「学びの計画書」では学知科目から鍛練科目にわたり履修体系の説明を受けることとなっている。

「学びの計画書」の目的は、①目標設定と振り返りによる自発的学修モチベーションの向上、②将来像の明確化、③オーダーメイド型の教育、④学生と教員との連携・指導体制の構築、⑤インターンシップや留学も含めた履修計画の5つの事項である。

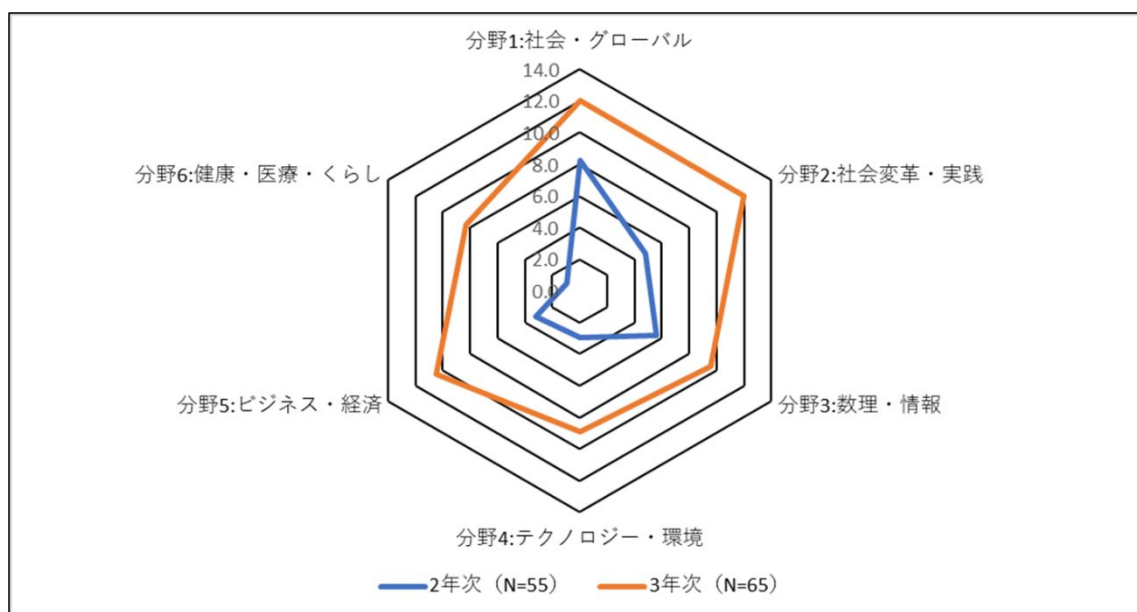


令和5年度には、融合学域に導入した「学びの計画書」について学修ポートフォリオとしてシステム運用できる環境整備を図り、DP（ディプロマ・ポリシー）達成度や履修分野バランスなどを可視化する環境整備を完了した。この環境整備により、学生が自らの学修状況を俯瞰しながら振り返りを行い、アドバイザー教員からの指導助言を受けながら、次期に向けた学修計画立案や目標設定に資するものとなっている。

なお、DP達成度可視化の仕組みについては、令和6年度以降、融合学域以外の他学域への展開を検討している。



図表Ⅲ-13 システム整備した「学びの計画書」ダッシュボード画面



図表Ⅲ-14 先導学類生（3年次・2年次）の「履修分野分布（修得単位数平均）」の推移（「学びの計画書」蓄積データによる分析）

### 3.2 融合学域先導学類生を対象とした外部アセスメントテストの実施

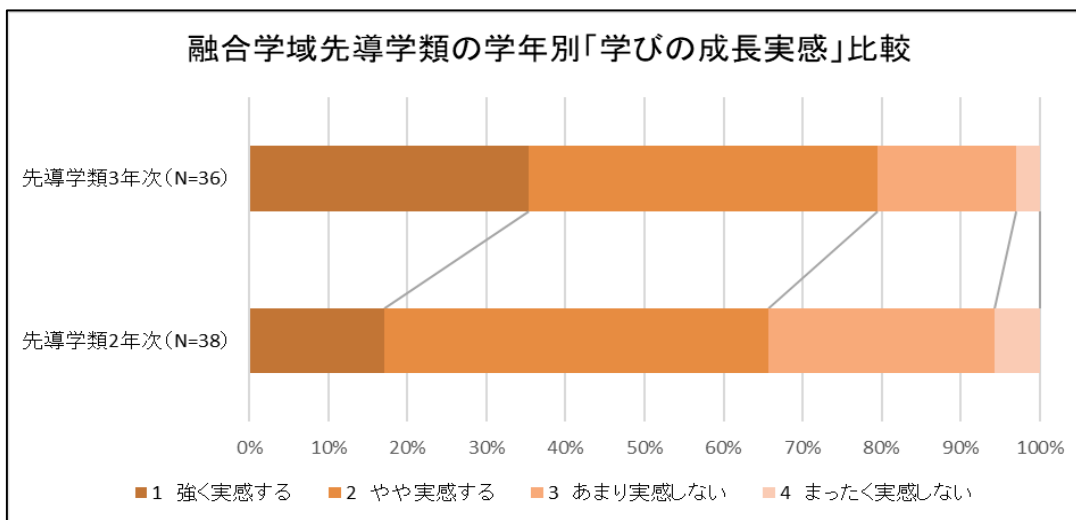
令和5年度より、株式会社ベネッセiキャリア開発の「GPS-Academic」を活用し、融合学域先導学類生（1年次～3年次）を対象に、問題解決に必要な思考力、姿勢・態度、経験に関するアセスメントテストを行っている。先導学類生3年次・2年次の外部アセスメント結果（図表Ⅲ-15）を見ると、全受検者集計平均より概ね高いスコアとなっている。

図表Ⅲ-15 外部アセスメントテスト結果の概要（抜粋）

			問題解決の質と深さを左右する思考力				学びの意欲 (自己評価)	問題解決に向かうための姿勢・態度			問題解決の力を磨くための経験		
			思考力 総合スコア	批判的思考力	協働的思考力	創造的思考力		レジリエンス	リーダーシップ	コラボレーション	自己管理	対人関係	計画・実行
金沢大学	融合学域先導学類	2021入学3年 (N=36)	54.0	53.3	54.8	54.6	74.1	51.8	52.3	49.9	56.7	65.0	56.8
GPS-A	全受検者計	2021入学3年	44.3	44.5	45.5	43.0	64.7	48.6	47.3	48.9	52.2	59.6	55.9
GPS-A	全受検者入試偏差値50～80未満	2021入学3年	44.6	44.8	46.0	43.4	64.6	48.4	47.2	49.0	52.0	59.4	55.8
金沢大学	融合学域先導学類	2022入学2年 (N=38)	52.4	53.2	53.2	51.3	68.6	46.5	48.3	48.4	53.0	58.5	54.4
GPS-A	全受検者計	2022入学2年	42.7	42.9	43.6	41.1	64.5	48.2	46.7	48.4	52.8	58.7	56.2
GPS-A	全受検者入試偏差値50～80未満	2022入学2年	42.8	43.0	43.7	41.2	64.5	48.2	46.6	48.4	52.6	58.6	56.1

注：GPS-Academic（株式会社ベネッセiキャリア提供）全受検者集計より引用。2023年5月末までの受検完了者のうち、2年次28,757人、3年次40,392人のデータを利用（途中集計値）。

また、アセスメントテストと同時に実施している在学生調査における「学びの成長実感」に関する設問の回答結果（図表Ⅲ-16）において、先導学類3年次学生の成長実感が2年次学生に比べ非常に高く、専門教育が進むに従って、学生の学びの深まりが窺える結果となっている。



図表Ⅲ-16 在学生調査における「学びの成長実感」比較

### 3.3 融合学域先導学類生の活躍

令和5年7月13日(木)に金沢大学主催の開催された第1回「ミライ・ソウゾウコンテスト」において、融合学域先導学類3年 工藤柊真さんが「想像部門・最優秀賞」を受賞した。本コンテストは、自由な発想で創造性や意欲に溢れる若者のアントレプレナーシップを醸成するとともに、金沢大学から学生起業家をひとりでも多く輩出することを目的に実施するピッチコンテストである。審査員から講評として「どのアイデアも、金沢大学の、あるいは日本・世界の未来は明るいと感じさせられるプレゼンテーションだった」「これからの時代を見据え、自然環境や持続可能な社会にも配慮したビジネスアイデアとなっていたのが素晴らしい」「心が折れそうな時も、自分の原体験や情熱を忘れずに挑戦し続けてほしい」といった応援のメッセージが送られた。



図表Ⅲ-17 第1回「ミライ・ソウゾウコンテスト」の様子

会社設立登記の手続きが完了しました!

先導学類3年の岡本岳人さんと起業しました!

スタートアップコンテストや大型事業の公募に挑戦!

FitLinX  
Make it connect with

社名「フィットリンクス」には、フィットネス、フィットする、リンクする、融合する、などの意味を込めました。

日本医療研究開発機構(AMED)の公募事業に応募し、書類審査を突破したことは大きな自信になりました。

認知症予防の啓蒙啓入  
2025年 65歳以上の認知症患者数 約700万人

図表Ⅲ-18 融合学域先導学類の学生による起業実績

#### 4. 融合学域先導学類における留学・国際インターンシッププログラム

融合学域先導学類では、学年進行に伴い、令和5年度において、1期生である3年次学生が留学・国際インターンシップに参加し、既に、3分の2の学生が受講を終了している。海外留学プログラムの開発において、融合学域担当教員が22プログラムを大学公式プログラムとして開設し、融合学域に限らず、全学域学生に公開したプログラムとなっている。渡航先は、アジア、北米、欧州、豪州の多岐にわたっている。

融合学域では新年度が始まる前に、海外留学WGの教員が融合学域の対象学生全員にガイダンスを実施している。令和5年度用には、2月17日と3月29日の2回ガイダンスを実施した。融合学域にとって、令和5年度が留学・国際インターンシッププログラムの運用初年度であったため、実績を積み重ねながら、対象学生へのきめ細かい説明と支援の向上に努めている。

図表Ⅲ-19 融合学域先導学類における留学・国際インターンシッププログラム一覧

	プログラム名	形態	国名	都市名	期間
1	シェネルインクワッシュプログラム in ニュージーランド	語学研修	ニュージーランド	ハミルトン	①2023.9.25～2023.10.6 (2週間) ②2023.12.11～
2	Mission possible or impossible programme in ニュージーランド	語学研修	ニュージーランド	ハミルトン	2024.2.26～2024.3.29 (5週間)
3	インテンシブEAPプログラム in ニュージーランド	語学研修	ニュージーランド	クライストチャーチ	春季休業期間 (5週間)
4	サムライカレービギナーズ体験プログラム	語学研修+インターンシップ	タイ	バンコク	2023.8.9～2023.8.26 (東京2日+タイ2週間)
5	English Adventue Programme in New Zealand	語学研修+インターンシップ	ニュージーランド	ウエリントン	春季休業期間 (3週間)
6	ウーマンボスリーダーシップ育成インターンシッププログラム in ニュージーランド	インターンシップ	ニュージーランド	クライストチャーチ	2023.9.11～2023.10.13 (5週間)
7	チルドレンミュージアムインターンシッププログラム	インターンシップ	アメリカ	ボストン	2023.8.21～2023.9.2 (2週間)
8	深センでの企業支援・製品開発の総合プログラム	インターンシップ	中国	深圳市	2023.8.17～2023.9.21
9	ヨクビーから学ぶスポーツ経営学プログラム in ニュージーランド	インターンシップ	ニュージーランド	クライストチャーチ	2023.9.11～2023.10.13 (5週間)
10	プロフェッショナルインターンシッププログラム in ニュージーランド	インターンシップ	ニュージーランド	オークランド	2023.8.21～2023.10.13 (8週間)
11	七尾プログラム	インターンシップ	タイ	バンコク	夏季休業～春季休業 (7月程度)
12	Independent Internship programmes	インターンシップ	①ニュージーランド ②オーストラリア	①オークランド又はウエリントン ②シドニー又はメルボルン	2023.9.4～2023.10.13 (6週間)
13	台湾インターナショナルスクールでの教育指導実践	インターンシップ	台湾	台中	2023.9.16または17～2023.9.28
14	台湾インターナショナルスクールでの教育指導実践	インターンシップ	台湾	台中	2024.2～2024.3 (2週間)
15	日越国交50周年プログラム	インターンシップ・専門実習	ベトナム	ダナン、ホーチミン、カンター	夏季休業期間 (5週間)
16	ウズベキスタンDX農業プログラム	インターンシップ・専門実習	ウズベキスタン	フェルガナ	夏季休業期間 (5週間)
17	エストニアアントレプレナープログラム	インターンシップ・専門実習	エストニア	タリン	夏季休業期間 (5週間)
18	ブルーカーボンプログラム	インターンシップ・専門実習	タイ、インド	チョンブリー、チェンナイ	夏季休業～春季休業 (7月)
19	ルワンダコミュニティ暗号貨幣プログラム	インターンシップ・専門実習	ルワンダ	キガリ	夏季休業～春季休業 (7月程度)
20	リスタートアッププログラム	インターンシップ・専門実習	タイ、インド	バンコク、チェンマイ、クワハティ、ムンバイ、カンチプラム	夏季休業～春季休業 (7月程度)
21	スタディーツアープログラム in オーストラリア	海外体験実習	オーストラリア	ウーロンゴン	2023.8.21～2023.9.1 (2週間)
22	Global Citizenship through English (GCE) programme	専門実習	カナダ	バンクーバー	2023.9.5～2023.9.22 (3週間)

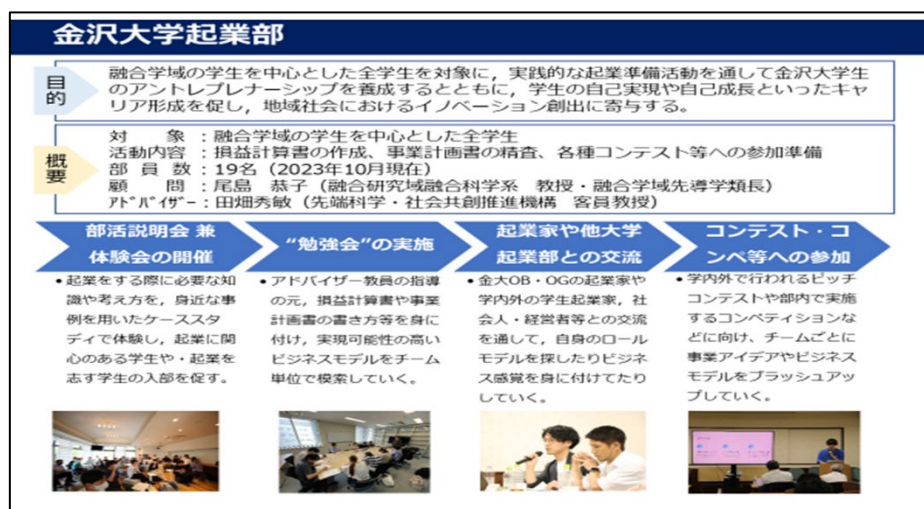
## 5. 融合学域における学生を中心とした各種活動

融合学域における年次を越えた学生交流について、学生受入れが進む中で、学生の自主性が強く発揮され、学生コミュニティの創出を目的とする「融合学域 Student Union」が創設された。令和4年度下半期から、学生による自主企画の交流会が開始し、令和5年度に入り、頻繁に開催されるようになってきている。令和5年度は、既に3回開催され、学生・教職員100名を超える参加者を数えている。このほか、学生同士によるイベント企画・運営、中高生との実践的な課題解決、他大学・他地域との交流が幅広く行われている。

図表Ⅲ-20 融合学域における学生活動の成果

テーマ	日時	内容	参加人数
「1, 2年生交流会」	2022年12月16日（金） 17:30～19:30	2年次の有志が、融合学域1・2年次の全員に声をかけて雑談の場を設けた	約20人
「みんな結局何やってるの？」	2023年5月25日（木） 12:10～13:00	3年次の有志が、融合学域の学生・教職員に向けて自身の活動を紹介（融合学域 Students Union設立）	約50人
「今やっていること、やってきたこと」	2023年7月6日（木） 12:15～13:00	2・3年次の有志が、融合学域の学生・教職員に向けて自身の活動を紹介（融合学域 Students Union企画）	約30人
「夏休み何やった？」	2023年10月12日（木） 13:00～14:30	融合学域の学生が夏休みの活動を紹介（融合学域 Students Union企画）	約40人
「留学イベント」	2023年10月19日（木） 16:30～18:30	留学について先輩の経験を聞きたいと1年生が企画（融合学域 Students Union企画）	約30人

融合学域の学生を中心とした全学生を対象に「金沢大学起業部」が創設され、実践的な起業準備活動を通して金沢大学生のアントレプレナーシップを養成するとともに、学生の自己実現や自己成長といったキャリア形成を促し、地域社会におけるイノベーション創出に寄与する取組を進めている。



図表Ⅲ-21 金沢大学起業部の活動概要

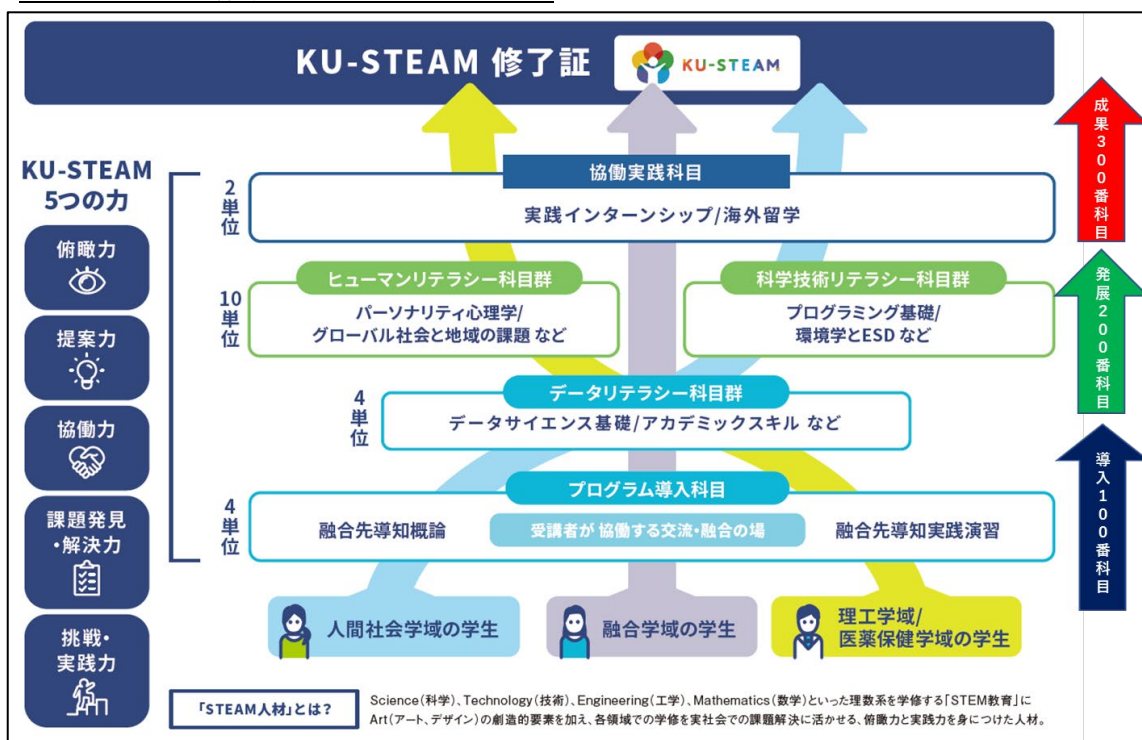
#### IV. 先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) に関する 取組実績



## 1. 先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) のカリキュラム概要

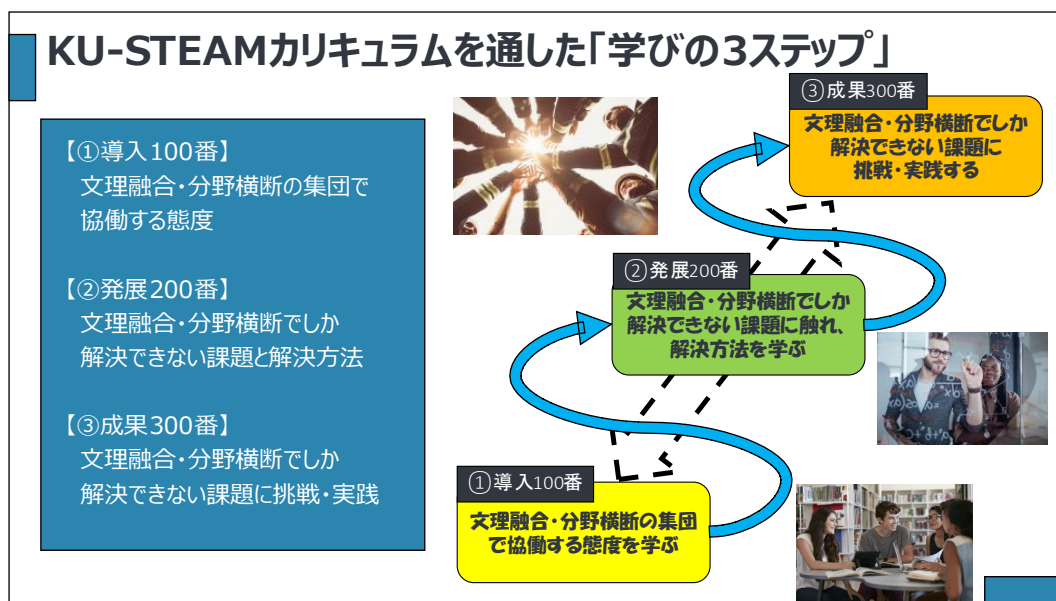
先導 STEAM 人材育成プログラム (通称, KU-STEAM) は, 全学域学生対象の文理融合プログラムである。自身の専門分野に軸足を置きながら, 積極的に他分野の知見を深め, 異分野・異文化協働を実践することによって, 未来課題の解決に挑戦する, 先導 STEAM 人材の育成を目的としている。令和 3 年度において, 当初の計画を前倒しして一部の授業科目の開講を始め, 令和 4 年度には当初予定していた授業開発作業が完了し, 令和 5 年度には開発した授業科目の受け入れ規模の拡充を図った。さらに, 令和 6 年度には共通教育科目 GS 科目 6 群や学域 GS 科目を効果的に活用した新カリキュラムを運用する予定である。

学域学生を対象とした「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」の教育課程では, 図表IV-1 のとおり, 受講生が KU-STEAM の 5 つの力 (Five Competencies) を確実に修得できるよう, 「100 番: 導入」「200 番: 発展」「300 番: 成果」というナンバリングシステムによる階層的カリキュラムを構成している。



図表IV-1 「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」カリキュラム概要

当該教育課程では, 図IV-2 のとおり, **KU-STEAM** カリキュラムを通じた「学びの 3 ステップ」をコンセプトに, **100 番: 導入科目**では多様な分野と学年の学生と一緒に「文理融合・分野横断の集団で協働する態度を学ぶ」, **200 番: 発展科目**では企業・自治体等と協働しながら「文理融合・分野横断でしか解決できない課題に触れ, 解決方法を学ぶ」, **300 番: 成果科目**では実践インターンシップ等により「文理融合・分野横断でしか解決できない課題に挑戦・実践する」を通して, 実社会に適応できる能力を培い, 自らの学びをカタチにする構成となっている。



図表IV-2 KU-STEAMカリキュラムを通じた「学びの3ステップ」概念図

具体的な授業科目としては、STEAM教育の基礎となる思考法やプロジェクトマネジメントを学ぶ導入科目、ビッグデータ処理能力、多様性社会で活躍する人間力、科学技術への理解力をそれぞれ修得するデータ、ヒューマン、科学技術の3つのリテラシー科目群と、社会での挑戦・実践力を鍛える協働実践科目が用意されている。データリテラシー科目群は受講者全員が履修し、理工学域・医薬保健学域の理系学生はヒューマンリテラシーを中心に、人間社会学域の文系学生は科学技術リテラシーを中心にクロスして履修することで自身の専門分野以外のリテラシーも修得する。オンデマンド教材による学修環境を整備することで所属学類の履修への影響を最小限に抑え、主分野の学修時間を十分確保する。また、本事業専任のアカデミック・アドバイザーの支援を得て、学生自らの学びをオーダーメイドできる教育課程となっている。

先導 STEAM 人材育成プログラムの教育課程の特徴を要約すると以下の3点にまとめられる。

### (1) 卒業要件内での科目履修に重点を置いたカリキュラム・マネジメント

受講者の効率的・効果的な学修への配慮，持続可能なカリキュラム設計。

共通教育（教養教育）・専門教育を通じた STEAM 教育の一貫性を重視したカリキュラム設計。

### (2) 文理融合・分野横断の多様な授業コンテンツをオーダーメイド型で学べる学修環境

融合学域の授業コンテンツ，既存の副専攻制度を活かした多様な分野にわたる授業コンテンツを対面・デジタル・ハイブリッド型などで学べる講義を用意し，学生自らの分野・レベルに応じ，オーダーメイド型で学べる学修環境。

### (3) 学びの3ステップによる質保証

当該プログラムにおける 100 番（導入）・200 番（発展）・300 番（成果）の各階層においてアセスメント科目（背骨科目）を設定し，当該科目の中でプログラム・ループリッ



クによる学修成果アセスメントを行う「学びの3ステップ」を通して、学生自らが学び、育むことができる自律性を醸成。

## 2. 先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の学修目標

先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) では、金沢大学版・STEAM 人材として掲げた 3 つの人材像「◆自らの専門分野に加え様々な分野の知識を学び、それらを統合して課題発見・解決を率先できる人材」「◆多様な知性と協働し、人間中心の未来社会づくりに貢献できる人材」「◆最先端の学知を融合し、社会変革に資する新たな創成に挑戦できる人材」を念頭に置きながら、図表IV-3 のようなコンピテンシーマップを作成した。その上で、同プログラムで修得すべき「5 つの力 (Five Competencies)」として「俯瞰力 (融合した専門知)」「提案力 (鋭敏な飛躍知)」「協働力」「課題発見・解決力」「挑戦・実践力」を定めた。



図表IV-3 「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」コンピテンシーマップ

履修証明プログラムである「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」の受講者の学修到達度を測定していくことが大事であり、プログラム・ルーブリック (図表 IV-4) を作成し、100 番・200 番・300 番の各段階におけるアセスメント科目受講時に、自己評価を行いながら、「5 つの力」の達成度や成長実感を把握・可視化することとしている。また、大学側にとっては、プログラム・ルーブリックを通じた学修成果の可視化は、当該プログラムの質保証の点検材料としても活用している。

図表IV-4 「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」ルーブリック

先導STEAM人材育成プログラムで修得すべき「5つの力: Five Competencies」に基づく、プログラム・ルーブリック					
育成する力	説明	Level 1 受動的な態度	Level 2 通常の態度	Level 3 積極的な態度	Level 4 創造的な態度
俯瞰力 (融合した 専門知)	個々の能力・適性に合った専門的な知識とともに、幅広い分野や考え方を俯瞰して、自らの判断をまとめ表現できる力	○提供された資料の基礎的な事柄を理解。 ○与えられたテーマを調べ、自分の言葉で説明。	○与えられたテーマ以外で自ら関連づけて調べ、自ら資料を入手。 ○相互の比較を交えて専門用語を使って説明。	○多くのことに興味・関心を持ち、複数の専門分野から資料を入手・調査。 ○特徴・課題を分類、比較検討し、専門分野の観点から特色を定性的に理解。 ○自分の考えを複数の専門分野の知識を使って表現。	○複数の分野の様々な情報を収集して、与えられたテーマの特色を定量的に理解。 ○数学的・社会的的手法で課題の抽出・分析・整理し、それに対する自分の考えを自分の言葉で表現。
提案力 (鋭敏な 飛躍知)	新しい原理・現象の発見・解明や非連続な技術革新の源泉となる知識を鋭敏に創造できる力	○与えられた課題に興味を持ち、修得した知識、基本的な学力を整理。 ○従来の技術・伝統を深く知ろうとする	○興味を持ったことを自ら調べ、問題解決の手法を理解し、その特徴を活用。	○学んだ手法を活用して様々なアイデアを自分の言葉で表現。 ○そのアイデアを系統的に整理して、新しい試みを提案。	○従来のものとは異なる新しいアイデアを生み出す。 ○それを活用して新しいものを作り上げる計画を立て、実行に移すためのビジョンを提案。
協働力	目標を共有し、その達成に向けて、お互いの能力・立場を理解し合いながら、コミュニケーションをとり、チームメンバーで役割分担し、協働できる力	○基本的なあいさつ・マナーを身につける。 ○チームの中で自分と与えられた役割を理解し他人の話を受ける。	○場面に応じた対応ができ、チーム全体の統率を図ろうとする意欲を持つ。 ○その姿勢を自分の言葉で表現。	○必要な場面で自分の考えを伝える姿勢。 ○チームでの自らの役割を忠実にこなし、チームの結束を促す。	○チームがより効率的に機能するための方法や各構成員が果たすべき役割を理解。 ○相手に対して自分の考えを説明して、具体的な行動に促す。
課題発見 ・解決力	問題に対して自らの知識や技能を駆使して課題を抽出し、解決のためにその課題に向き合う力	○与えられた情報ツールを活用して課題を抽出。 ○過去の課題解決の事例へのアプローチや解決へのプロセスを理解。	○課題解決のため、必要な情報を理解し、複数の情報を分類・整理。 ○自らの関心ある分野に関し、複数の提案ができる。	○収集した情報を分類・整理し、ミクロ・マクロの視点から、その関連性を抽出。 ○説得力ある根拠とともに、複数の提案ができる。	○収集した情報の重要性・関連性を理解。 ○問題のメカニズムの可視化や不特定多数に対するわかりやすいプレゼンテーションができる。
挑戦・ 実行力	身につけた専門知識や技能を様々な場面で活用しようとする積極性。実践に移す行動力	○課題解決のため、自らの置かれている状況、自分が何をすべきかを理解し、取るべき態度を自分の言葉で表現。	○課題解決に自ら当たろうとする姿勢を示す。 ○与えられた役割を理解し、実行に移す。	○課題解決に向けて、自らの役割や取組む分野を限定せず、必要に応じて積極的に関与しようとする姿勢を示す。	○課題解決に向けて、自ら率先して行動することにより、周囲の者も行動へと促す波及効果を示す。

### 3. 「融合先導知概論」「融合先導知実践演習」の取組

先導 STEAM 人材育成プログラムでは、令和 3 年度後期から同プログラム導入科目 (100 番科目) に当たる「融合先導知概論 A (サービスマネジメントと起業教育)」「融合先導知概論 B (地域協働と知識創造)」及び「融合先導知実践演習 (ちょこっとマイプロジェクト)」を共通教育・自由履修科目枠で試行実施した。その受講実績等を踏まえながら、令和 4 年度において、「融合先導知概論 A (サービスマネジメントとアントレプレナーシップ)」(※令和 3 年度開講の授業科目の副題を一部修正)、「融合先導知実践演習 A (ちょこっとマイプロジェクト)」を前年度と同内容でクラス数を増やして開講したほか、新たに、発展科目 (200 番科目) に当たる「融合先導知実践演習 B (アイデアキャンプ)」「融合先導知実践演習 C (総合マネジメントゲーム)」、成果科目 (300 番科目) に当たる「実践インターンシップ」の授業開発を行い、前年度と同内容で年 2 回の開講とクラス数を増やして開講した。先導 STEAM 人材育成プログラムのうち、教学マネジメントセンターにおいて開発・運営するコア科目の実施状況は以下のとおりである。

図表IV-5 令和 5 年度「先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM)」コア科目の開講状況

授業科目名	開講時期	クラス 定員	受講者数
【導入科目:100 番】			
融合先導知実践演習 A(ちょこっとマイプロジェクト)	Q2	48 名	45 名
融合先導知実践演習 A(ちょこっとマイプロジェクト)	Q4	42 名	39 名

【発展科目：200 番】			
融合先導知実践演習 B(アイデアキャンプ)	Q3	20 名	20 名
融合先導知実践演習 C(総合マネジメントゲーム)	Q3	36 名	35 名
【成果科目：300 番】			
実践インターンシップ	Q2	18 名	18 名
実践インターンシップ	Q4	18 名	15 名

### 3.1 【導入科目：100 番】「融合先導知実践演習 A (ちょこっとマイプロジェクト)」

共通教育・自由履修科目「融合先導知実践演習 A (ちょこっとマイプロジェクト)」(Q2 と Q4・集中講義)を開講し、4 学域の 1 年次から 4 年次まで、84 名の受講者が履修した。

この授業では、文理融合や分野融合による学びの価値を実感することを目的に、学域・学類、学年を越えた学生同士の相互理解や相互交流を通じた学習共同体(ラーニング・コミュニティ)の形成を目標とする。さらに、学生自らが「学びの主体者」であることを認識することを強化しながら、自分自身でテーマを発見し、自らの力でアクション(「ちょこっとマイプロジェクト(ちょこプロ)」)を実施することを目指し、これらの学習活動を通して、「融合先導知」に必要とされる融合した専門知と鋭敏な飛躍知を修得することの意義や価値を理解し、実践できることを目標としている。

まず、事前オリエンテーションを開催し、教学マネジメントセンターの林透教授が、授業の概要や評価等に関する説明を行った。次に、Q2 では令和 5 年 6 月 17 日(土)・18 日(日)(Q4 では令和 5 年 12 月 16 日(土)・17 日(日))に対面で、同センターの山下貴弘特任助教が株式会社 mumm 代表/マイプロジェクト福井県事務局の村上 純一郎氏を招き、KU-STEAM 学生スタッフらをサポーターに加えて、自己理解を深め、自らチャレンジしたい実践型のプロジェクトについて計画を考え、受講者同士でフィードバックを行う、ワークショップ形式で行った。最終日となる Q2 では令和 5 年 7 月 22 日(土)(Q4 では令和 6 年 1 月 20 日(土))には、前回の授業から約 1 ヶ月の期間で実際に地域や他者を巻き込んで実践したプロジェクトの振り返り、ネクストアクションを考え共有するワークショップを、対面とオンラインのハイブリッド型で行った。

この授業の学修目標として、(1) 分野の異なる学生と協働し、新しいアイデアを提案することができる。(2) 自己理解を深めながら、挑戦力や実践力を発揮することができる。

(3) 実践したプロジェクトの結果を評価し、振り返りながら、次なるアクションに繋げることができる。ということ掲げた。

受講者からは、「ずっと行動に移したいと思っていたことができ、活動のフィードバックももらえ有意義だった」「他学類の学生とこんなにも深い形で交流し、意見交換をできたことは非常に貴重な機会だった」「自分と向き合うことができ、今やりたいことや、興味あるものに挑戦することが出来た!」「座学では得られない経験値を得ることができた気がする」「相談しやすい環境でのびのびできた」「ひとつの事に熱中することを大学ですと思わなかったから、すごく楽しかった。そして、自分を受け入れてくれる環境があって、嬉しかった」との声が寄せられた。

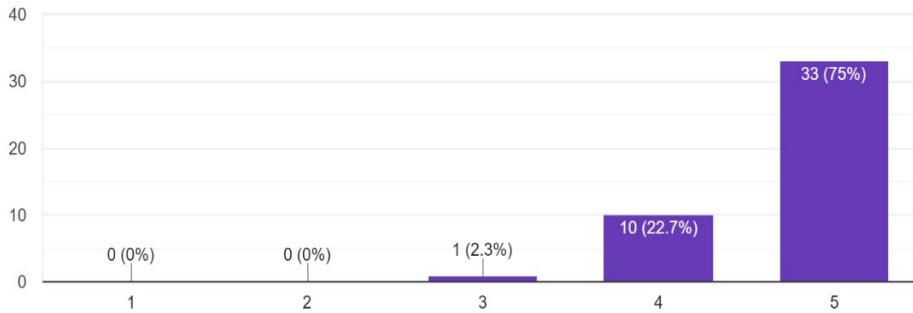


図表IV-6 「融合先導知実践演習 A (ちょこっとマイプロジェクト)」の講義の様子

参加者アンケート (Q2 履修学生) (5段階評価 (1:非常に不満~5:大変満足))

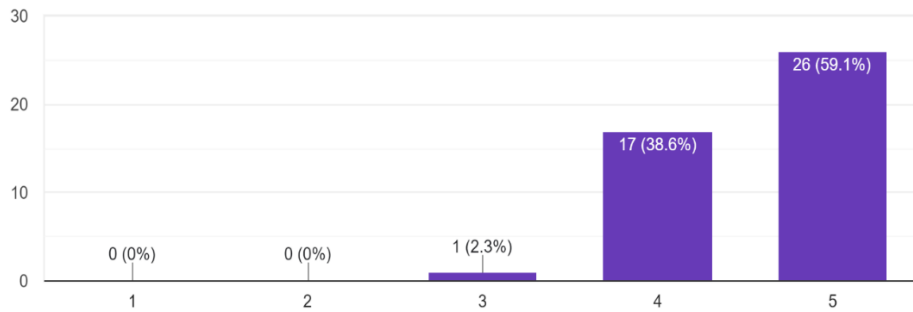
今回の授業の満足度を教えてください。

44件の回答



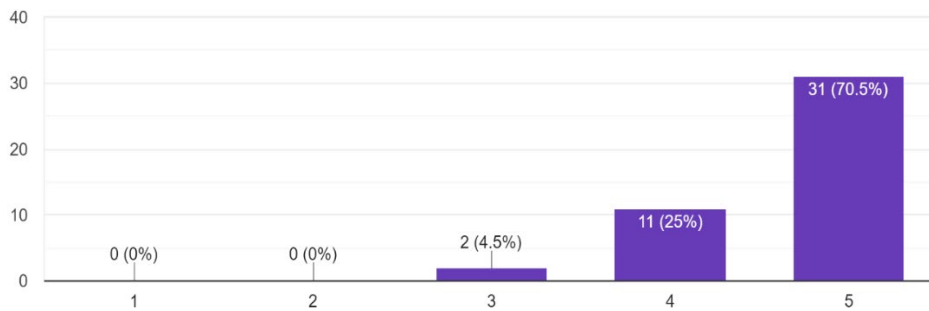
今回の授業を通して、自己理解が高まったと思いますか。

44件の回答



今回の講義の「ちょこプロ」に限らず、自分から何かアクションを起こしてみようと思いましたか。

44件の回答



図表IV-7 履修者アンケート結果

### 3.2 【発展科目：200番】「融合先導知実践演習 B (アイデアキャンプ)」

GS 発展系科目（専門教育科目）「融合先導知実践演習 B (アイデアキャンプ)」(Q3・集中講義)を開講し、3学域の1年次から4年次まで、20名の受講者が履修し、企業・自治体等、運営スタッフ含め合計30名以上が参加した。

この授業では、学域・学類、学年を越えた学生が、社会人さらに企業・自治体等の方とともに、リアルな課題に対して、解決策を検討する方法を体験的に学びながら、融合した専門知と鋭敏な飛躍知を備えた「融合先導知」の意義や価値を理解することを目標としている。

まず、事前オリエンテーションを開催し、教学マネジメントセンターの山下特任助教が、授業の概要や評価等に関する説明を行った。次に、令和5年10月14日(土)に対面で、課題解決法習得のグループワークを行った。授業アドバイザーとして長崎県立大学 経営学部 講師の前田 瞬 講師を招き、統計・分析の観点やからアイデア出しについて、ご指導いただいた。続いて、令和5年10月15日(土)と令和5年11月3日(金)は、主に教学マネジメントセンターの林 透 教授と山下貴弘 特任助教による進行で、実際に企業・自治体等の方から現状や課題に関する発表をもとに、その解決法について企業・自治体等の方と一緒に考え、提案するグループワークを行った。

出展団体と課題は以下のとおり。

- (1) 大同工業株式会社「学類にこだわらず学生が参加したくなる製造業のインターンシップとは？」
- (2) 株式会社ヤマト醤油味噌「老舗企業が発信する金沢×観光をテーマに SNS を設計してみる？」

参加した企業から、「実際に導入可能なレベルでのアウトプットを頂いた点と、私自身に取っても、学生様の考え方や、価値観など大変勉強になった」「大学生からは発想を促すようなアイデアの原石があった。先生方、学生、異業種他社の人事担当者様と密にコミュニケーションをとれる機会は稀だ」といった好評が寄せられた。

なお、大同工業株式会社から要望のあった「学類にこだわらず学生が参加したくなる製造業のインターンシップとは？」という課題をもとに、学生グループが検討・提案したアイデアは、令和5年クォーター4の実践インターンシップ(300番科目)にて一部採用され、授業後もプロジェクトが継続しているといえる。

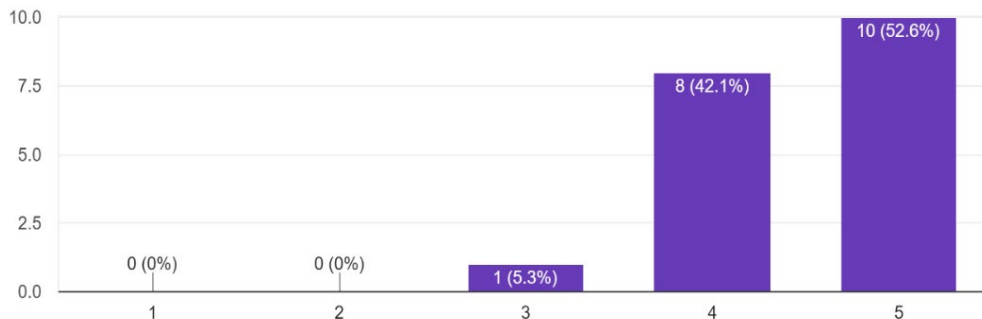


図表IV-8 「融合先導知実践演習 B (アイデアキャンプ)」の講義の様子

### 参加者アンケート（学生）（5段階評価（1：非常に不満～5：大変満足））

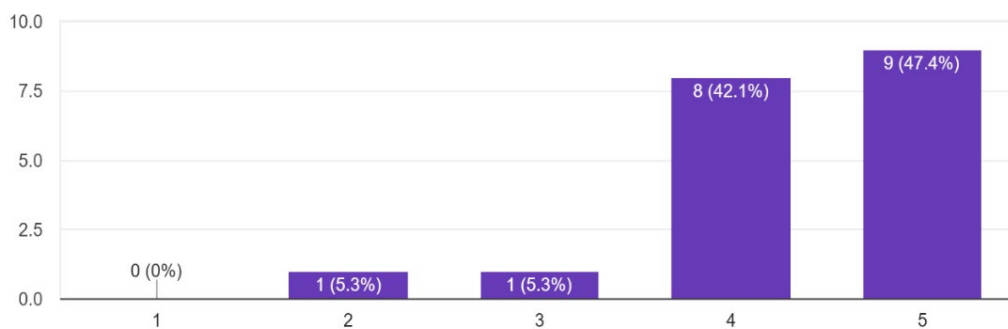
今回の授業の満足度を教えてください。

19件の回答



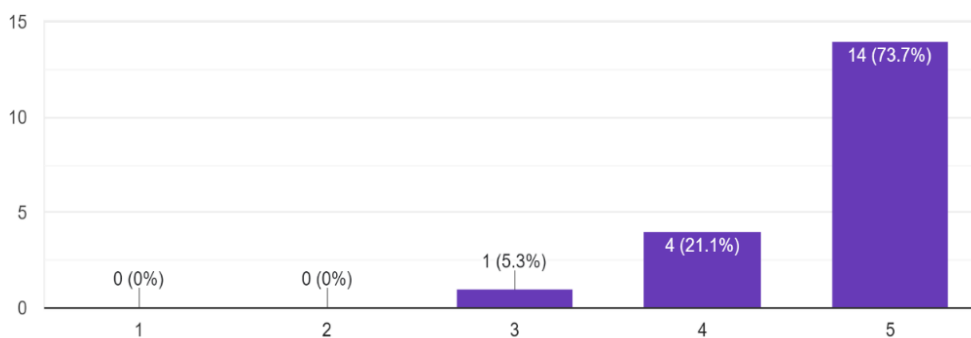
今回の授業を通して、自己理解が高まったと思いますか。

19件の回答



今回の授業への参加を、他の人に勧めたいと思いましたか。

19件の回答



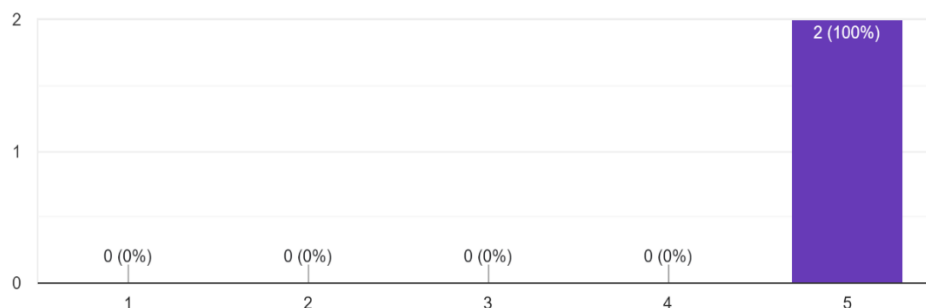
図表IV-9 履修者アンケート結果



### 参加者アンケート（参加団体）（5段階評価（1：非常に不満～5：大変満足））

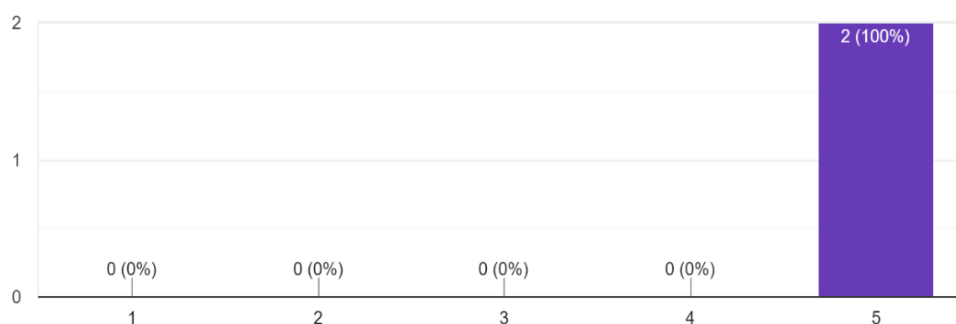
今回の授業の満足度を教えてください。

2件の回答



今回の授業への参加を他社・他団体に勧めたいと思いますか。

2件の回答



図表IV-10 参加団体アンケート結果

### 3.3 【発展科目：200番】「融合先導知実践演習 C（総合マネジメントゲーム）」

GS 発展系科目（専門教育科目）「融合先導知実践演習 C（総合マネジメントゲーム）」（Q3・集中講義）を開講し、3学域の1年次から4年次まで、35名の受講者が履修した。

この授業では、学域・学類、学年を越えた学生同士が、メーカーのマネジメントを体感することにより、実際の厳しいビジネスの環境や各活動の意義や機能を理解できる総合演習を通して、3つのリテラシー（データリテラシー、ヒューマンリテラシー、科学技術リテラシー）を融合した専門知と鋭敏な飛躍知を備えた「融合先導知」に統合することを目標としている。

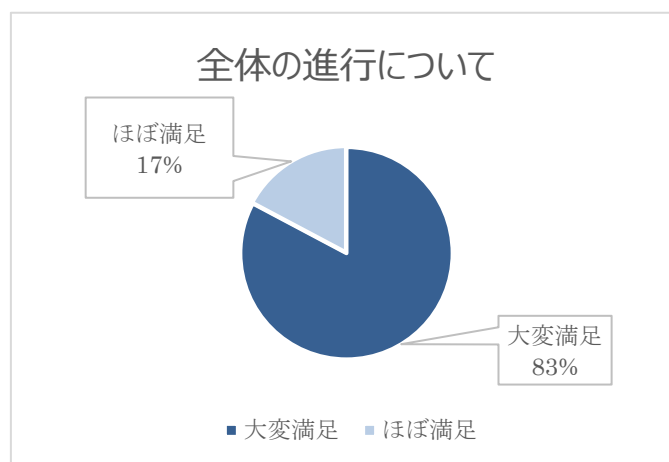
まず、事前オリエンテーションを開催し、教学マネジメントセンターの山下貴弘特任助教が、授業の概要や評価等に関する説明を行った。次に、令和5年12月5日（火）と令和5年12月6日（水）に対面で、京セラ株式会社から人材育成部の大西百恵氏、同社の人材開発部の赤根幹太氏、同社の東京事業所長兼産学連携推進部責任者の大西実氏をファシリテーターとして招き、ワークの理解、経営方針・戦略立案ミーティング（作戦会議）、製品企画ミーティング及びプロモーション・ミーティングを行い、2日目は製品制作・プロモーション制作とワークの振り返り等を行った。

受講者からは、「消費者の思考でグループワークを実施することができた」「グループ内で役割分担をそれぞれが果たし、発表準備、CM制作、製品制作を同時に進めることができた」「意見を積極的に交わす環境をつくることができた」「全体のチームワークを高めることができた」といった感想が寄せられた。



図表IV-11 「融合先導知実践演習 C（総合マネジメントゲーム）」の講義の様子

#### 参加者アンケート（学生）



図表IV-12 履修者アンケート結果

#### 3.4 【成果科目：300番】「実践インターンシップ」

GS 発展系科目（専門教育科目）「実践インターンシップ」（Q2 と Q4・集中講義）を開講し、3学域の1年次から3年次まで、36名の受講者が履修した。

この授業では、文理融合・分野横断の学びを通して修得した知識やスキルを社会共創の場で実際に行動・挑戦してみることで、課題解決能力の実践知を育むことを目的として、社会のリアルな課題に対して、課題発見・解決を実践するプログラムである。分野の異なる学生だけではなく、企業や自治体など、異なる年代や立場の方々と協働し、成果を出すことを目指している。

プログラムは、1) 事前研修、2) 実践学習、3) 振り返りの3つで構成し、実践学習では、企業・自治体等の方に受け入れていただき、実際のフィールドで課題の解決法について企業・自治体等の方と一緒に課題の解決策を考え、実際に行動する。



実践インターンシップの受け入れ先・テーマは以下のとおりである。

- (1) 実践インターンシップ（古民家再生プロジェクト）
  - ・テーマ：古民家再生プロジェクト 金沢大学×北陸朝日放送
  - ・キーワード：#古民家再生 #大杉 Fess2023 秋 #放送メディア #みどりの里
  - ・活動内容：築 150 年以上の古民家の再利用を検討し、受入先である大杉町地区にて、北陸朝日放送との協働により、今秋開催予定の地域フェスタ「大杉 Fess2023 秋」での具体的活用を提案する。
  - ・募集人数：6 名
- (2) 実践インターンシップ（企業で働く社員紹介ムービー制作）
  - ・テーマ：企業で働く社員さん紹介ムービーの制作
  - ・キーワード：#インスタ動画 #動作撮影 #制作編集 #機材貸出可
  - ・活動内容：企業ではどんな働き方をしているのだろうか？様々な部署の違いはなんだろうか？そこで現場で社員さんに寄り添い、働き方などを映像で撮影・編集した会社のショートムービーを制作します。
  - ・募集人数：6 名
- (3) 実践インターンシップ（既存商品をブラッシュアップ）
  - ・テーマ：既存商品をブラッシュアップ
  - ・キーワード：#伝統工芸 #マーケティングの実践 #ものづくり #アイデア募集
  - ・活動内容：伝統産業にどのようなイメージを持っていますか？「ふるくさい？使いにくい？」そんな伝統産業へのイメージを覆す“商品のブラッシュアップ”。現代の暮らしにあった伝統工芸品を提案してください。
  - ・募集人数：6 名
- (4) 実践インターンシップ（デジタル×居場所をすべての子どもたちに使って欲しい）
  - ・テーマ：デジタル×居場所をすべての子どもたちに使って欲しい
  - ・キーワード：#子どもの教育 #第3の居場所 #デジタル #創造的活動
  - ・活動内容：子どもたちが、自分の「やりたいこと」を探し「好き」を追求できる創造的な居場所をさらに充実させ、子どもたちに安心して利用できる「みんなのミミラボ」なるアイデアを提案してください。
  - ・募集人数：6 名
- (5) 実践インターンシップ（ものづくり企業の認知度アップの方法を考えて実践してみよう）
  - ・テーマ：ものづくり企業の認知度アップの方法を考えて実践してみよう！
  - ・キーワード：#オープンファクトリー #広報 #企画 #ものづくり企業
  - ・活動内容：ものづくり企業のつまらなさそうなイメージを打破！TSKを知っていただくため、オープンファクトリーの企画やポスター作成、SNS 記事の作成など、新しいアイデアで認知度を高める企画を考えましょう！
  - ・募集人数：6 名
- (6) 実践インターンシップ（Discovery in DID～あなたが探す大同工業の未来～）
  - ・テーマ：Discovery in DID～あなたが探す大同工業の未来～

- ・キーワード：#人材育成 #女性活躍 #人材確保 #人的資本経営
- ・活動内容：女性活躍，人材育成（教育），人材確保，柔軟な働き方について（在宅・フレックス）など，どの会社でも今後検討が必要になる企業課題について，学生と社員と一緒に考え取り組んでいきたいと思います。
- ・募集人数：6名

### 3.5 ガクセイ社会科見学（バスツアー）

先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の一環として，ガクセイ社会科見学（バスツアー）を本年度 2 回開催し，様々な学域と学年の学生ら計 41 名が参加した。本企画は，地域社会を活かした体験や人との交流をとおして，多面的見方が促され，新しい解決策やイノベーションを生み出す一歩となることを目指している。

初回となる令和 5 年 6 月 23 日（金）は株式会社ヤマト醤油味噌，2 回目となる令和 5 年 11 月 2 日（木）にぶどうの森 本店を訪問し，普段は立ち入れない場所や働いている方々（経営者や大学 OB・OG など）から直接，企業や地域の魅力・課題に関する講話や質疑応答に答えていただいた。

参加者によると，「金沢の新たな魅力を発見でき，糀の良さを理解することができた」「私は将来家業を継ごうと思っていますが，新たなビジネスをしようと考えているので，今回のイベントは将来やろうとしていることに近くすぐくためになった」「ただ現地を訪れるだけでなく，働く人自身から話を聞き，実感や体験を伴って学ぶ事ができた」「身近な資源をすべて使って，新しいものを作る例を見ることができた」「このイベントに参加しなければ知ることのなかった面白い取り組みを知ることができた」といった声が寄せられ，盛会のうちに会を終えた。

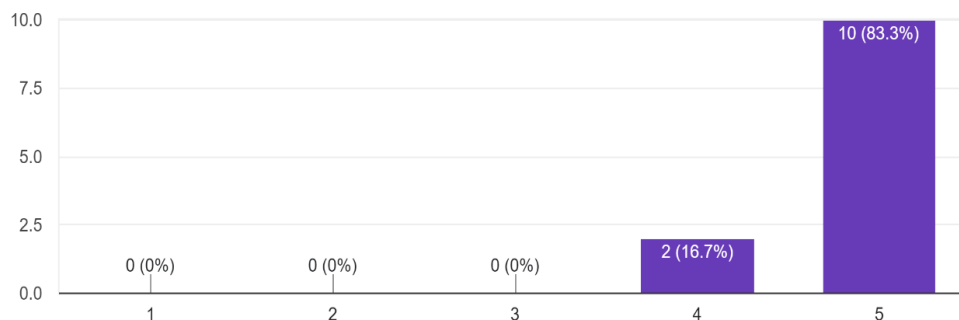


図表IV-13 第1回・第2回ガクセイ社会科見学の様子

## 参加者アンケート（5段階評価（1：非常に不満～5：大変満足））

今回のガクセイ社会科見学に参加しての満足しましたか？

12件の回答



図表IV-14 参加者による満足度

### 4. 「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」令和5年度追跡調査結果

先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の一環で、「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」を、2021 年度後期からこれまで計 5 回開講した。

本講義は、KU-STEAM におけるプログラム導入科目で、受講者が協働する学域・学類、学年を超えた学生同士が集まり、身の回りの課題や関心をもとにした小さなアクション「ちょこっとマイプロジェクト（通称、ちょこプロ）」を通して「やってみたいこと」を実現する集中講義で、各回定員の 2 倍以上の履修登録があり、4 学域の各学類、1 年から 4 年生まで幅広く受講者がおり、口コミによって受講者が広がっていることが特徴といえる。

授業ごとにルーブリック評価や満足度調査を行っており、高い評価は得られているものの、プログラム導入科目が年次進行とともにどのような効果があるのか、調査を行った。

#### 【実施対象者】

2021 年度 Q4 から 2023 年度 Q2 までの受講生のうち卒業生を除く 127 名

#### 【回答者数】

50 件（回答率 39.3%）

#### 【実施期間】

2024 年 1 月 16 日（火）～2 月 16 日（金）

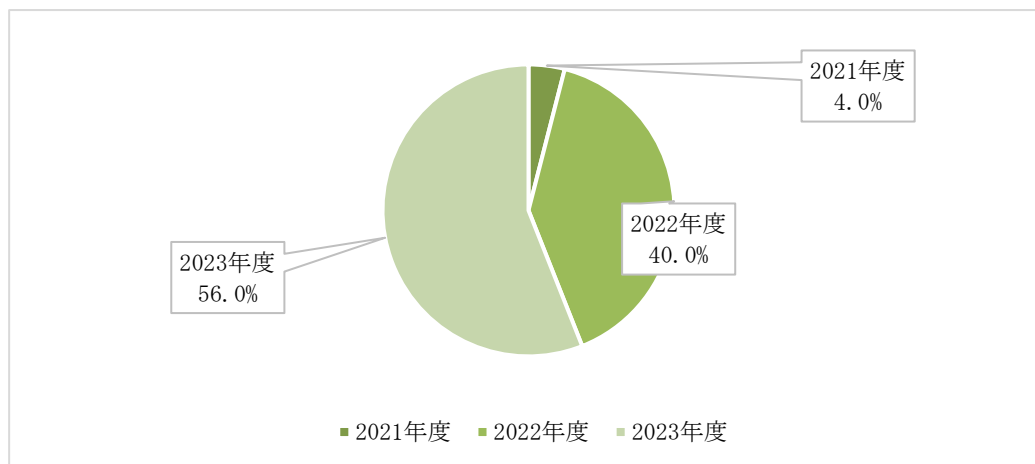
#### 【実施方法】

学務情報システムを通じたウェブアンケート

【令和5年度「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」の追跡調査結果】

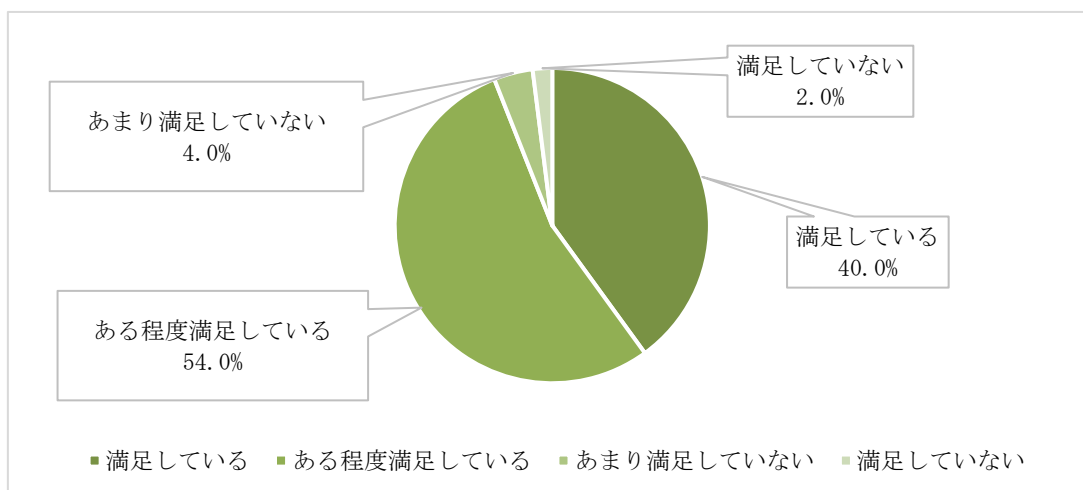
(1) ちょこプロの履修年度

〔①2021年度 ②2022年度 ③2023年度〕



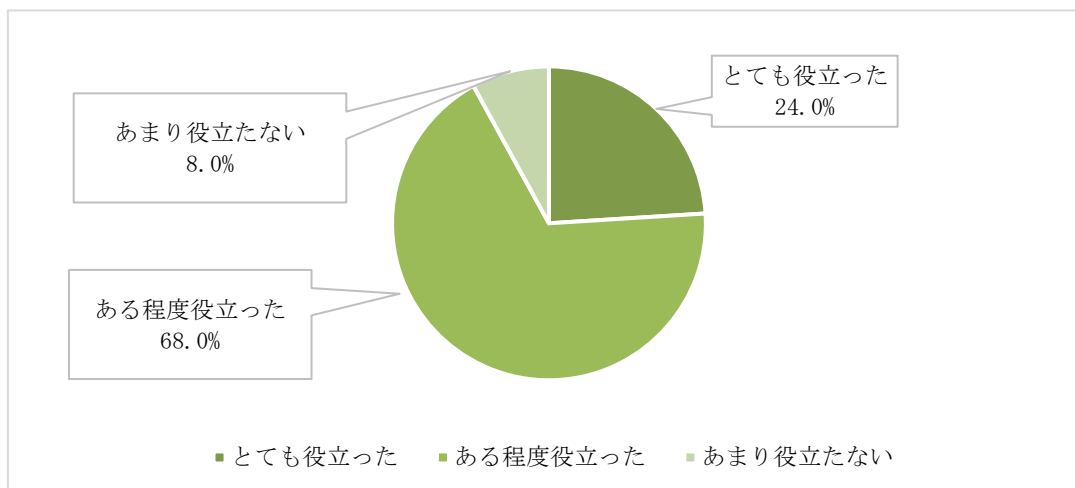
(2) 学生生活の満足度

〔①満足している ②ある程度満足している ③あまり満足していない ④満足していない〕



### (3) ちょこプロの経験が、学生生活に役立ちましたか

〔①とても役立った ②ある程度役立った ③あまり役立たない ④まったく役立たない〕



### (4) ちょこプロの経験が、実際どこで、どのように役立ちましたか（自由記述）

たとえば、専門教育や日常生活へどのような影響が見られましたか

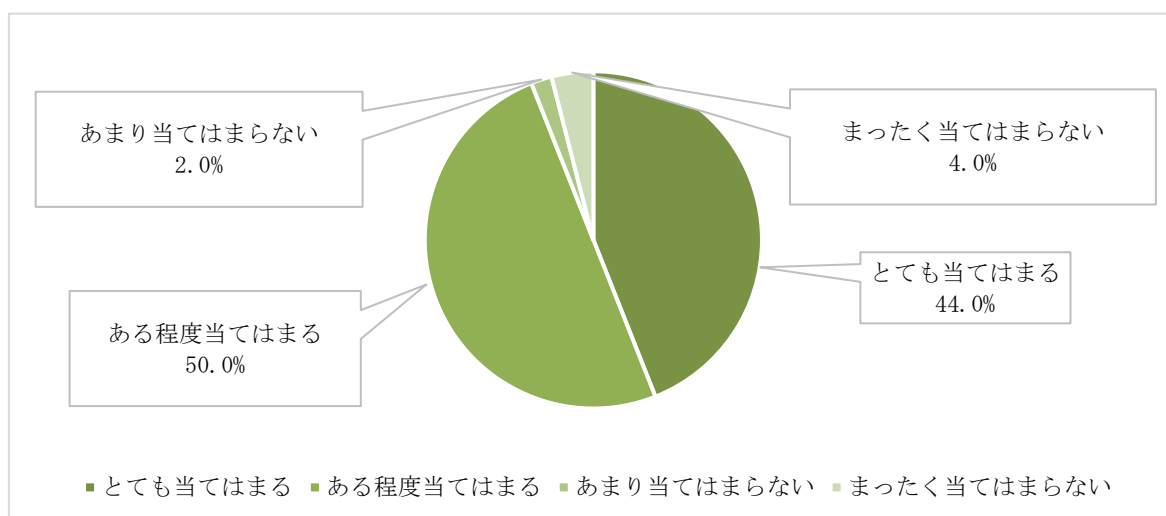
➡34 件の回答。主な回答内容は以下のとおり。

- 自己分析を通じて、自分が大学生活において何に取り組みたいかを探すきっかけとなった。
- 日常生活で、今までならあきらめていたようなことにもチャレンジできるようになった（コンフォートゾーンやストレッチゾーンが広がったような感覚があります）。また、受講に加えスタッフとしても関わらせていただいたおかげで様々な分野の方との交流も生まれ、そこから新たなつながりができたり、チャレンジの幅が広がっている。
- 手話の講座をとるようになった。
- 物事について考えるきっかけになった。プロジェクトを通して、今までは募金をすることが良いことだと勝手に思っていたが、そのお金がどのように使われているのか、適切にお金を使っている団体はどこかなどを調べるうちに、先まで見通せる視点を獲得できたように思う。
- 自分の興味分野で交流関係が広がった。
- 私が調べた AI の使い方がよく役に立っている。
- 勉強や日常生活の両方においても、とりあえず〇〇するという癖がついた。例えば、あまり読まないジャンルの本を借りたり、ゼミ選択のために先生にアポイントメントを取りに行くといったことである。

- 自分に自信がついて、それまで「出来ないだろう」と思ってたことより「出来るかも」と思うことが増えた気がします。
- サークルの運営やイベント運営の中心となって活動する際に、ちょこっとプロジェクトで習ったブレインストーミングなどの知識・経験を生かしてより良いアイデア提案に励めたと思います。また、ちょこっとプロジェクトのマイプロジェクトでは自分と向き合うことがテーマでしたが、学類も学年も探求テーマも違う人たちと意見交換したこと、互いにマイテーマに取り組んでいるという状況のなか取り組めたことでより深い自己理解ができた気がします。
- 他の学類の人と友達になれた。自分を見つめるいい機会になった。
- 自分の興味のある分野が明確になった。
- ちょこプロでデザイナー就活用のポートフォリオを作成し、それを使用して第一希望の企業から内定をいただきました。

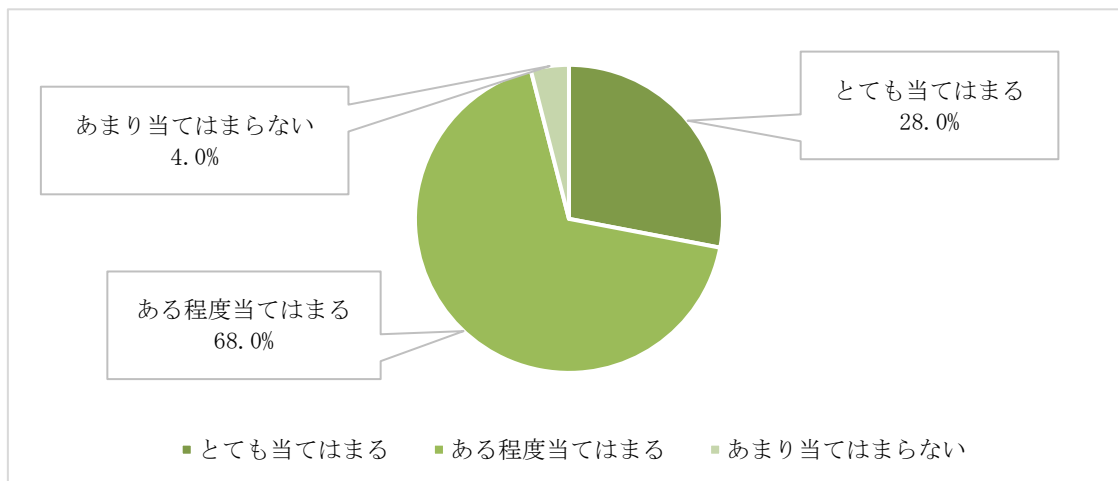
#### (5) さまざまな人と交流したり、いろいろな経験をしたりする

- ①とても当てはまる      ②ある程度当てはまる  
③あまり当てはまらない   ④まったく当てはまらない



(6) 自分の性格の長所と短所を理解している

- ①とても当てはまる ②ある程度当てはまる  
③あまり当てはまらない ④まったく当てはまらない



(7) プログラムに参加して自分のどのようなところに自信が持てるようになったか (自由記述)

⇒26 件の回答。主な回答内容は以下のとおり。

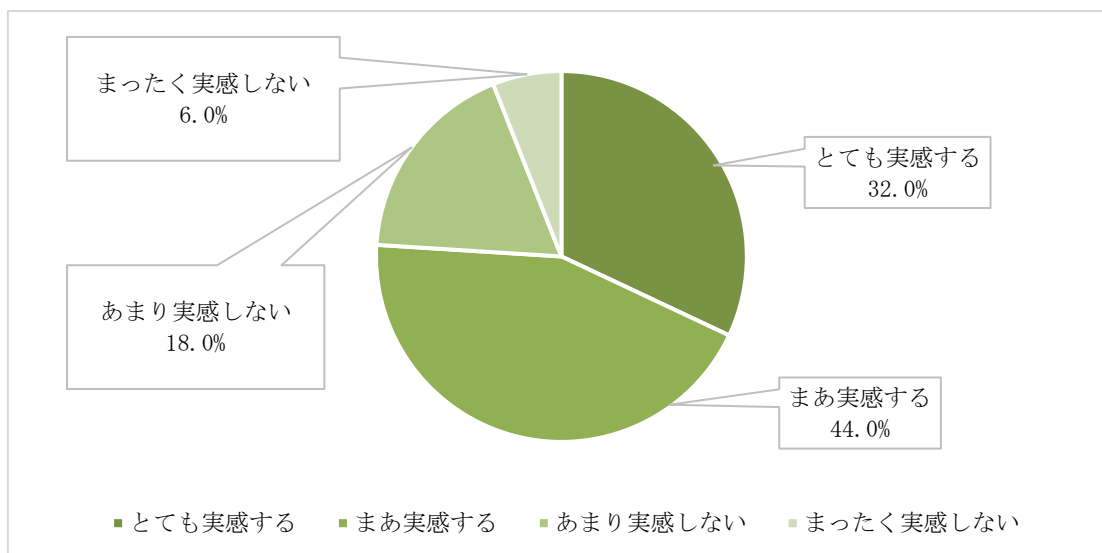
- 行動力
- 積極性やコミュニケーション能力
- 挑戦することの大切さ、挑戦してみる勇氣
- アイデア出す力、複合的な視点
- 今まで経験してきたことが自分の中で生かされていると実感できるところ。
- 継続して努力できるところ。
- 物事について深く考えることができるところ。
- これまでの人生を悲観することないのだと自信を持つことができた。
- 自分が苦手なことに立ち向かうところに自信が持てた。
- 他人と違う考えがもてること。
- 最後までやりとげる力



### (8) 各学年における成長実感

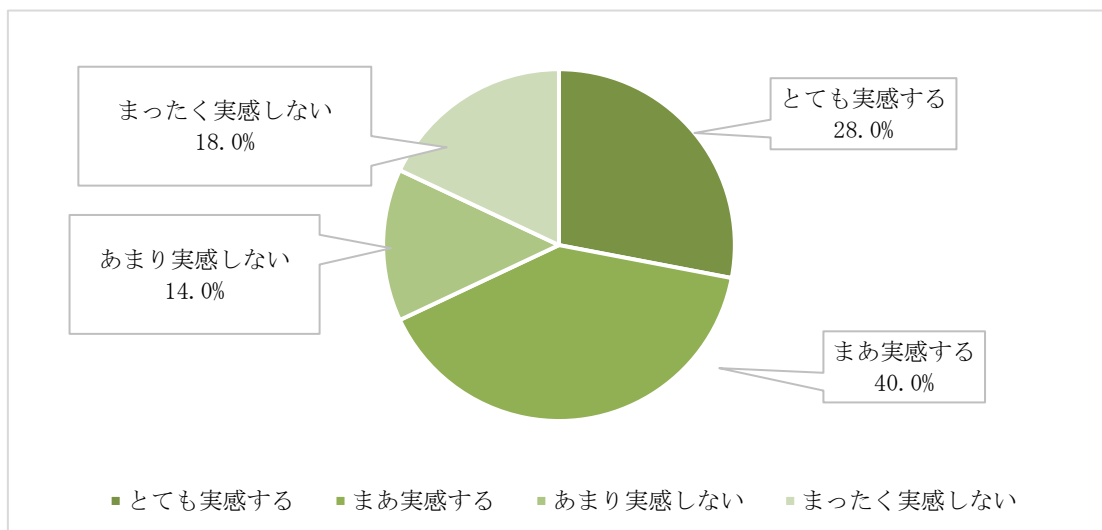
#### ● 1年次における成長実感

〔①とても実感する ②まあ実感する ③あまり実感しない ④まったく実感しない〕



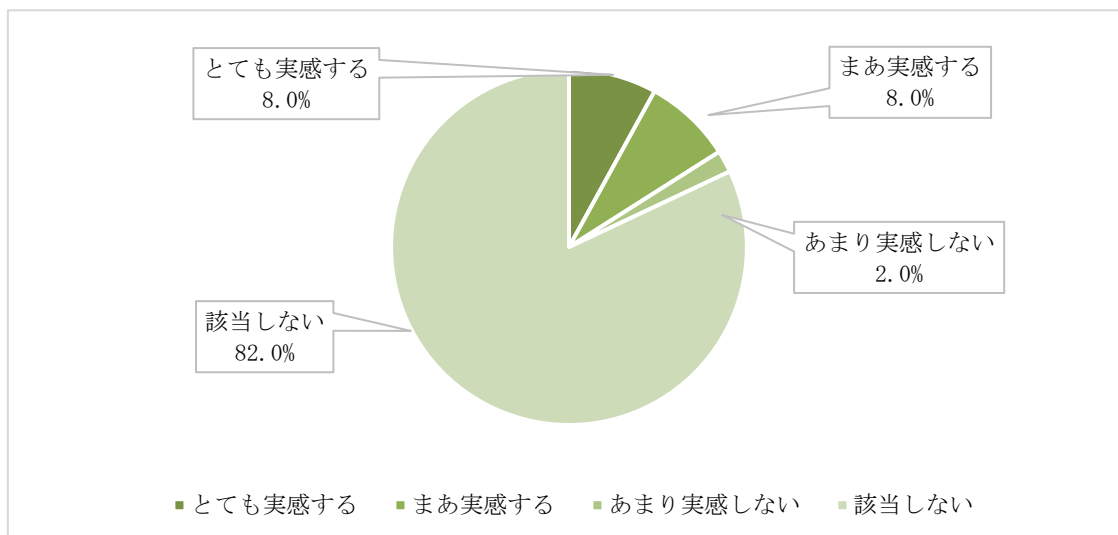
#### ● 2年次における成長実感

〔①とても実感する ②まあ実感する ③あまり実感しない ④まったく実感しない〕



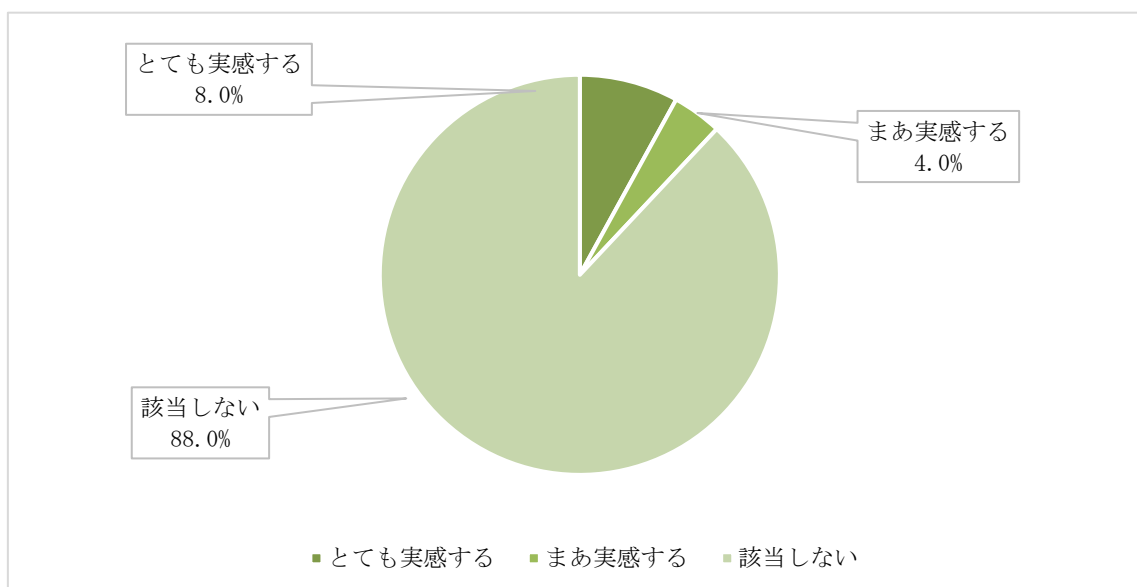
● 3年次における成長実感

〔①とても実感する ②まあ実感する ③あまり実感しない ④まったく実感しない〕



● 4年次における成長実感

〔①とても実感する ②まあ実感する ③あまり実感しない ④まったく実感しない〕



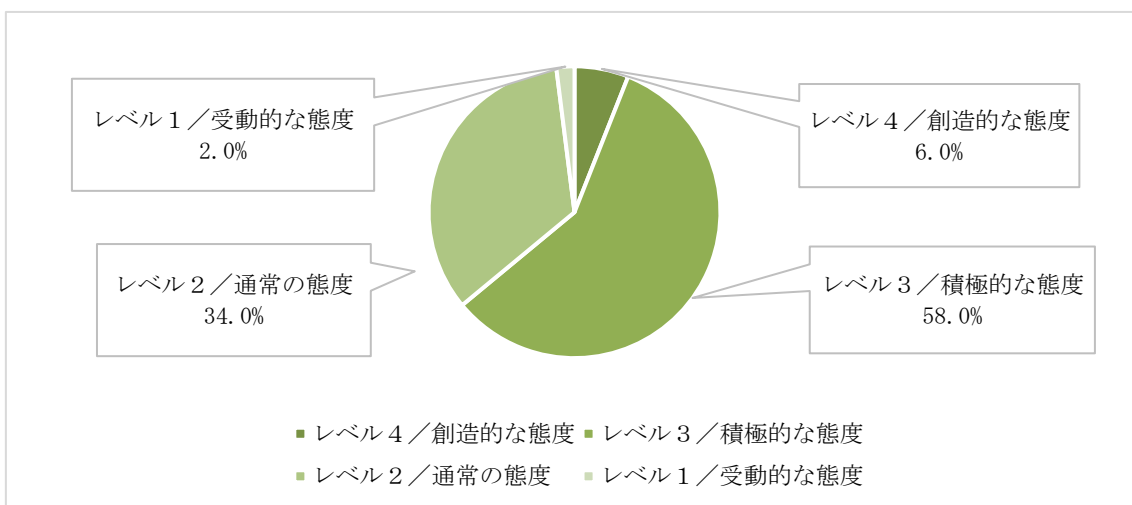
(9) 先導 STEAM 人材育成プログラム「5つの力：Five Competencies」に関するルーブリックについて、下記のレベルから、自身が当てはまるものを選択してください。

<https://drive.google.com/file/d/1rPDjgImCyyX5jJtkDs4JI8-iWzWflqGO/view?usp=sharing>

● 俯瞰力（融合した専門知）

個々の能力・適性に合った専門的な知識とともに、幅広い分野や考え方を俯瞰して、自らの判断をまとめ表現できる力

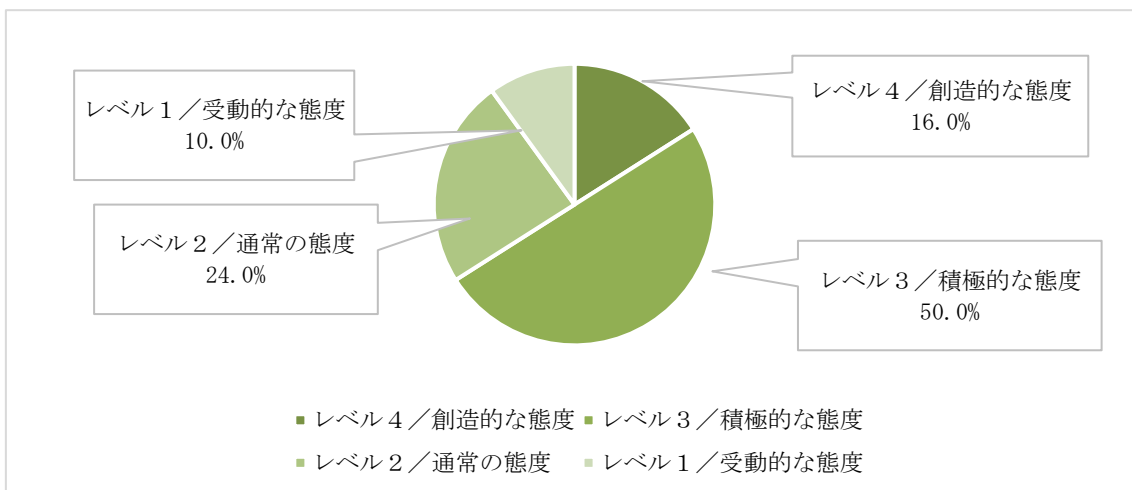
- ①レベル1／受動的な態度 ②レベル2／通常の態度  
③レベル3／積極的な態度 ④レベル4／創造的な態度



● 提案力（鋭敏な飛躍知）

新しい原理・現象の発見・解明や非連続な技術革新の源泉となる知識を鋭敏に創造し、提案できる力

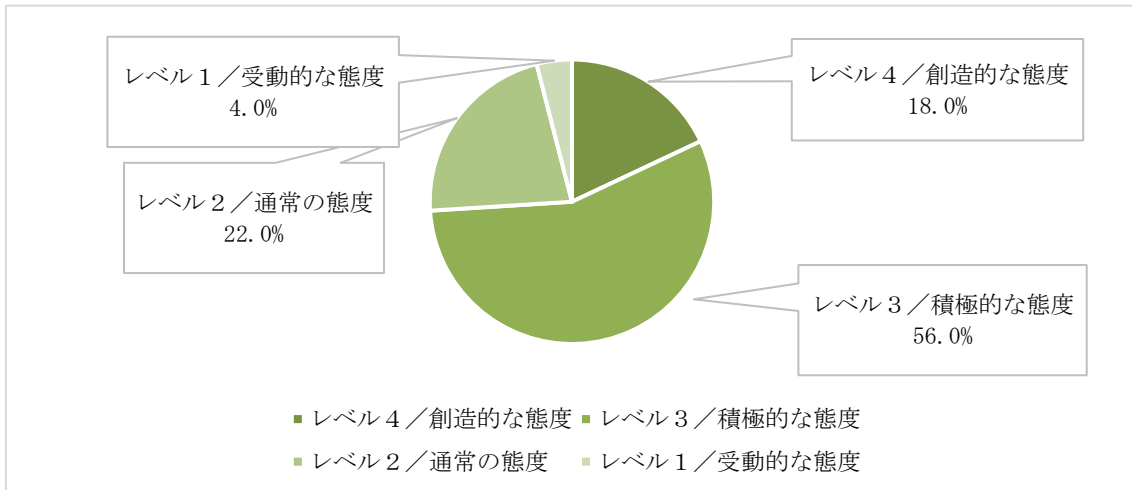
- ①レベル1／受動的な態度 ②レベル2／通常の態度  
③レベル3／積極的な態度 ④レベル4／創造的な態度



● 協働力

目標を共有し、その達成に向けて、お互いの能力・立場を理解し合いながら、コミュニケーションをとり、チームメンバーで役割分担し、協働できる力

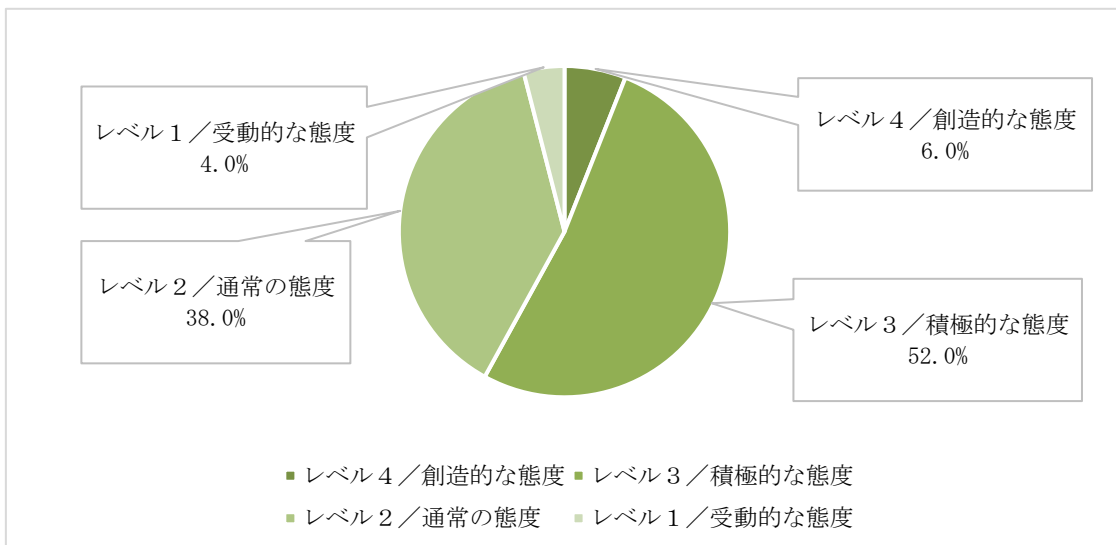
- ①レベル1 / 受動的な態度 ②レベル2 / 通常の態度  
③レベル3 / 積極的な態度 ④レベル4 / 創造的な態度



● 課題発見・解決力

問題に対して自らの知識や技能を駆使して課題を抽出し、解決のためにその課題に向き合う力

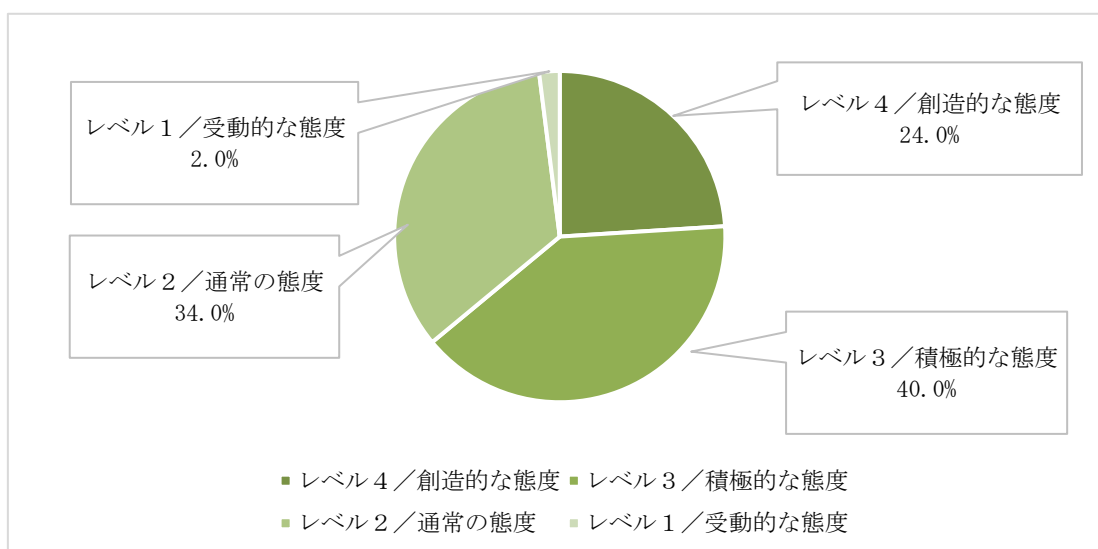
- ①レベル1 / 受動的な態度 ②レベル2 / 通常の態度  
③レベル3 / 積極的な態度 ④レベル4 / 創造的な態度



● 挑戦・実践力

身につけた専門知識や技能を様々な場面で活用しようとする積極性。実践に移す行動力

- ①レベル1／受動的な態度 ②レベル2／通常の態度  
③レベル3／積極的な態度 ④レベル4／創造的な態度



(10) プログラムに参加してこれから伸ばしたいと感じたことは何か（自由記述）

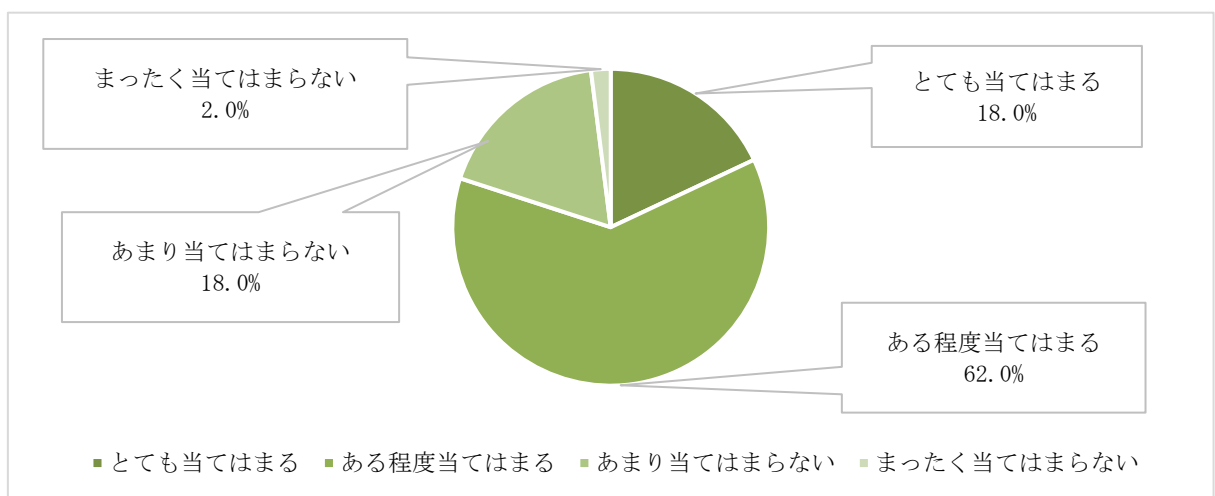
→24 件の回答。主な回答内容は以下のとおり。

- 集団で協調して働く能力
- 継続習慣を自分の力でつけること。
- 俯瞰力 自分の専門をまず深めること、そして他分野の知識も含めて俯瞰する力が足りないと思うため、そこを伸ばしたい。また、協働力についても、協働しようという姿勢はあるがまだ試行錯誤の過程であるため、どのようにしたらバックグラウンドの違うメンバーの集まるチームがうまく回るのかという部分を考えていきたい
- さらにいろんな人と交流して新しい意見を取り入れる。
- ロジカルシンキング、協働力
- 参加した当時は、可能かどうかは分からないが自分の興味のあることをテーマにしていたが、今後は根拠や目的をはっきりさせてテーマを決める力を付けていきたいと感じた。
- 他に興味あることにも手を出してみたいと思いました。
- やってみようかなと思ったことにチャレンジしてみることに。
- 課題を発見した後、それを解決するための行動に移す力
- 思考から行動までを一連の流れとして行う力を伸ばしたいと感じた。
- 社会に出ても様々な分野で通用する実践的な協働力。

- もっと、色んな事に挑戦していける行動力を伸ばしていきたい。
- 他者と協働すること、自分が考えていることを言葉にすること。
- ビジネスに結びつける思考。知識と経験の補給 インプットだけではなくアウトプットの間を創る。

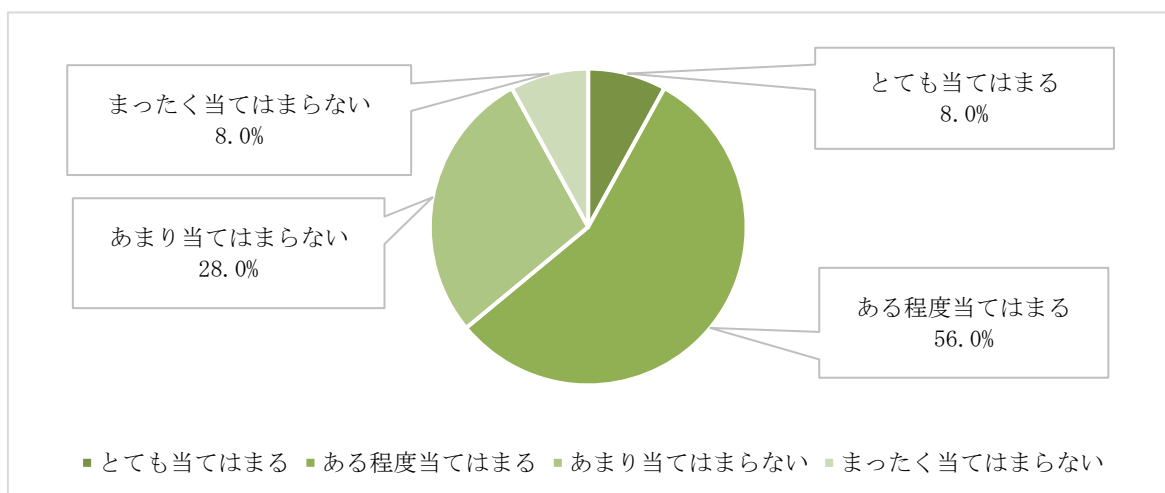
(11) 自分が将来どのように働きたいか具体的に考えている

- ①とても当てはまる ②ある程度当てはまる  
③あまり当てはまらない ④まったく当てはまらない



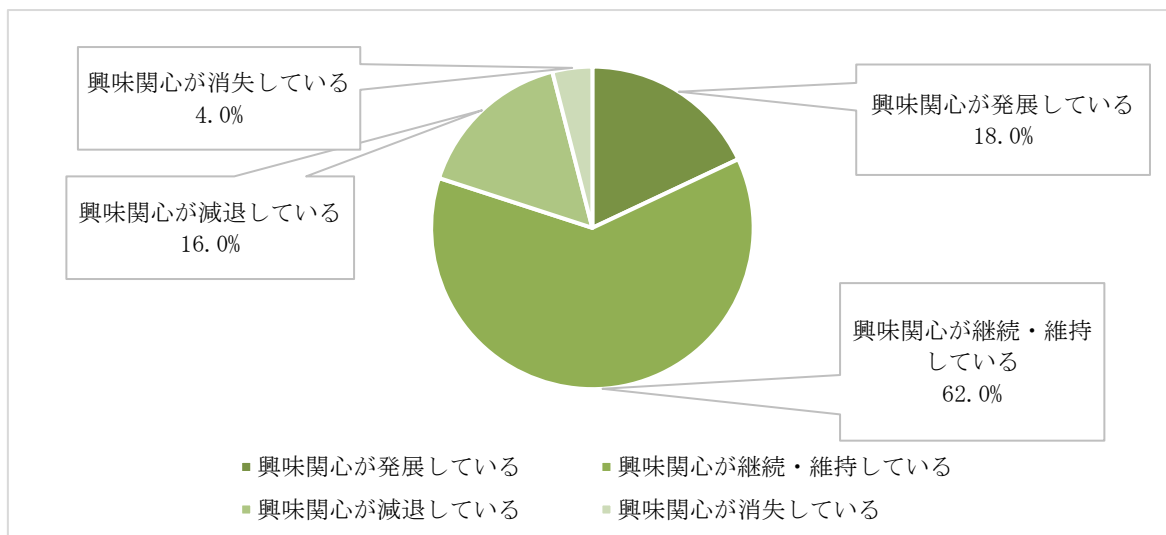
(12) 自分が将来どのように働きたいか具体的に考えている

- ①とても当てはまる ②ある程度当てはまる  
③あまり当てはまらない ④まったく当てはまらない



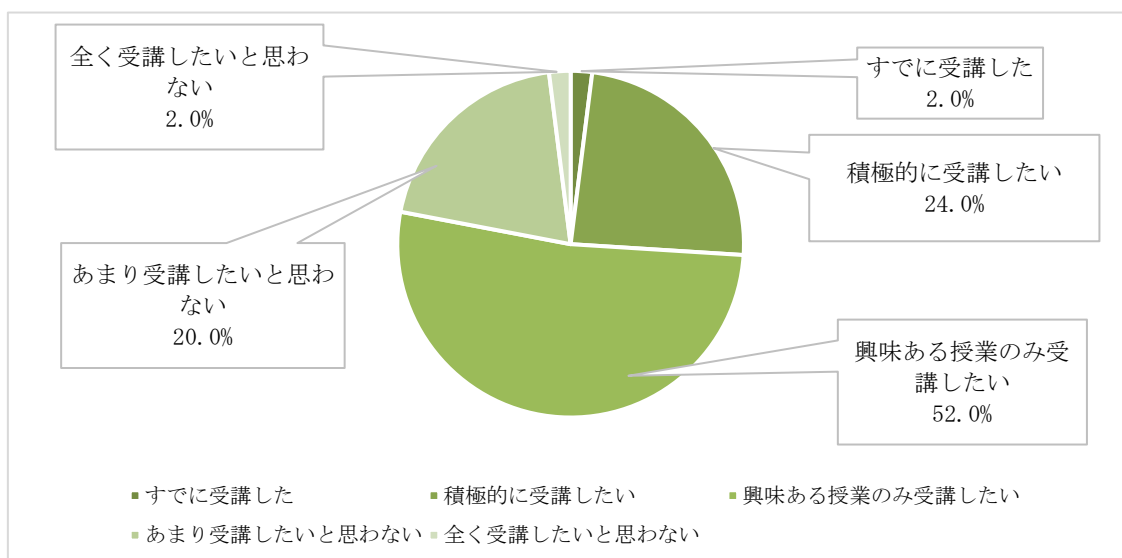
(13) ちょこプロで実施したテーマについて、その興味関心が続いているか

- ①興味関心が発展している ②興味関心が継続・維持している  
③興味関心が減退している ④興味関心が消失している



(14) KU-STEAM の 200 番科目 (融合先導知実践演習 B) (アイデアキャンプ)・融合先導知実践演習 C (総合マネジメントゲーム)、300 番科目 (実践インターンシップ・留学等) の受講希望

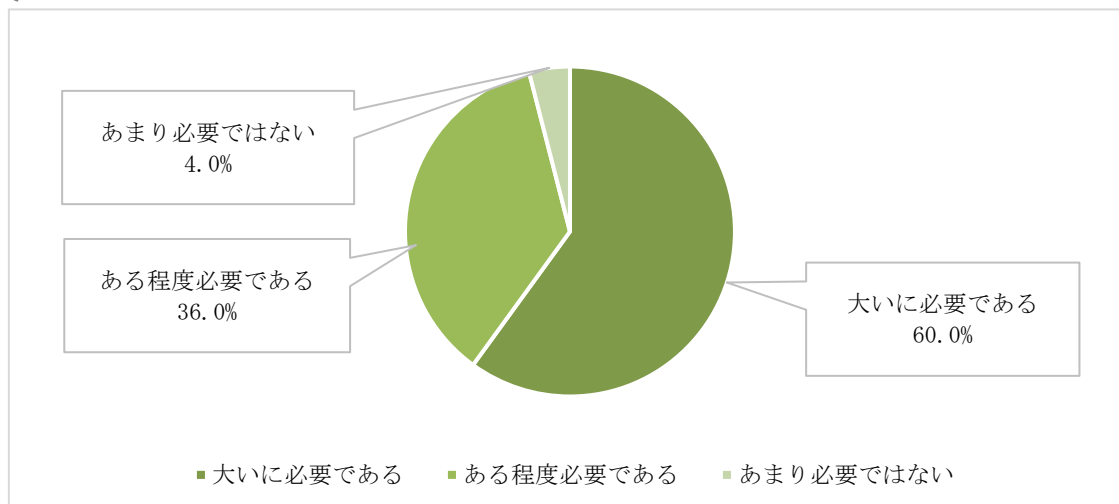
- ①積極的に受講したい ②興味ある授業のみ受講したい  
③あまり受講したいと思わない ④全く受講したいと思わない  
⑤すでに受講した





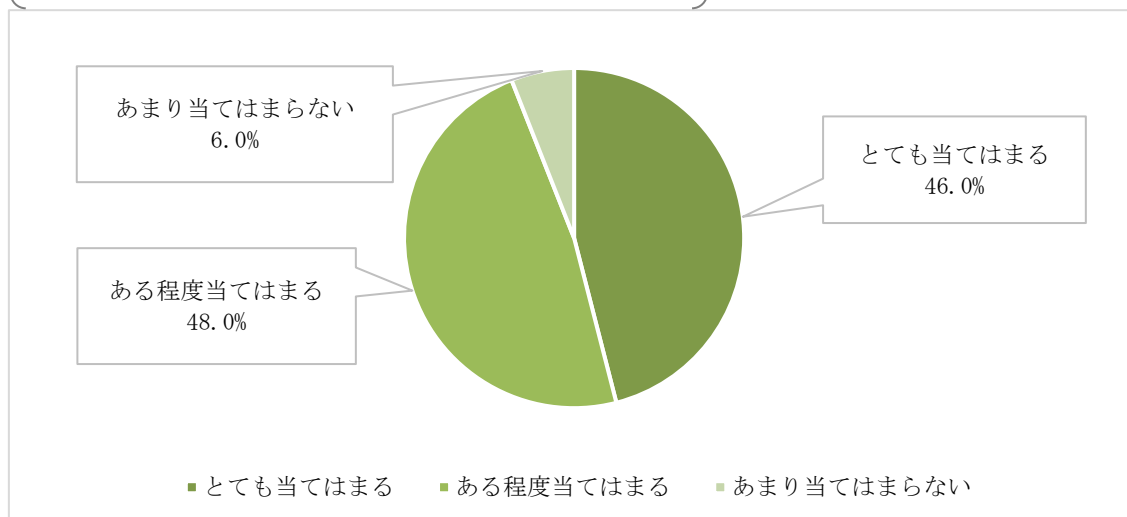
(15) 文系・理系の枠にとらわれない、文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）について、どのように考えていますか

〔①大いに必要である ②ある程度必要である ③あまり必要ではない ④全く必要ではない〕



(16) ちょこプロの履修をほかの人に勧めたいと思いますか

〔①とても当てはまる ②ある程度当てはまる  
③あまり当てはまらない ④まったく当てはまらない〕



図表IV-15 「融合先導知実践演習 A（ちょこっとマイプロジェクト）」  
令和5年度追跡調査結果

## (17) ちょこプロを受講して感じたこと、要望などあれば（自由記述）

⇒14件の回答。主な回答内容は以下のとおり。

- 先生方ももうすでにたくさん検討されている部分ではあると思いますが、なるべく受講者がたくさん受講者同士で交流が生まれてほしい。
- 今後もきっと長く続いてく授業になると勝手に思っていますが、自分がちょこプロで大きい影響をもらったように、今後も受講者がいろんな刺激をもらえるような授業になることを願ってます！
- チームでプロジェクトをやるときに、どう関係づくりをしていくか、どう自分の価値（役割）を見出すか、の方針的なものが欲しいと思いました。
- 様々なバックグラウンドを持つ人達と過ごすことの大切さを感じました。
- どんな意見も受け入れてくれると思える環境づくりがしてあるように感じ、自分の取り組む内容を決めるうえで大変ありがたかったです。他の参加者との交流も楽しく&とても興味深く、心がほぐれるように思いました。
- 私はちょこプロの受講がきっかけとなって、自分を変えることができたと思うので本当に受講してよかったです。
- この講義を履修することでそれぞれの専門科目を履修する際にも必要な課題発見能力やそれを解決する能力を身につけることができ、有意義だった。
- ちょこプロが今後の人生に大きく影響してきたと思っています。良いきっかけを与えていただき、感謝しています。

### 【考察】

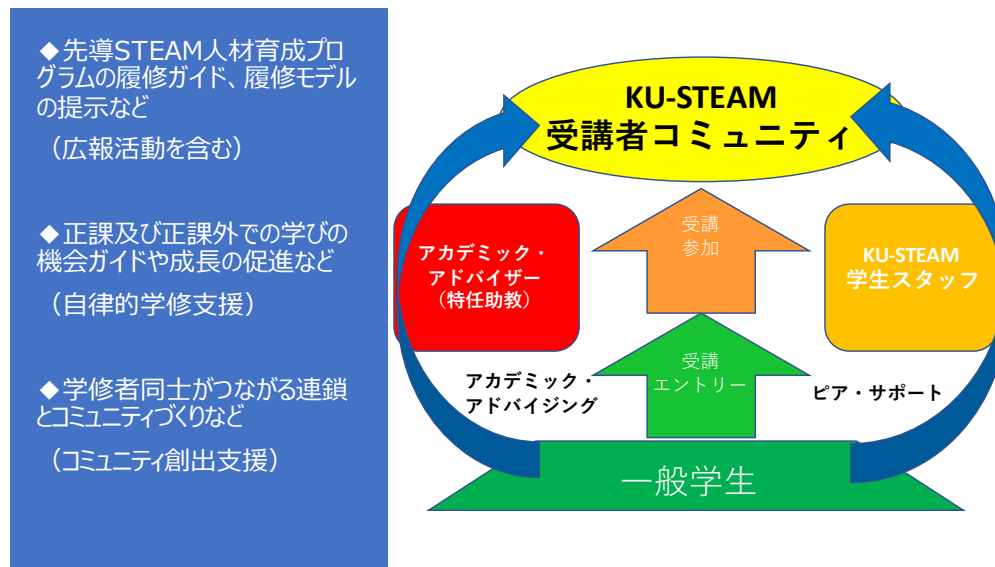
令和5年度「融合先導知実践演習A（ちょこっとマイプロジェクト）」の追跡調査結果について、学生生活の満足度で、「満足している」「とても満足している」で94.0%、ちょこプロの経験が役立ったという項目で「とても役立った」「ある程度役立った」で92.0%の回答を得ており、履修後も非常に高い満足度を得ていた。

先導STEAM人材育成プログラム「5つの力：Five Competencies」に関するルーブリックは、俯瞰力（融合した専門知）、提案力（鋭敏な飛躍知）、協働力、課題発見・解決力、挑戦・実践力の5つの項目におけるすべての回答の多い順に、レベル3がもっとも多く、次いでレベル2、レベル4、レベル1が高い結果となった。STEAM教育の必要性を感じる学生は、「大いに必要」「ある程度必要」で96.0%が回答したほか、「ちょこプロの履修をほかの人に勧めたいか」という項目で、「とても当てはまる」「ある程度当てはまる」で94.0%が当てはまると回答しており、STEAM教育の必要性を感じている学生が多く、口コミによる広がり履修者が増えてきたことから、勧めたいということが裏付けられた。

「プログラムに参加して自分のどのようなところに自信が持てるようになったか」という自由記述の項目をテキストマイニングで分析した結果、「協働」「ロジカルシンキング」「コミュニケーション力」という言葉が複数あげられ、本授業でシラバスに記載された、「文理融合や分野融合による学びの価値を実感することを目的に、学域・学類、学年を越えた学生



## KU-STEAMアカデミック・アドバイジングのイメージフロー



図表IV-17 アカデミック・アドバイジングとピア・サポートを融合した学修支援の概要

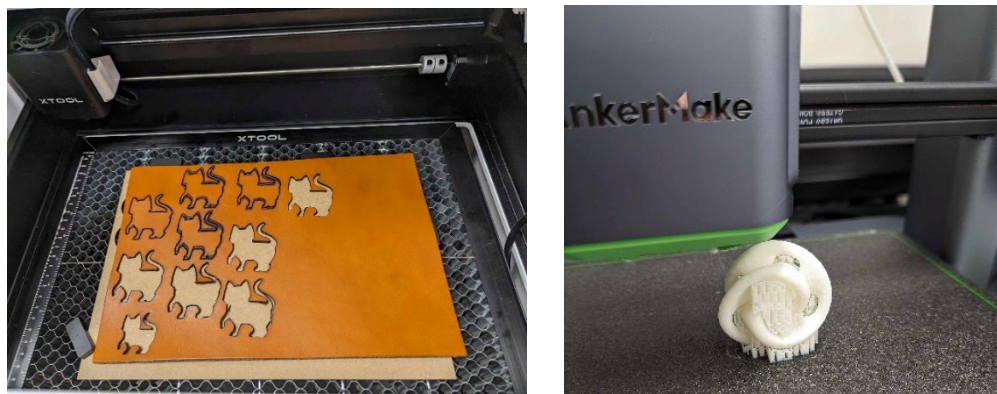
まず、プログラムの履修ガイド、履修モデルの提示（広報活動を含む）では、4学域19学類、約1,800名の新入生を対象に「オリエンテーション等」において、KU-STEAMのパフレットの先輩履修者の声をもとにプログラムの説明を行った。また、融合・人間社会・理工・医薬保健の4学域の学生が実際に体験談を語り、教員から授業内容や履修方法等について説明を行う「ランチョンセミナー」を合計9回開催し、累計11名のゲストを招き、323名（学生282名、教職員41名）の参加があった。これによって、気軽に先輩履修者の体験談を聞くことができる機会を提供できた。



図表IV-18 「ランチョンセミナー」の様子

次に、正課及び正課外での学びの機会ガイドや成長の促進（自立的学修支援）では、学生との面談を行い、学生スタッフの活動拠点として、教学マネジメントセンター内に「STEAMラボ」を設置した。「STEAMラボ」でのアカデミック・アドバイジングの件数も着実に増えており、これまでの支援内容としては、授業関連(質的分析、授業課題)、課外活動(イベント、チラシ制作)、デザイン・映像編集、起業相談等があげられる。また、「STEAMラボ」

では、学生スタッフ同士の意見交換や各種作業を行うスペースを設けており、撮影機材、動画編集作業用の高性能PC、動画・イラスト編集ソフトのほか、学習用の図書等を用意している。さらに、令和5年度には3Dプリンターやレーザーカッターを新たに導入し、試作品の製作など、学生の希望に応じて新しいことに挑戦する、またはスキルアップできる機会を提供している。



図表IV-19 「STEAM ラボ」の様子



図表IV-20 KU-STEAM 学生スタッフが作成した学内広報用チラシ（一部）

さらに、学修者同士がつながる連鎖とコミュニティづくり（コミュニティ創出支援）では、KU-STEAM プログラムの関連科目を履修した学生がサポーターとして活動に「ピア・サポーター」として参画している。ピア・サポート、ファシリテーションの事前研修を行い、アイスブレイクの実施やグループワークの伴走支援として成果をあげている。課外活動では、高校生対象のイベント（探究・STEAM フェスタ）での対話スキルを發揮し、探究心を引き出す試みに広がっている。コミュニティ化の一環として、KU-STEAM 学生スタッフは後述



するが、教員によるアカデミック・アドバイジング(AA)とともに、学生同士が支え合い、学び合うピア・サポートのコンセプトを融合させながら、教職学協働によるラーニング・コミュニティを創設することが重要である。

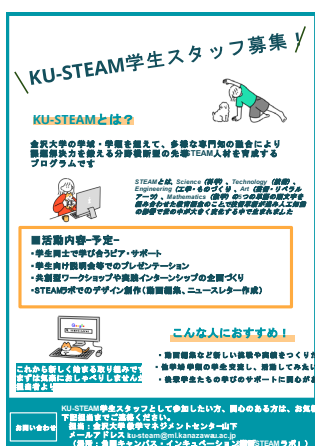
本事業では、アカデミック・アドバイザーを務める教員を中心に、KU-STEAM 学生スタッフが連携する形で、ランチョンセミナーや STEAM ラボの場づくりを通して、新しい学修支援スタイルを目指している。



図表IV-21 学生同士の「ピア・サポート」の様子

## 6. KU-STEAM 学生スタッフの取組

学域・学類を越えて、多様な専門知の融合により課題解決力を鍛える文理融合・分野横断型の先導 STEAM 人材を育成するプログラムでは、担当教員によるアカデミック・アドバイジングに加えて、学びの主体者として、学生同士で学び合うピア・サポート、学生向けの説明会等でのプレゼンテーション、共創型ワークショップや実践インターンシップの企画づくり、STEAM ラボでのデザイン創作（動画編集、チラシやニュースレター作成）など、学生同士の学び合いを大切に、ピア・サポート体制の整備を進めている。このような活動に関わる KU-STEAM 学生スタッフを令和 3 年度に創設して以来、各学域の 1 年生から大学院学生まで、47 名（令和 6 年 3 月現在）が登録している。教職員の研修以外にも、学生スタッフが自主的に自らの得意を持ち寄って学びあう自主勉強会などが誕生している。



図表IV-22 学生スタッフ募集チラシ



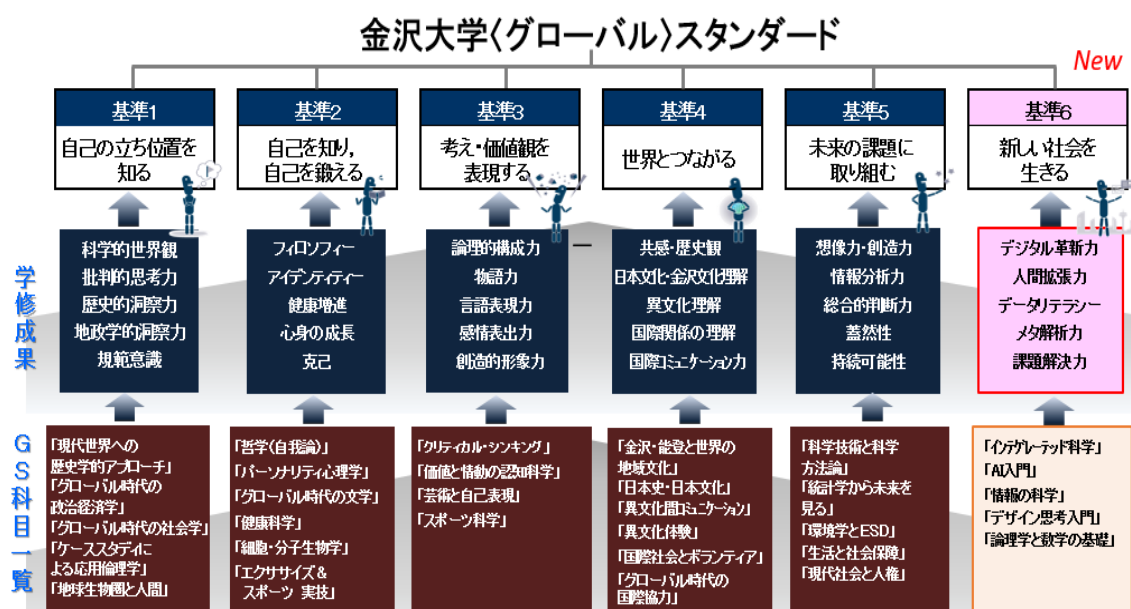
図表IV-23 学生スタッフ紹介ボード

V. 新しいリベラルアーツ教育・  
STEAM 教育に関する取組実績



## 1. 共通教育科目 GS 科目 6 群の取組

学士課程のリベラルアーツ科目である共通教育科目 GS 科目と学域 GS 専門科目は、世界で活躍する「金沢大学ブランド」人材育成のために設けられた本学独自の人材育成方針である「金沢大学<グローバル>スタンダード (KUGS)」に基づき開設した授業科目であり、次の 5 項目 (5 群) : 1.自己の立ち位置を知る, 2.自己を知り, 自己を鍛える, 3.考え・価値観を表現する, 4.世界とつながる, 5.未来の課題に取り組む, により構成していた。本事業の下, 令和 3 年 4 月に新たに STEAM 教育を取り入れた**第 6 のスタンダード「新しい社会を生きる」(Society 5.0 において, 幅広い分野や考え方を俯瞰して異分野をつなげる力と新たな物事にチャレンジするマインドを備え, 多様な他者との協働により未来の社会的課題を解決に導くための能力)**に基づく 5 科目を開設し, 既存のスタンダードと同列に学修目標を設定した。



図表 V-1 金沢大学 (グローバル) スタンダード概要

共通教育科目 GS 科目に「新しい社会を生きる」と題した 6 群を新設し, **STEAM 教育の各領域に対応した図表 V-2 に示した 5 科目を令和 3 年度から開講しており, 令和 5 年度には, 延べ 6,310 名程度の学生が履修した。**デザイン思考入門, AI 入門等の担当教員を新たに採用し, シラバス及び教材作成のための担当教員間の FD 活動を積極的に行い, 授業内容の充実を図っている。

教学マネジメントセンターでは, 学生授業評価アンケート結果を活用し, 共通教育科目 GS 科目 1 群から 6 群における共通設問「①授業内容の適切性」「②担当教員の説明の仕方」「③授業外学修時間」「④授業理解度」「⑤学修目標達成度」「⑥授業満足度」の 6 項目について, 定期的に比較分析を行い, FD 委員会等を通して全学にフィードバックしている。令和 4 年度学生授業評価アンケート結果 (図表 V-3) では, GS 科目 5 群が全項目において他群に比べ, 平均スコアが高くなっているほか, 新設された GS 科目 6 群は, 前年度同様に, 「授業外学修時間」が多くなっていることが特徴的である。

図表 V-2 共通教育科目 GS 科目 6 群の概要

STEAM 領域	授業科目	学修成果				
		デジタル革新力	人間拡張力	データリテラシー	リタ解析力	課題解決力
Science	インテグレート科学	○	◎	—	—	
Technology & Engineering	AI 入門	◎	—	○	○	○
	情報の科学	○	—	◎	○	—
Arts	デザイン思考入門	—	○	—	○	◎
Mathematics	論理学と数学の基礎	—	○	○	◎	○

図表 V-3 学生授業評価アンケート結果を通じた共通教育科目 GS 科目の各群比較

		回答数	回答率	①授業内容の適切性	②担当教員の説明の仕方	③授業外学修時間	④授業理解度	⑤学修目標達成度	⑥授業満足度
				(-50~50の101段階のスコア平均)	(-50~50の101段階のスコア平均)	(授業1回あたりの時間数平均)	(-50~50の101段階のスコア平均)	(-50~50の101段階のスコア平均)	(-50~50の101段階のスコア平均)
共通教育 GS科目	1群	5,165	98.34%	29.55	26.14	3.01	24.35	24.60	25.07
	2群	6,384	98.11%	31.86	29.70	2.90	27.73	27.29	29.35
	3群	4,483	98.79%	30.49	27.99	2.56	26.60	26.29	27.85
	4群	4,493	98.16%	30.22	27.84	3.08	26.14	25.61	26.74
	5群	5,416	98.63%	33.48	31.59	3.74	29.74	28.34	29.94
	6群	5,401	99.19%	30.30	25.08	3.53	24.15	24.60	25.46

## 2. 学域 GS 科目の取組

同じく令和 3 年度から、学域内の分野横断型専門科目として学域ごとに定める「学域 GS 科目」の内容を刷新した上で、前年度までの 2 単位から 8 単位（一部 6 単位）の選択必修とし、質・量ともに拡充した。従前の学域を俯瞰する科目群の履修に加え、新たに、大学で学ぶ上で欠かすことのできない主体的・自主的学習への動機づけやそれぞれの専門分野の社会的な役割を学ぶ「アカデミックスキル」（1 単位）と高校及び教養教育の学びからの橋渡しと少人数ゼミナール形式で学ぶ「プレゼン・ディベート論」（1 単位）の 2 科目を必修、加えて「データサイエンス応用系科目群」から 2 単位以上を選択必修とし、各専門分野におけるデータサイエンスの利活用を学ぶ。

令和 4 年度授業評価アンケート結果を用いて、各学域における専門教育科目全体と学域

GS 科目群との比較分析を行ったところ、いずれの学域においても学域 GS 科目の授業評価アンケート結果のスコアが高いことが明らかとなった。学域 GS 科目の教育成果及び学修成果について継続的に把握・分析を続けることとしている。

図表 V-4 令和 4 年度学域 GS 科目群に関する授業評価アンケート結果分析

学域名	区分	回答数	①授業内容の適切性 (-50~50の101段階 のスコア平均)	②担当教員の説明の仕方 (-50~50の101段階 のスコア平均)	③授業理解度 (-50~50の101段階 のスコア平均)	④学修目標達成度 (-50~50の101段階 のスコア平均)	⑤授業満足度 (-50~50の101段階 のスコア平均)
融合学域	学域GS科目群	356	31.95 ↑	32.92 ↑	29.91 ↑	27.26 ↑	31.66 ↑
	専門教育科目全体	2,151	26.10	23.07	21.79	22.56	21.40
人間社会学域	学域GS科目群	2,252	32.77 ↑	31.03 ↑	29.75 ↑	28.50 ↑	30.78 ↑
	専門教育科目全体	25,766	30.53	28.28	26.31	25.51	27.69
理工学域	学域GS科目群	3,700	30.82 ↑	28.69 ↑	27.87 ↑	27.16 ↑	28.04 ↑
	専門教育科目全体	31,550	28.97	25.24	22.85	22.80	23.77
医薬保健学域	学域GS科目群	1,797	34.37 ↑	32.88 ↑	31.52 ↑	30.77 ↑	32.78 ↑
	専門教育科目全体	16,440	32.16	29.49	27.24	26.39	28.24

### 3. デザイン思考テストの実施

KU-DP 事業で取り組む文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）では、知識集約型社会（Society 5.0 社会）が目指す人間中心の暮らしや経済を実現するために資する人材育成を目指している。具体的には、「デザイン思考」や「アントレプレナーシップ」を身に付けながら新しい価値を創造するイノベーション人材の育成である。

新たな価値創造の分野が「モノ」から「コト」にシフトしてきている中で、「コト」のデザインを行うことができる資質・能力が分野を問わず大事になってきている。

このような観点から、「デザイン思考力」を測定するアセスメントテストを試行導入し、KU-DP 事業で展開する文理融合・分野横断教育（STEAM 教育）の教育成果及び学修成果の把握と検証に役立てることとする。

「デザイン思考力」を測定する動きは、香川大学において独自開発による導入が検討されているが、本学では、就活生を主な対象として 20 万人規模の受検実績を有する VISITS Technologies 株式会社が開発する「デザイン思考テスト」について昨年度の試行導入を受けて、令和 5 年度からは、共通教育科目 GS 科目 6 群「デザイン思考入門」受講生を対象に本格実施を始めた。

【受検状況】

実施時期：令和5年度 Q1～Q4

受検対象：「デザイン思考テスト」 Q1・2クラス（117名）， Q2・2クラス（120名）， Q3・1クラス（60名）， Q4・1クラス（60名） 計357名

受検方法：授業時間内での受検実施

回答者数：創造セッション及び評価セッションをすべて完了した者は、346名（回答率92.3%）

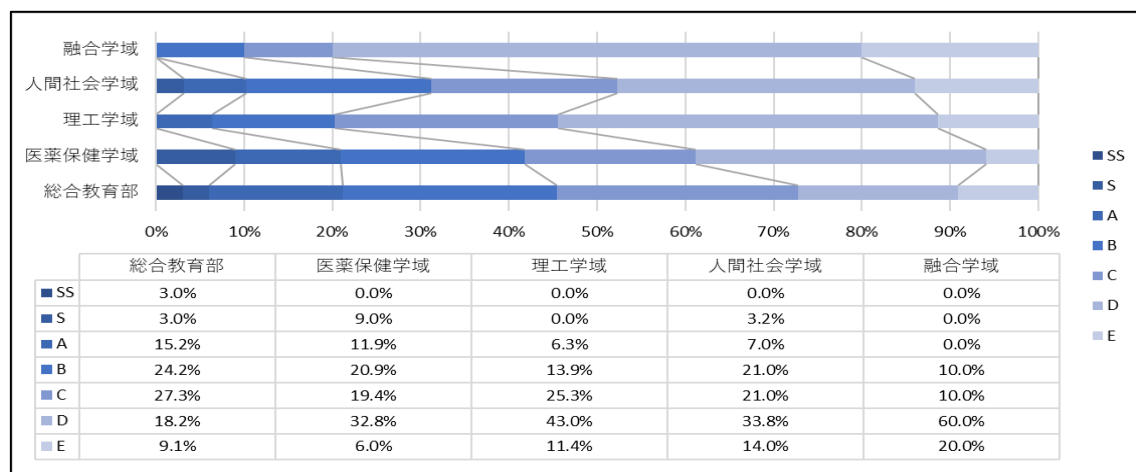
【受検結果概要】

（1）受検者内訳

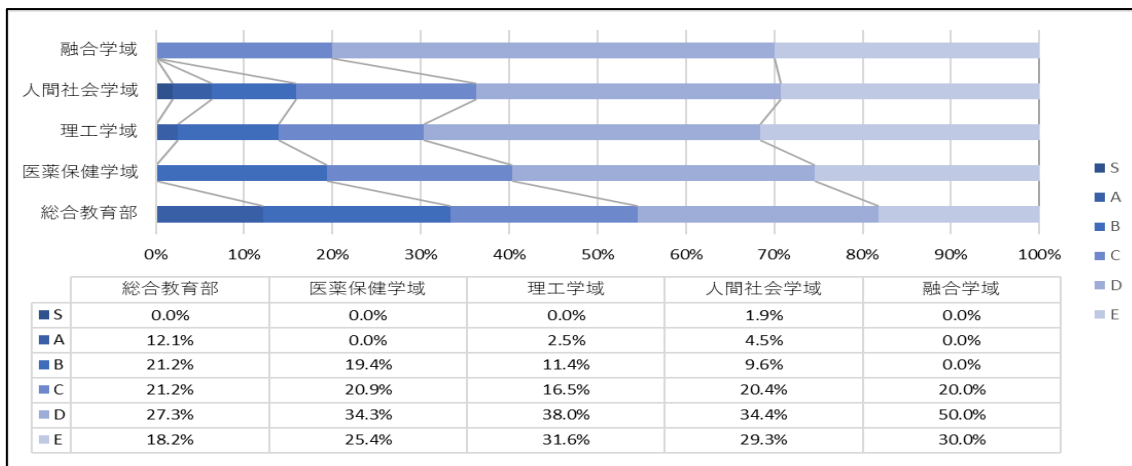
学域等	学年			総計
	1年次	2年次	3年次	
融合学域	1	9		10
人間社会学域	49	99	9	157
理工学域	21	50	8	79
医薬保健学域	51	15	1	67
総合教育部	33			33
総計	155	173	18	346

（2）創造セッション

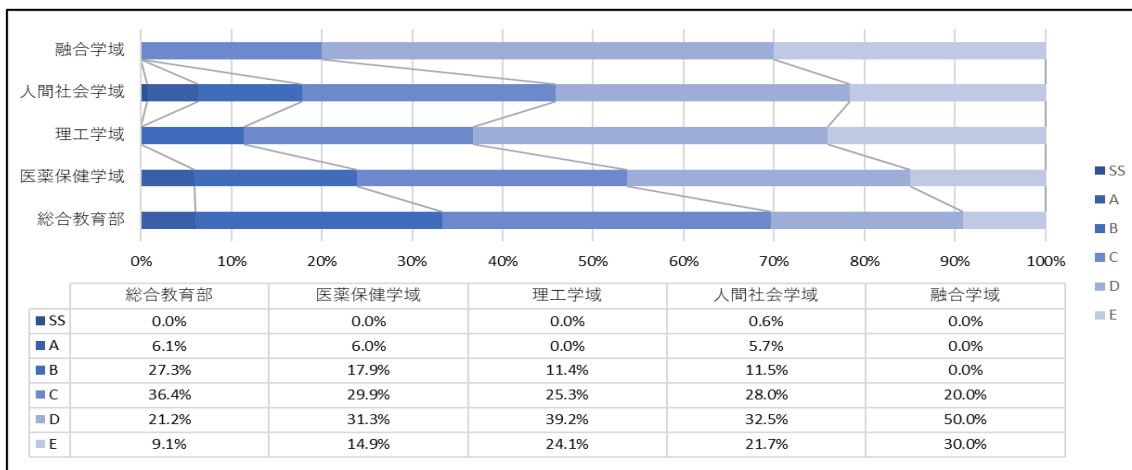
① ニーズ発見カランク



## ②ソリューション創出カランク

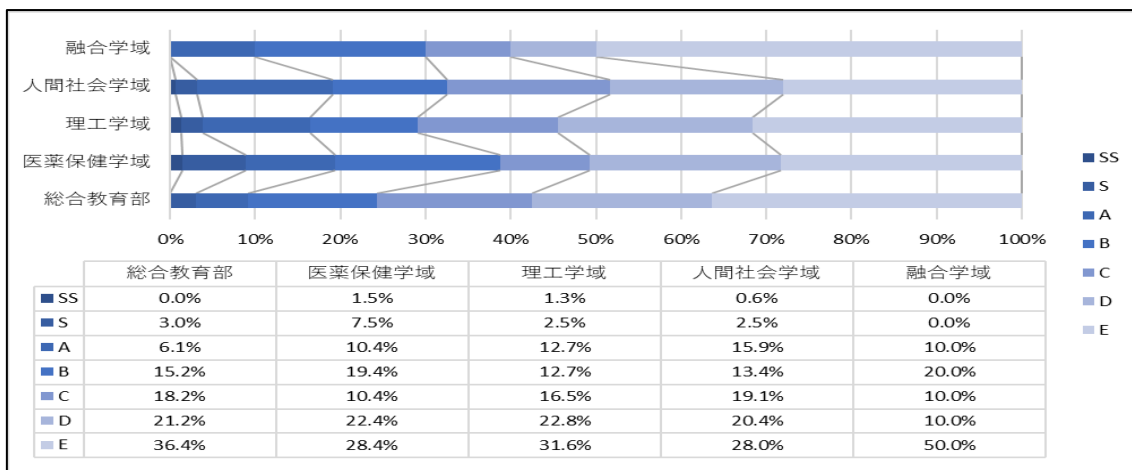


## ③創造カランク

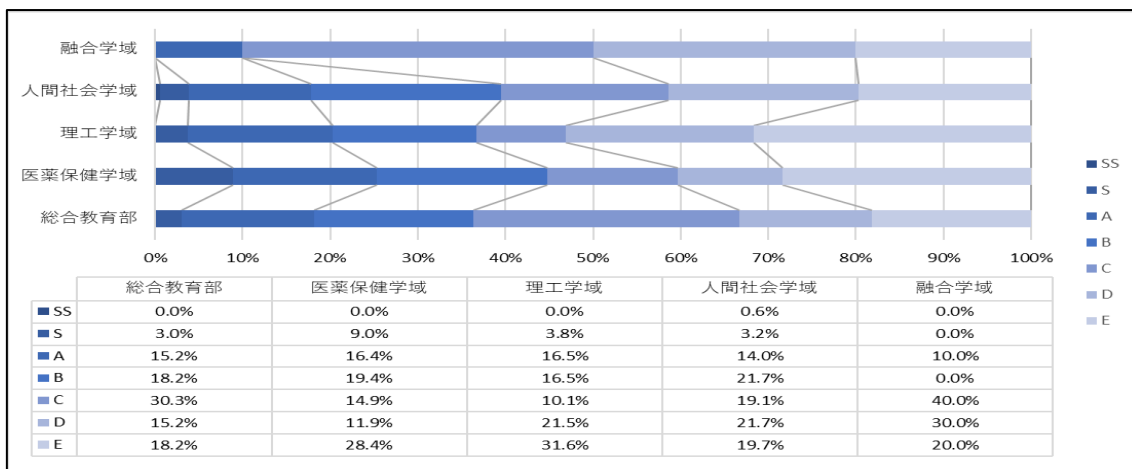


## (3) 評価セッション

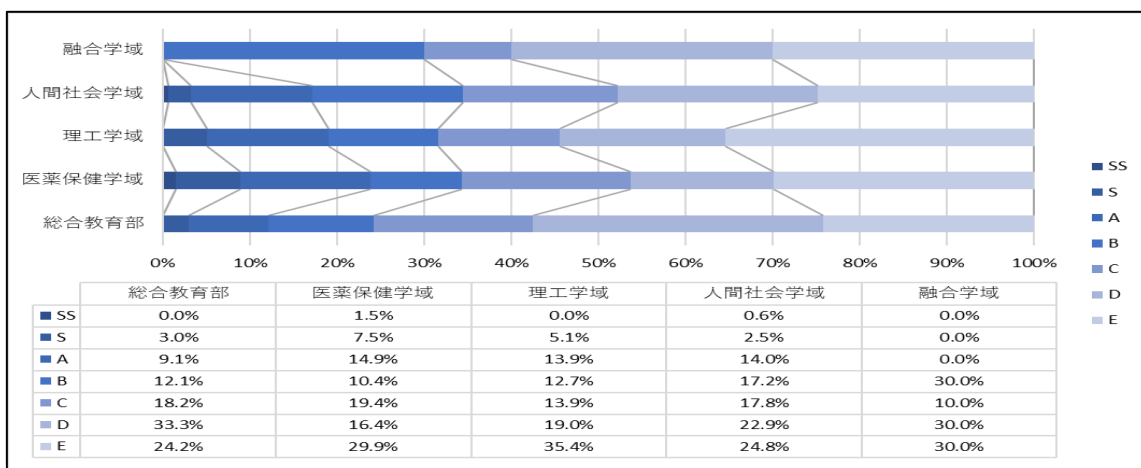
### ①ニーズ評価カランク



## ②ソリューション評価カランク

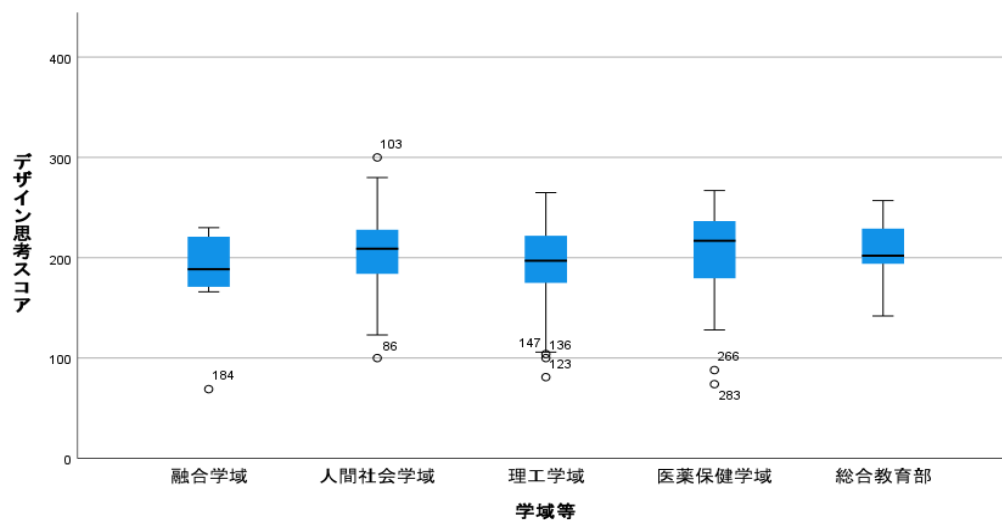


## ③評価カランク

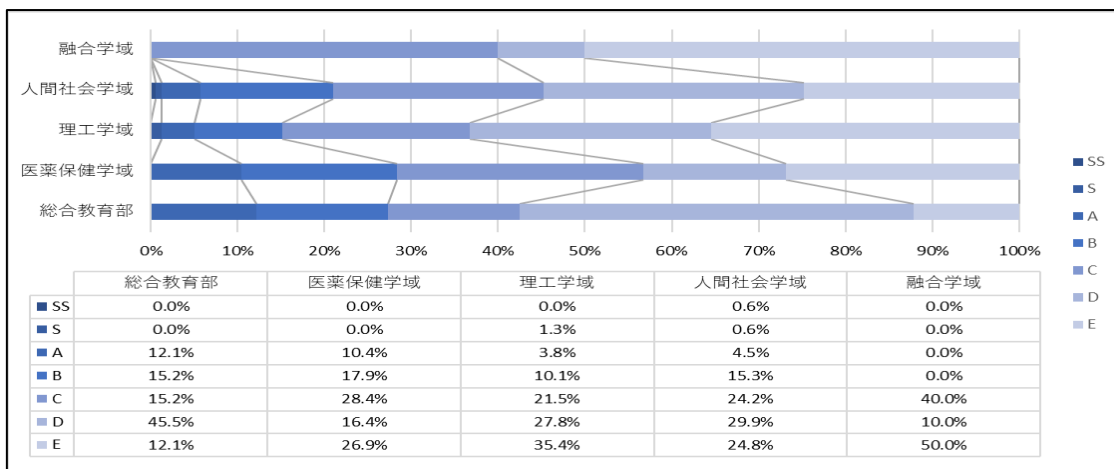


## (4) デザイン思考テスト全体

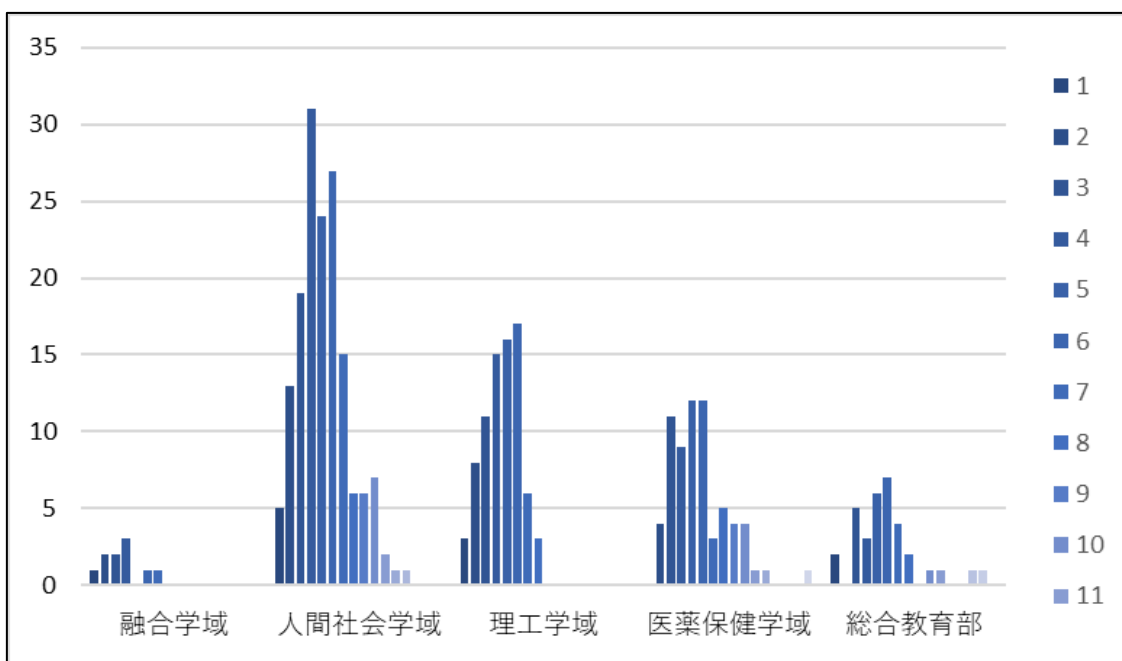
### ①デザイン思考スコア



## ②デザイン思考スコアランク



## ③アイデア数



図表 V-5 令和5年度「デザイン思考テスト」結果概要



#### 4. 大学院 GS 科目の拡充

令和4年度から、リベラルアーツ教育拡充を一つの軸として共通教育科目 GS 科目、学域 GS 科目の拡充に続き、大学院課程にその成果を波及させ、大学院 GS 科目を拡充した。全研究科を横断して共通開講する大学院 GS 基盤科目（修士・博士前期課程）、大学院 GS 発展科目（博士・博士後期課程）を開講し、各4単位の修得を全ての大学院学生に課している。

特に、大学院 GS 基盤科目の一つである「知識集約型社会とデータサイエンス」では、文理融合教育や STEAM 教育の意義や価値を学びながら、総合知の創出に貢献する学修機会を全研究科の学生に提供している。

なお、教学マネジメントセンターでは、大学院課程における大学院 GS 科目の学修目標を体系化しつつ、カリキュラム上の位置付けを明確化するため、大学院課程<グローバル>スタンダードとの関係性を可視化する整備に取り組んでいる。

図表 V-6 博士前期課程・修士課程における大学院 GS 基盤科目一覧

科目名称	単位	充足要件	担当	開設クラス	開講Q	曜日時限
異分野研究探査 I Laboratory Rotation I	0.5	必修	各研究科	—	Q1~Q2	集中
異分野研究探査 II Laboratory Rotation II	0.5	必修				
研究者倫理 Research Ethics	1	必修	垣内康孝 黒川英徳 GRUENEBERG.P 各研究科	9	Q1	水5 金1 金3 金4 火4 水6 水2 月5/月6 Q3 木1
知識集約型社会とデータサイエンス Data Science in Society 5.0	1	選択必修 1単位	林透 南保英孝	3	Q3 Q3 Q4	水5 火4 集中
次世代の先端科学技術 Advanced Science and Technology in the Next Generation	1		米田隆 各研究所 各センター	1	Q1	木6
スマート創成科学 Smart Science and Technology for Innovation	1		西山宣昭 藤生 慎 大野浩之 森 祥寛	3	Q3 Q4 Q3	火2 金2 金2
イノベーション方法論 Innovation Methodology	1		秋田純一 浅川直紀 他	2	Q1 Q2	月6 月6
数理・データサイエンス・AI基盤 Mathematical, Data Science, and AI Basic	1		各研究科	—	Q1~Q2/ Q3~Q4	集中
人間と社会の課題 Human and social challenges	1		小林宏明 他	2	Q2 Q4	水5 集中
ビジネス・技術マネジメント戦略論 Strategy for Business and Technology Management	1		木綿隆弘 他	8	Q1 Q1 Q1 Q1 Q1 Q1 Q1 Q1	集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中
ヘルスケア・イノベーション Innovation in Healthcare	1	米田隆 佐々木 米田貢	1	Q2	木6	
破壊的イノベーションに向けた技術経営論 MOT as for Disruptive Innovation	1	松島大輔	1	Q3	水3	

図表 V-7 博士後期課程・博士課程における大学院 GS 発展科目一覧

大学院GS発展科目名	単位	充足要件	担当教員	開設クラス	開講期	曜日時限
次世代研究者倫理 Research Ethics for Ph.D. Researchers	1	必修	各指導教員等	—	Q1	集中
次世代エッセンシャル実践 Transferable Skills for Ph.D. Researchers	1	必修	プログラム履修学生の指導教員	—	各研究科で設定	集中
次世代イノベーション開拓 Unleashing the Potential of Innovation for Future	1	選択必修 1単位	融合研究域 松島大輔	1	Q2	集中
数理・データサイエンス・AI発展 Mathematical, Data Science, and AI Advanced	1		各指導教員等	—	Q1~Q2/ Q3~Q4	集中
国際研究実践 International Collaborative Research for Innovation	1	必修	各研究科教員	—	各研究科で設定	集中
ジョブ型研究インターンシップ Cooperative Education through Research Internships	2	選択	各指導教員等	—	各研究科で設定	集中

## VI. 教学マネジメントセンターに関する取組実績

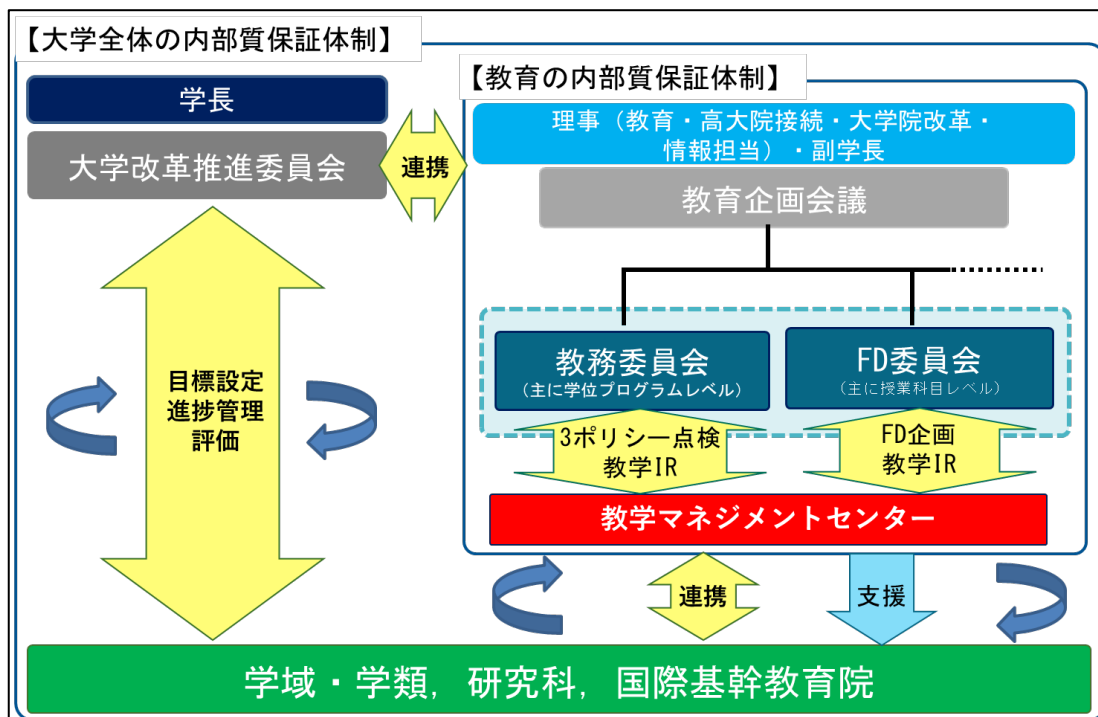
## 1. 教学マネジメントセンターの業務概要

学長のリーダーシップの下、本学のFD支援、教学マネジメントを担ってきた国際基幹教育院高等教育開発・支援系及びICT教育支援を担ってきた総合メディア基盤センターを発展的に解消し、新たに令和3年4月に教学マネジメントセンター及び学術メディア創成センターを設置し、両センター連携によりFD、教学IR、教育DXを一体として推進する体制を構築した。

学内のマネジメント体制強化のため、教育担当理事の下に置く組織として位置付け、学内の連絡・調整を円滑にするため、全学の教務委員長・FD委員長を務める学長補佐をセンター長に据え、センターの業務を掌理する体制とした。教学マネジメントセンター設置以降、教育の内部質保証体制の明確化の観点から、各種検討や学内調整を重ねつつ、現在は、図表IV-1に示す組織体制において、日々の活動を行っている。

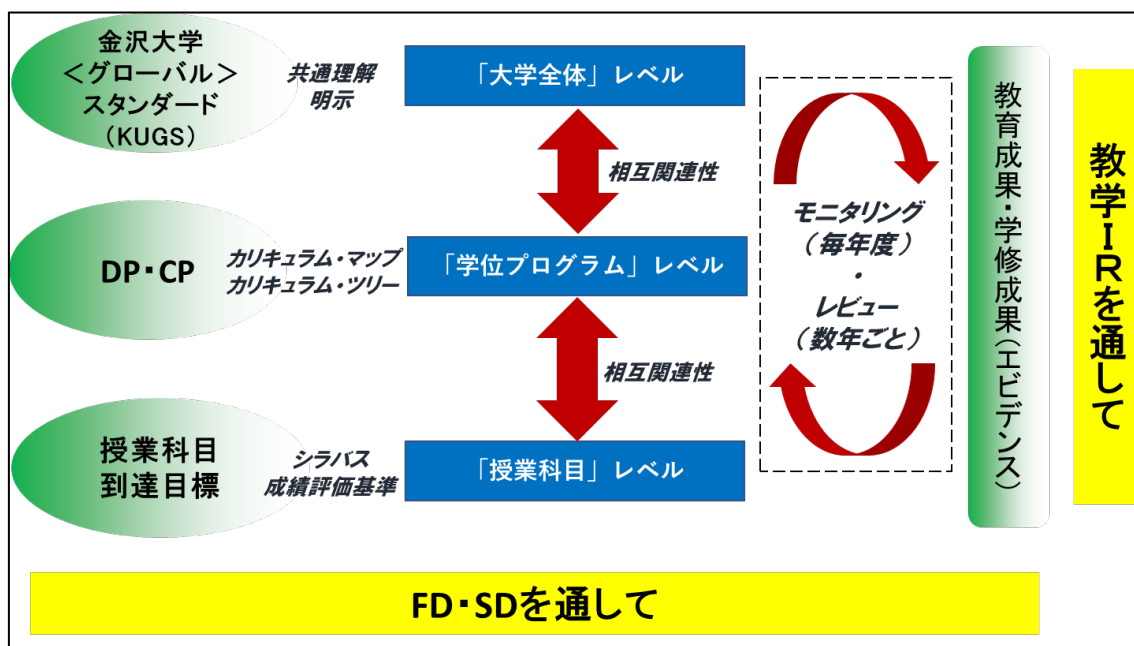
教学マネジメントセンターの具体的な所掌業務は、以下のとおりである。

- ① 全学の教学マネジメントの確立、学位プログラム等における教育の質保証及び質向上に関すること。
- ② 教育方法、教育システム及び教育支援等に関する研究開発並びに教育に係る質保証システムの研究開発に関すること。
- ③ 全学的に取り組む教育事業及び分野横断的学位プログラムの企画立案、運営及び評価に関すること。
- ④ 教育スキルの向上に資する支援に関すること。
- ⑤ 全学のFD・SDの企画・実施及び学域・研究科等のFD・SD活動の支援に関すること。



図表VI-1 教学マネジメントセンターの設置及び関係組織との連携体制

教学マネジメントセンターの諸活動を始めるにあたり、『教学マネジメント指針』（中央教育審議会大学分科会 2020）に示された「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルに応じた教学マネジメントの枠組を図表VI-2、VI-3のとおり体系づけながら、各レベルに応じたFD・SD、教学IRの環境整備と具体的取組を進めている。



図表VI-2 教学マネジメントセンターが支援する教学マネジメントの枠組の概要図

項目 レベル	教育・学修目標	改善充実のための機会 (FD・SD)	アセスメントツール (教学IR)
大学全体レベル (マクロ)	金沢大学 <グローバル>スタンダード (KUGS)	全学FD 新任教員説明会	学生生活実態調査 卒業・修了後アンケート
学位プログラムレベル (ミドル)	(各学類、専攻で定めた) ディプロマ・ポリシー (DP)	全学FD 学域・学類、研究科FD	卒業・修了者アンケート DP達成度自己評価
授業科目レベル (ミクロ)	(シラバスに明記された) 学修目標	全学FD 学域・学類、研究科FD 新任教員説明会 CLA研修	授業評価アンケート 成績評価分布

図表VI-3 アセスメントプランの枠組の概要図

## 2. FD・SD 活動の枠組と実績

令和 3 年度の教学マネジメントセンター設置以降、教育担当理事及び学長補佐（教育改革・学修支援担当）の指示のもと、全学的視点に立った FD・SD 活動を行いながら、部局 FD との協働・連携・支援を行っていく必要があるため、「全学 FD・SD」と「部局 FD」の関係性について事項整理しながら、「全学 FD・SD」で担うべきこと、「部局 FD」で担うべきことを明確化した。

### 【「全学 FD・SD」の役割と基本メニュー】

#### ①「全学 FD・SD」の役割

- ◆大学の理念や基本方針の理解と共有
- ◆教職員として知っておくべき事項、遵守すべき事項の理解と共有
- ◆各年度における教学関連の全学的課題の理解と共有
- ◆教職協働，教職学協働のための場づくり

#### ②「全学 FD・SD」の年間メニュー（基本セット）

図表VI-4 全学 FD・SD の年間メニュー（基本セット）

時期	内容
4月	新任教員説明会
4月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）研修会，高度TA研修会
9月	全学FD研修会
10月	FD活動報告書成果発表会
12月	教学マネジメントセミナー（全学FD・SD）
2月	CLA（クラス・ラーニング・アドバイザー）実施報告会
2月または3月	教員向け英語研修会
3月	全学FD研修会（当該年度成果報告会）

### 【「部局 FD」の役割と基本メニュー】

#### ①「部局 FD」の役割

- ◆各部局における主要事項の理解と共有
- ◆各部局における各年度での諸課題の理解と共有
- ◆各部局における授業・カリキュラム，学修状況・成果の把握・検証
- ◆各部局における全学的課題の理解と共有

## ②「部局 FD」の基本メニュー

各部局に応じた組織単位での実施を尊重しつつ、部局主催での FD 活動について、以下の二つの区分に整理した。

ア) 個別テーマ型 FD・・・部局における主要事項の理解と共有、部局における各年度での諸課題の理解と共有を目的として、当該部局が独自のテーマ設定により実施する FD

イ) 統一テーマ型 FD・・・全学的課題の理解と共有などを目的とし、教学マネジメントセンター等が連携・支援しながら実施する FD  
(授業評価アンケートや卒業・修了者アンケート等の結果報告、機関別認証評価で求められる学位プログラム単位の DP・CP、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーに関する点検・見直しなど)

令和 5 年度においては、FD 委員会及び教学マネジメントセンターが企画実施する定例的な全学 FD 研修会に加え、先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) の周知を主な目的とした、教職学協働型の KU-STEAM ランチョンセミナーを昨年度に続き企画実施した。また、高大接続コア・センターと共同主催した「探究・STEAM フェスタ」についても昨年度に続き企画実施し、高校生・高校教員と大学生・大学院学生・大学教員が集う対話の場づくりを設けることができた。

本学では、各種セミナー・シンポジウム等を「知識集約型社会を支える人材育成事業」幹事校企画として学外に広く公開するとともに、録画データ及び配布資料を学内ポータルサイトに公開・配信している。なお、令和 5 年度に入り対面での実施が主となっているが、対面とオンラインそれぞれのメリットを活かした効果的な FD 機会を提供していきたい。

令和 5 年度全体の FD・SD 実績は以下のとおりである。

図表 VI-5 令和 5 年度 FD・SD 実績の概要

内 容	開催月日	参加者数
新任教員説明会	4月4日(火) 午前の部 4月4日(火) 午後の部	53名 83名
KU-STEAMランチョンセミナー	4月下旬～11月上旬 計9回開催	323名
全学FD研修会 「分野を超えた専門知の組み合わせとは～Society5.0における人材育成の姿～」	8月8日(火)	118名 (学外公開)
全学FD研修会及びKU-DPアドバイザーボード 「実践インターンシップを通じた学びの成果発表と意見交換」	9月27日(水)	62名 (学外公開)
全学FD研修会 FD活動報告書成果発表会	10月27日(金)	51名
「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」共通テーマ4参加校合同主催 教学マネジメントセミナー2023 「文理横断・文理融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」	11月28日(火)	166名 (学外公開)
高大接続ラウンドテーブル特別企画 「探究・STEAMフェスタ2023 ～高校生の探究心に火を灯す～」	12月10日(日)	114名 (学外公開)
令和5年度「知識集約型社会を支える人材育成事業」 採択校合同シンポジウム	2月27日(火)	145名 (学外公開)



### 3. 学位プログラムレベル・授業科目レベルを中心とした教学マネジメント環境整備

教学マネジメントセンターでは、昨年度に続き、学位プログラムレベル、授業科目レベルを中心とした教学マネジメントに関する基本的な環境整備を進めた。

具体的には、昨年度再整備した3つのポリシーの一貫性のある見直しを受けて、教育の内部質保証に関する指針の策定、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの体系的再整備を行うとともに、学類長ヒアリングの実施、さらには、大学院学生版トランスファブルスキルの策定に向けた検討を行った。

#### 3.1 「金沢大学における教育の内部質保証に関する指針」の策定

未来ビジョン『志』 milestone において、下表のとおり目標設定した「学位プログラム評価の仕組みの構築」を目的に、教育の内部質保証の規定化に取り組んだ。この規定化の作業は、いわゆる「アセスメントプラン」の策定作業に該当するものであり、茨城大学『教育の内部質保証マニュアル』等の他大学の事例を参照しながら、取りまとめを行った。

図表VI-6 金沢大学未来ビジョン『志』 milestone 抜粋

教育-1-③-2	学位プログラムレベルの教学マネジメントの強化		担当理事等 (担当部局)	教育・高大院接続・大学院改革・ 情報担当理事(学務部)
行程(時期及び具体的な事項を簡潔に記載すること)				
2022年度	2023年度	2024~2025年度	2026~2027年度	
<ul style="list-style-type: none"> <li>3つのポリシーの策定内容の把握・改善</li> <li>カリキュラムマップ及びカリキュラムツリーの改善充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラム評価の仕組みの構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラム評価の実施</li> <li>大学全体レベル及び部局レベルの内部質保証体制の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラム評価の完了</li> <li>大学全体レベル及び部局レベルの内部質保証体制の検証</li> </ul>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>機関別認証評価での是正勧告、改善課題に係る課題解決の実施</li> <li>学修成果ポートフォリオの活用とその分析の開始 IR</li> <li>卒業生の追跡調査 IR</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラム評価を支えるFD・SD、教学IRの学内環境の整備</li> <li>機関別認証評価での是正勧告、改善課題に係る課題解決の実施・大学基準協会への報告</li> <li>学修成果ポートフォリオの活用とその分析の継続</li> <li>前年度の継続実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラムレベルの教育成果及び学修成果の情報公表</li> <li>学修成果ポートフォリオの活用とその分析に基づくカリキュラム改革の検討</li> <li>前年度の継続実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学位プログラムレベルの教育成果及び学修成果を情報公表・検証</li> <li>学修成果ポートフォリオの活用とその分析に基づくカリキュラム改革の実施</li> <li>前年度の継続実施</li> </ul>	

教育の内部質保証については、「教学マネジメント指針」(中央教育審議会大学分科会(令和2年1月22日))に沿って、「大学全体レベル」「学位プログラムレベル」「授業科目レベル」の3つのレベルに分けて捉え、各レベルに応じた日常的な点検(モニタリング)及び総合的な点検・評価(レビュー)の方法を明記。

各学位プログラムの責任者は、毎年度1回の日常的な点検(モニタリング)及び7年に1回の総合的な点検・評価(レビュー)の結果について、教育担当副学長に報告。教育の内部質保証の推進責任者である教育担当理事・副学長は、教育企画会議の議を経て、内部質保証の統括責任者(学長)に報告。

日常的な点検(モニタリング)及び総合的な点検・評価(レビュー)において参照すべき

各種調査データ提供及び分析等について、各学位プログラムの責任者からの依頼の下、  
教学マネジメントセンターが支援。

### 3.2 カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの体系的再整備

令和 3 年度機関別認証評価における指摘事項を踏まえ、令和 4 年度には学士課程・大学院課程全般にわたり、ディプロマ・ポリシー (DP) 及びカリキュラム・ポリシー (CP) を中心とした 3 つのポリシーの体系的整理を行い、大学 Web サイトで公開した。これを受けて、令和 5 年度には、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの体系的整理を行うとともに、学修成果可視化システム (仮称) 運用のための環境を整えた。

なお、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーについては、『教学マネジメント指針』(中央教育審議会大学分科会 2020) において言及があるとおり、学位プログラムレベルの教学マネジメントにおいて、カリキュラム上の各授業科目の位置付けの明確化や授業科目間の相互関連性や順序性を明確化するツールとして重要不可欠なものであり、教育の内部質保証に関する点検項目として認証評価でも重視されている。

#### (1) カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの再整備

カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーについて、従来、学士課程のみ対象として、作成依頼を行ってきたが、新たに、大学院修士課程・博士前期課程も作成対象に追加し、再整備を行った。なお、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーの作成依頼にあたり、教学マネジメントセンターにおいて、作成マニュアル及びテンプレートを提示するなどの支援を行った。

#### (2) 学修成果可視化システム (仮称) 運用のための環境整備

カリキュラム・マップを活用し、学生個々人の学修度を可視化する仕組みを新たに導入することとしている。融合学域では、同学域が開発した「学びの計画書」を通して先行実施しているが、各学位プログラムの DP に関する授業科目の単位修得に応じて、学修度をカウントする学修成果可視化システム (仮称) を全学的に運用予定である。このシステムにより、学生自身の学修目標設定と振り返りを通じた主体的な学びの実現が期待される。

このため、(1) で作成依頼するカリキュラム・マップにおける授業科目ごとの関係する DP へのマーク付けを従来のような「◎」「○」「△」といった重み付けをなくし、「○」のみのマーク付けに簡素化を図った。

### 3.3 学類長ヒアリングの実施

近年、ディプロマ・ポリシー (DP) やカリキュラム・ポリシー (CP) を軸とした 3 つのポリシーに基づく学位プログラムレベル及び全学レベルの教学マネジメントが重視されている。教学マネジメントセンターでは、各学類における教育・学修の実態について把握し、教学マネジメントの更なる充実に資することを目的に、学類長及び教務担当教員を対象としたヒアリング調査を実施することとした。

併せて、昨年度の「知識集約型社会を支える人材育成事業」中間評価結果を踏まえ、全学で進める文理融合教育について専門教育の観点から更なる充実を図る必要性があることから、各学類における文理融合・分野横断教育の実態を把握することも目的とした。

#### 【調査対象・実施時期】

調査対象：人間社会学域・理工学域・医薬保健学域の全 17 学類

(※融合学域は、別途、「知識集約型社会を支える人材育成事業」中間評価対応で個別調査)

対応者：学類長及び教務担当教員

実施時期：令和 5 年 4 月 28 日（金）～6 月 15 日（木）1 時間～1 時間半程度

#### 【調査項目】

以下の項目を事前に送付し、半構造化インタビュー形式で行った。なお、以下の項目以外に、「学類における教学関係会議」「全学委員会から依頼事項に対する学類内での作業系統」「各年次における学生支援（アドバイザー教員、指導教員等）」のほか、「カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの活用度合」「卒業・修了者アンケート結果の活用度合」を聴取した。

- ①学類における DP・CP の認知度及び学生への説明機会について
- ②学類におけるカリキュラム・シラバス・成績評価分布・授業評価アンケートの定期的点検について
- ③専門教育の特徴・強み及び現在、学類が抱える教育上の課題について
- ④学類における学生の学修行動・学修成果の把握について
- ⑤学類における文理融合・分野横断教育について
- ⑥卒業論文・卒業研究の評価方法や評価基準について
- ⑦学類学生に対する研究指導体制について
- ⑧学類における FD 活動について
- ⑨学類におけるキャリア支援や留学支援について
- ⑩その他

#### 【ヒアリング調査結果概要】

<教学マネジメント関係>

- (1) 3つのポリシーの認知度、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの活用度合について、一層の改善充実が必要である。履修案内（学生の手引き）において、3つのポリシー、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーを掲載している部局が少なく、今後、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを掲載することが推奨される。
- (2) 卒業・修了者アンケート結果の部局内共有が不十分な部局が見られた。今後、卒業・修了者アンケート結果の有効活用について、全学 FD 委員会等を通して周知徹底していく必要がある。
- (3) 授業科目レベルにおけるシラバス作成の徹底や授業評価アンケート結果の確認は、どの部局においても行われている。なお、学校教育学類において、人間社会学域での授業評価アンケート実施クラス要件が「受講者数 20 名以上」となっていることについて改善の必要性をコメントされた。

<専門教育カリキュラムの工夫>

(4) 今回の学類長ヒアリング調査を通して、コースやプログラム単位で閉じることがないように、カリキュラム上の工夫を施している学類が相当数見られた。この傾向は、学域・学類制の本来の趣旨を押さえながら、分野横断型の教育を提供しようとする意図が感じられる。具体的には、学校教育学類共同教員養成課程、地域創造学類（プログラム移行後）、薬学類、医薬科学類では、年次を超えた学生交流機会（先輩の発表を後輩が聴講するなど）や複数の研究室体験・取材を授業科目化しているケースが見られる。

<専門教育における学修成果の把握>

(5) 学位プログラムとしての学修成果の把握の好事例として、薬学類「薬学研究」「実務実習」におけるルーブリック活用や保健学類看護学専攻における卒業時の看護分野知識・技能に関するチェックリスト活用が挙げられる。また、法学類では、専門教育科目における筆記試験の模範解答を学内限定で学生に開示しており、専門教育科目の質保証を図っている好事例として挙げられる。このほか、国際学類では、卒業論文に求められる観点を履修案内において明示している。

<TA 等の研修の再整理の必要性>

(6) 授業補助、実験補助を行う TA を対象とした研修やマニュアルが不十分な印象を受けた。今後、設置基準改正に伴う「指導補助者」の扱いが重要視される中で、CLA 研修、高度 TA 研修を含めた体系的再整備が必要と思われる。

<教学 IR に関する案件>

(7) 入学区分の違いによる入学後の学業状況、進路要件及び卒業研究着手要件における学生の履修状況について確認を行った。

### 3.4 授業評価アンケート結果のレーダーチャート表示の充実

教学マネジメントセンターでは、FD 委員会を通して、令和 3 年度までに授業評価アンケートの共通設問項目を整理したことを踏まえ、令和 4 年度より新しい授業評価アンケートシステムを運用し、共通設問項目の回答結果を各部局にフィードバックしている。令和 5 年度において、図表 VI-7、図表 VI-8 のとおり、各授業科目担当教員が授業改善を検討する際の参考となるよう、授業評価アンケート結果における共通設問項目の平均値と各授業科目の値をレーダーチャートで比較できる機能を追加した。比較対象は次のとおりである。

- 共通教育科目の授業評価アンケートの場合：当該アンケート実施期間における共通教育全科目の平均値
- 学域・研究科開講科目の授業評価アンケートの場合：当該アンケート実施期間における授業開講学域・研究科及び学類・専攻の平均値（ただし、医薬保健学域・研究科の授業開講学域・研究科及び学類・専攻の平均値は同一）

一般アンケート

公開期間中の一般アンケートはありません。

2022年度 対象学期: [---]

開講年度	開講学域・研究科	時間割コード	科目名	担当教員	開講期	曜日・時間	アンケート名		
1	2022	共通教育	71A10a.214	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	月4	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果
2	2022	共通教育	71A10a.215	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	月5	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果
3	2022	共通教育	71A10a.222	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	火2	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果
4	2022	共通教育	71A10a.223	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	火3	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果
5	2022	共通教育	71A10a.224	現代世界への歴史学的アプローチ	教員 太郎	Q2	火4	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート	集計結果

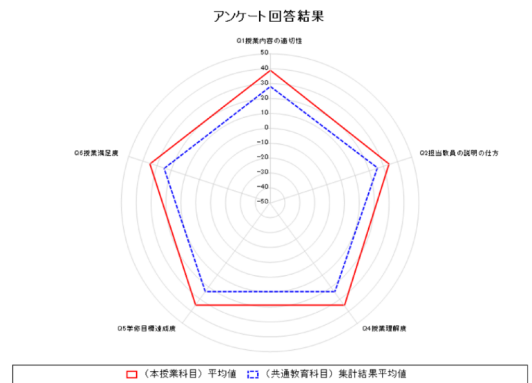
PDF出力

アンケート名	【共通教育科目】令和4年度Q2授業評価アンケート
実施期間	2022/07/25～2022/09/25
時間割番号	71A10a.222
科目名	現代世界への歴史学的アプローチ
担当教員	教員 太郎
受講者数	10

アンケート内容の適切性

Q1 この授業は、あらかじめシラバスに示された学習目標や授業計画に沿って行われましたか？ 【必須入力】

共通教育科目の授業評価アンケートの場合は、アンケート結果表示画面の末尾に本授業アンケートの平均値に加えて、同一アンケート内の共通教育科目の平均値が表示されます。



図表VI-7 共通教育科目における授業評価アンケート結果閲覧画面（担当教員用）

一般アンケート

公開期間中の一般アンケートはありません。

2023年度 対象学期: [---]

開講年度	開講学域・研究科	時間割コード	科目名	担当教員	開講期	曜日・時間	アンケート名		
1	2023	理工学域	52-20042.301	プレゼン・ディベート論	教員 太郎	Q2	火5	【理工学域】2023年度 第2 Q 授業改善のための学生アンケート～ Survey for course improvement ～	集計結果
2	2023	理工学域	52-41105	創造デザイン実習	教員 太郎	Q1,Q2	水3～5	【理工学域】2023年度 第2 Q 授業改善のための学生アンケート～ Survey for course improvement ～	集計結果
3	2023	理工学域	52-42125	創造デザイン実習	教員 太郎	Q1,Q2	水3～5	【理工学域】2023年度 第2 Q 授業改善のための学生アンケート～ Survey for course improvement ～	集計結果

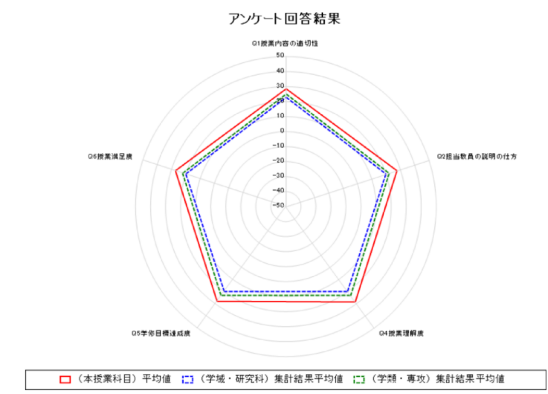
PDF出力

アンケート名	【理工学域】2023年度 第2 Q 授業改善のための学生アンケート～ Survey for course improvement ～
実施期間	2023/07/24～2023/09/25
時間割番号	52-20042.301
科目名	プレゼン・ディベート論
担当教員	教員 太郎
受講者数	

アンケート内容の適切性

Q1 この授業は、あらかじめシラバスに示された学習目標や授業計画に沿って行われましたか？ 【必須入力】

専門科目の授業評価アンケートの場合は、アンケート結果表示画面の末尾に本授業アンケートの平均値に加えて、同一アンケート内の同一学域・研究科の平均値  
同一学類・専攻の平均値  
が表示されます。



図表VI-8 専門教育科目における授業評価アンケート結果閲覧画面（担当教員用）

### 3.5 大学院課程<グローバル>スタンダードの見直し検討

本学では、令和4年度より、博士前期・後期課程における大学院GS科目が強化され、大学院生が将来のキャリアに備え、幅広い識見や異分野の知識・スキルを修得することで、主たる専攻分野での深い探究に役立つことを目指している。特に、昨年度採択を受けた科学技術振興機構「次世代研究者挑戦的研究プログラム～博士後期課程学生の挑戦を支援する～」では、博士後期課程学生が自分自身のキャリアを構築し、自立した研究者・技術者となることができるよう、「生活費相当額及び研究費の支給や、キャリア開発・育成コンテンツ（国際性の涵養、学際性の涵養、キャリア開発、トランスファラブルスキルの習得、インターンシップ等）をはじめとする様々な支援」を提供する取組を進めている。

また、令和4年度国立大学法人運営費交付金「成果を中心とする実績状況に基づく配分」の指標のうち、「大学教育改革に向けた取組の実施状況」として、博士前期課程・修士課程、博士後期課程・博士課程、専門職学位課程におけるトランスファラブルスキル（社会で広く活用できる汎用的なスキル）のカリキュラム上の明確化、さらには、トランスファラブルスキルを含めた学修成果の可視化や就職活動等での活用が求められている。

上記のような状況を踏まえながら、金沢大学未来ビジョン『志』milestoneにおいて、大学院教育における大学院学生版トランスファラブルスキルを策定することを行動計画として掲げている。

《令和4年度国立大学法人運営費交付金「成果を中心とする実績状況に基づく配分」の指標のうち、「大学教育改革に向けた取組の実施状況」に関する指標》

【博士前期課程・修士課程、博士後期課程・博士課程、専門職学位課程】

- ① 学生が、社会で広く活用できる汎用的なスキル（トランスファラブルスキル）等を身に付けた上で修了できるよう、組織的かつ体系的な教育・研究指導を通じて修得すべきスキル・資質・能力と、それに対応するプログラムが整理された上で可視化・実施されている。
  - a) 実施している
  - b) 実施していない
- ② ①が満たされた上で、成績表以外で、在学中から卒業・修了に至るまでその修得状況が学生ごとに客観的・多元的に可視化し、当該学生が確認するとともに、就職活動等において活用できる状態となっている。
  - a) 実施している
  - b) 実施していない

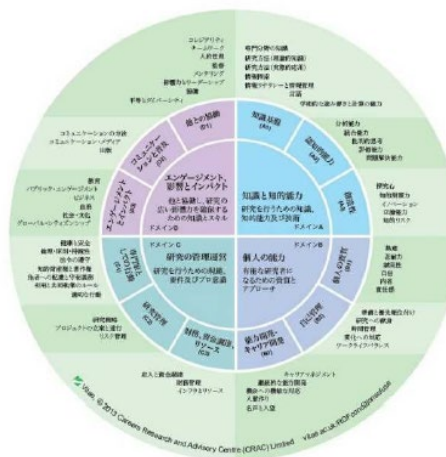
文科省の上記の指標に関する補足説明では、「社会で広く活用できる汎用的なスキル（トランスファラブルスキル）」とは、例えば、欧州科学財団（European Science Foundation）の報告書“Research Careers in Europe Landscape and Horizons”（2009）では、「一つの文脈で学んだスキル、例えば、研究を行う上で学んだスキルの中で、他の状況、例えば、研究であれ、ビジネスであれ、今後の就職先において有効に活用できるようなスキルのことである。そしてまた、トランスファラブルスキルがあれば、学問領域及び研究関連のスキルを効果的に応用したり、開発したりすることができるようになる」と定義されており、そうした取組を想定しています。」と記載があり、具体的な事例として、英国の非営利組織 Vitae

が 2010 年に開発した研究者人材に必要なトランスファラブルスキルのフレームワーク (RDF) を提示している。

なお、大学院教育におけるトランスファラブルスキル・トレーニングについては、2010 年代に注目され、大阪大学などにおいて当該トレーニングを行っている実績がある。

### Researcher Development Framework;

英国においてプロフェッショナル・ディベロップメントの分野で中心的な役割を担っている非営利組織 Vitae により開発された、研究者にとって必要な能力やスキル等を体系化したフレームワーク。4 つのドメイン、12 のサブドメイン、63 のディスクリプタで構成されている。ディスクリプタごとに必要スキルの詳細が定義されており、それぞれ研究者の段階（博士課程在籍者、ポスドク、卓越した研究者、シニア研究者/著名な研究者）に分けて細かく設定されている。



図表 VI-9 Researcher Development Framework(Vitae)

【これまで検討してきた方向性】

#### (1) 大学院課程<グローバル>スタンダードの改訂と学生・教職員への明示

本学では、大学院課程<グローバル>スタンダード（別添資料参照）が策定・公表され、「1. 強固なグローバルマインドと明確な倫理的思考：今後、人類が直面するグローバルな課題に果敢に挑戦し、常に一個の人間として、確たる倫理的普遍性をもった見識と判断の下に責務を遂行する能力」「2. 創造性・交渉力・統率力・実践力：解決困難な課題にも、革新的なアイデアと粘り強い交渉力を発揮し、強い統率力と確かな実践力をもって局面を開く能力」が掲げられているが、内容面において、上記の趣旨を踏まえつつ、改訂を行うことが必要である。具体的には、大学院 GS 科目の学修目標と関連付けつつ、大学院学生版トランスファラブルスキルとして再定義し、学生・教職員に明示することを検討している。

#### (2) 大学院学生版トランスファラブルスキルの学修成果可視化と学生への明示

大学院<グローバル>スタンダードの改訂を踏まえながら、当該スタンダードで定めたトランスファラブルスキルの修得度合について、博士前期課程・修士課程、博士後期課程・博士課程及び専門職学位課程の学生を対象に、学務情報システム等を通して自己評価アンケートを定期的実施することが考えられる。そして、当該自己評価結果を学生個人が同システム上において確認できるようにすることが考えられる。

併せて、大学院 GS 科目における授業評価アンケート等を集計・分析しながら、大学院学生版トランスファラブルスキルの修得度合を把握することを検討している。

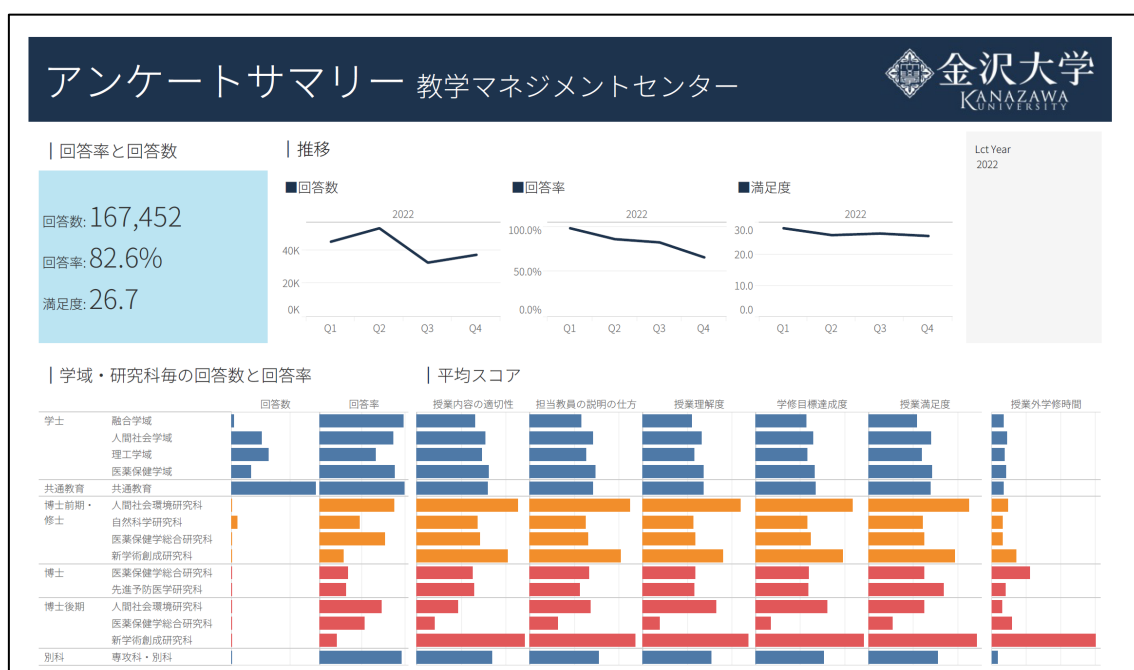


#### 4. 教学 IR 環境整備

令和 3 年度に、教学マネジメントセンターが中心となり、授業評価アンケートにおける共通設問化、卒業・修了者アンケートにおける学生生活満足度の設問の統一化を行うとともに、当該結果の集計を教学マネジメントセンターで行う環境を整備した。

令和 4 年度から令和 5 年度にかけて、FD 委員会を通して、当該集計結果を各部局にフィードバックする環境を整えるとともに、FD 活動報告書における当該集計結果概要を掲載、さらには、教学マネジメント FACTBOOK の刊行にまで漕ぎつけた。

授業評価アンケートについては、BI ツールである Tableau を活用した基礎集計のダッシュボード化（下図参照）を整備し、教学マネジメントセンター及び学務課の関係者にて閲覧できる環境を整備している。令和 5 年度において、授業評価アンケートと同様の定例調査である卒業・修了者アンケートに関する Tableau を活用した基礎集計のダッシュボード化の整備を進めている。



図表 VI-10 授業評価アンケート結果ダッシュボード（一部）

#### 【授業評価アンケート、卒業・修了者アンケート結果の閲覧環境整備】

令和 3 年度以前には、各部局において授業評価アンケート結果を集計し、下記サイトに掲載していたが、部局による作業負担軽減の観点から、教学マネジメントセンターにおいて、授業評価アンケートとともに、卒業・修了者アンケート結果の掲載・更新作業を行う。

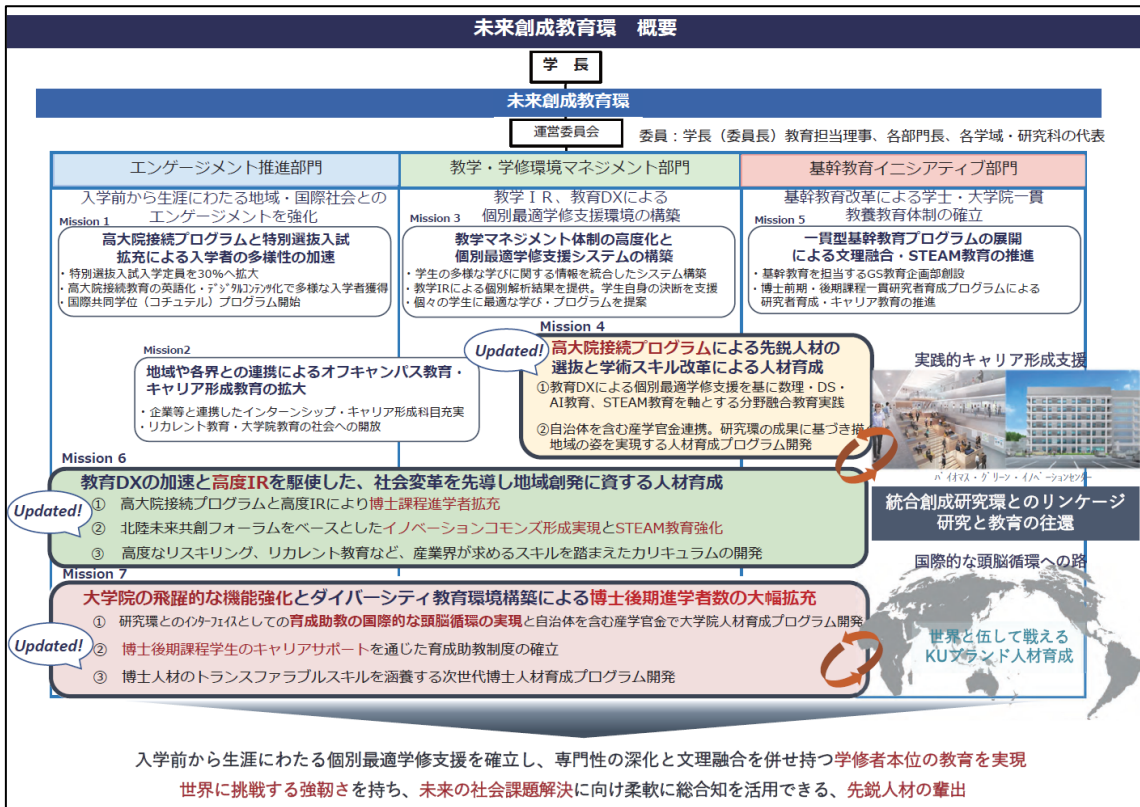
なお、専門職大学院等において、独自のアンケート実施を行っている部局については、従前のおり、当該部局において当該アンケート結果の掲載・更新作業を行う。



図表VI-11 授業評価アンケート結果に関する従前の掲載画面

## 5. 未来創成教育環の取組

全学の教育改革・教学マネジメントの確立を実現し、その中心軸を「学修者本位の教育」へと転換させるべく、令和4年4月に学長の下に本学教育改革の抜本的飛躍を担う新たな組織「未来創成教育環（以下、教育環という）」を設置した。教育環は、未来創成を牽引する金沢大学ブランド人材の輩出に向け、本学のこれまでの教育改革実績を更に推し進めるとともに、教育・学修環境のDX・教学IRの導入、ダイバーシティ教育環境の構築、大学院の機能強化を中心とした教育改革を断行し、個別最適学修支援システムの構築、社会との共創教育の拡大等、学生自身が「自ら学び、自ら育む」教育環境を構築することを目的に取組を推進している。「エンゲージメント推進部門」、「教学・学修環境マネジメント部門」、「基幹教育イニシアティブ部門」の3つの部門が中心となり、図表VI-12に示すMission1～Mission7を実現すべく、高大院接続を越え、全校種の附属学校園を有する強みを活かした初等中等教育、さらには企業等社会との接続といった連続性を確保するよう広い視野に立った施策を強化していく。



図表VI-12 未来創成教育環の概要（令和5年度以降の機能強化を含む）

VII. 金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業  
(KU-DP) イベント報告

1. 令和5年度第2回全学FD研修会「分野を超えた専門知の組み合わせとは～Society 5.0における人材育成の姿～」【「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」幹事校企画】

日 時：令和5年8月8日(火) 14:00～16:00

場 所：Zoomによるオンライン開催

参加者：118名

主催：「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」運営委員会

共催：金沢大学FD委員会・教務委員会、公益社団法人大学コンソーシアム石川

概要：

14:00～14:10 オープニング

14:10～14:50 基調講演「分野を超えた専門知の組み合わせとは？」

九州大学 未来人材育成機構 教授 深堀 聡子

14:50～15:30 事例紹介(話題提供)

(1)「融合学域における文理融合教育が目指すもの」

金沢大学 融合研究域 融合科学系 教授 中山 晶一郎

(2)「先導STEAM人材育成プログラム(KU-STEAM)を通じた人材育成」

金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教 山下 貴弘

TSK株式会社 代表取締役社長 高木 亮太

15:30～15:55 意見交換

(進行：金沢大学 教学マネジメントセンター 副センター長・教授 林 透)

15:55～16:00 クロージング

内 容：

令和5年8月8日(火)14:00～16:00にて、令和5年度第2回全学FD研修会「分野を超えた専門知の組み合わせとは～Society 5.0における人材育成の姿～」をオンライン開催し、学内外の教職員・学生118名が参加した。

本研修会は、文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」幹事校企画の一環として開催するとともに、FD委員会、教務委員会及び公益社団法人大学コンソーシアム石川の共催で実施した。

令和3年3月に公表された「第6期科学技術・イノベーション基本計画」において、イノベーションの定義を従来の自然科学から人文・社会科学を含めた範囲に広げ、人文・社会科学の厚みのある「知」の蓄積を図るとともに、自然科学の「知」との融合による、人間や社会の総合的理解と課題解決に資する「総合地」の創出・活用を重要視する方向性が示された。学術研究や産業社会、さらには、人材育成において、分野を超えた専門知の組み合わせが必要とされる時代となっている。一方、「分野を超えた専門知の組み合わせ」に関する教育実践の仕方や学修成果の把握について十分に理解されていない点がある。本研修会では、

「分野を超えた専門知の組み合わせ」をテーマに、基調講演や事例紹介を通して参加者とともに考える機会となった。

冒頭、金沢大学の森本章治理事（教育・高大院接続・大学院改革・情報担当）／副学長が開会挨拶を行った。その後、九州大学未来人材育成機構の深堀聰子教授が「分野を超えた専門知の組み合わせとは？」と題し、なぜ、今、「文理横断・文理融合教育」なのか、そして、学生に何を知り、理解し、行えるようになって欲しいか、という観点から基調講演を行った。特に、分野固有の「世界の認識の仕方」と「世界への関与の仕方」とともに、「批判性」と「協働する知性」を身に付けることが大切であると力説された。続けて、本学における具体的取組から、融合研究域融合科学系の中山晶一郎教授から「融合学域における文理融合教育が目指すもの」、教学マネジメントセンターの山下貴弘特任助教から「先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）を通じた人材育成」と題した事例紹介があったほか、実践インターンシップ受入れ先の1つである TSK 株式会社の高木亮太代表取締役社長が、受入れ等を通して大学生に期待したいスキルやマインド、文理融合教育への期待を述べた。

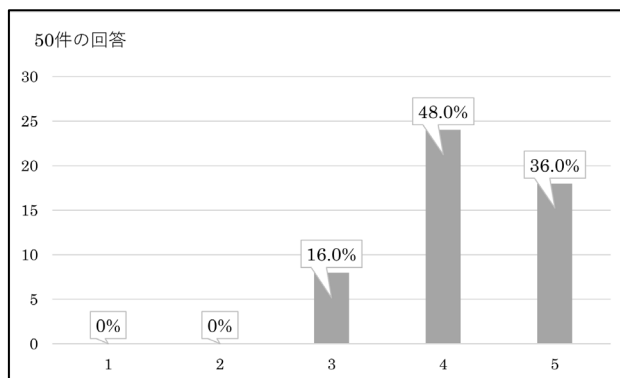
後半の意見交換では、教学マネジメントセンター副センター長の林透教授によるファシリテートのもと、参加者との質疑応答に加え、深堀教授から本学の事例紹介に対するコメントや問いかけを通して、専門知を組み合わせた授業実践や学修目標設定、融合分野の可能性、企業が求めるスキルやマインドと大学教育を通じた学修成果の結び付きなどが話題となった。2時間という短い時間だったが、内容が凝縮された FD 研修会だったという声が寄せられ、大変有意義な機会となった。



図表VII-1 意見交換の様子

#### 参加者アンケート：

7. 今回の FD 研修会は有意義だったかを以下の 5 段階評価（1：有意義ではなかった～5：大変有意義だった）でお聞かせください。



図表VII-2 令和5年度第2回全学FD研修会参加者アンケート集計結果

## 2. 令和5年度第3回全学FD研修会 KU-DP アドバイザリーボード「実践インターンシップを通じた学びの成果発表と意見交換」

**日 時**：令和5年9月27日（水）14：00～16：00

**場 所**：金沢大学 総合教育講義棟 2階 A1 講義室 ※対面，Zoomによるハイブリッド開催

**参加者**：62名

**主催**：「融合した専門知と鋭敏な飛躍知を持つ社会変革先導人材育成プログラム」運営委員会

**共催**：金沢大学 キャリア支援室，教務委員会，FD委員会

**概要**：

14：00～14：10 オープニング・趣旨説明

14：10～14：40 アドバイザリーボードメンバーによる講演

「学生を変える産学協働・地域協働による学び」

京都光華女子大学短期大学部 ライフデザイン学科 教授 鹿島 我氏

14：40～15：30 実践インターンシップ成果発表及び質疑応答

(1) 古民家再生プロジェクト 金沢大学×北陸朝日放送（小松市大杉町）

(2) 企業で働く社員紹介ムービーの制作（TSK株式会社）

(3) 既存商品をブラッシュアップ（株式会社箱一）

15：30～15：55 全体による意見交換（アドバイザリーボード）

15：55～16：00 クロージング

**内 容**：

令和5年9月27日（水）14：00～16：00にて，令和5年度第3回全学FD研修会及びKU-DP アドバイザリーボード「実践インターンシップを通じた学びの成果発表と意見交換」を対面とオンラインのハイブリッドで開催し，学内外の教職員・学生62名が参加した。

全学域学生対象に創設した「先導STEAM人材育成プログラム（KU-STEAM）」では，協働実践科目（300番科目）として「実践インターンシップ」を令和4年度より開講している。今年度第2クォーターに開講した「実践インターンシップ」の3つのプロジェクトについて，受講生18名による合同成果発表会を新たに企画し，受入先の企業や地域コミュニティはもとより，学内外の学生・教職員に広く公開し開催することとした。

本企画は，金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業（KU-DP）におけるアドバイザリーボードの一環として開催するとともに，インターンシップ科目の教育成果・学修成果を考える企画として本学の全学FD研修会に位置付け，キャリア支援室，教務委員会及びFD委員会の共催で開催した。

冒頭，金沢大学の森本章治理事（教育・高大院接続・大学院改革・情報担当）／副学長が開会挨拶を行った。その後，アドバイザリーボードメンバーである京都光華女子大学短期大学部ライフデザイン学科の鹿島我教授が，「学生を変える産学協働・地域協働による学び」



と題し基調講演を行った。講演では、数多く手がけられている産学協働・地域協働の事例紹介を踏まえながら、地域住民とのリアルな交流や企業との互惠関係の確保などの注意点、さらには、学生がイキイキと学ぶ機会となり、実践力を修得することができるメリットを力説された。続けて、実践インターンシップ成果発表として、「古民家再生プロジェクト 金沢大学×北陸朝日放送（小松市大杉町）」「企業で働く社員紹介ムービーの制作（TSK 株式会社）」「既存商品をブラッシュアップ（株式会社箔一）」のプロジェクトに参加した受講学生がグループ発表を行い、併せて、受入れ地域及び企業の関係者から感想とコメントがあった。

後半の意見交換では、教学マネジメントセンター副センター長の林透教授によるファシリテートのもと、フロアとの意見交換を行い、実践インターンシップの開発方法や受入れ先との関係の継続性などについて参加者と活発な質疑応答を行った。異なるプロジェクトに参加した学生たちが一堂に会して合同発表することで、実践インターンシップ全体での学修成果を確認する貴重な機会となった。



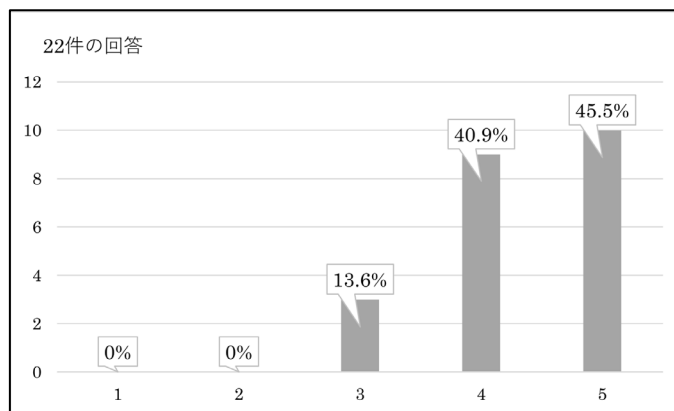
図表VII-3 基調講演の様子



図表VII-4 受講学生によるグループ発表の様子

### 参加者アンケート：

2. 基調講演「学生を変える産学協働・地域協働による学び」（講師：京都光華女子大学短期大学部 ライフデザイン学科 教授 鹿島我氏）に関する満足度を以下の 5 段階評価（1：非常に不満～5：大変満足）でお聞かせください。



図表VII-5 第3回全学FD研修会参加者アンケート集計結果

3. 「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」共通テーマ 4 参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2023「文理横断・分離融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」

日 時：令和5年11月28日(火) 13:30~17:00

場 所：早稲田大学 早稲田キャンパス 国際会議場 ※対面, Zoomによるハイブリッド開催

参加者：166名

主催：金沢大学・東京都市大学・麻布大学・早稲田大学

概要：

13:30~13:40 開会挨拶

早稲田大学 常任理事 教学総括(副プロボスト/教務部門総括・研究推進・産学連携)担当

本間 敬之

13:40~13:50 文部科学省来賓ご挨拶

13:50~14:20 講演(1)「九州大学共創学部における学生の学びと進路状況」

九州大学 副学長・共創学部長

鏑木 政彦

14:20~14:50 講演(2)「文理融合系学部の現状と課題」

株式会社ベネッセ iキャリアまなぶとはたらくをつなぐ研究所 主席研究員

村山 和生

14:50~15:10 [休憩] 採択校によるポスターセッション

15:10~16:00 採択校からの成果報告

金沢大学 教学マネジメントセンター 副センター長・教授

林 透

東京都市大学 教育開発機構 特任教授

杉浦 正吾

麻布大学 大学教育推進機構 教学 IR センター センター長・教授

菊水 健史

早稲田大学 大学総合研究センター・次席研究員(研究院講師)

山田 寛邦

16:00~16:50 パネルディスカッション「文理横断・文理融合教育を通じた学生の成長」

金沢大学大学院 新学術創成研究科 ナノ生命科学専攻博士前期課程1年

原 知輝

東京都市大学 理工学部 機械工学科3年

加藤 凜香

麻布大学 獣医学部 動物応用科学科4年

古谷愛優加

早稲田大学 社会科学部4年

上條 秀真

九州大学 副学長・共創学部長

鏑木 政彦

株式会社ベネッセ iキャリアまなぶとはたらくをつなぐ研究所 主席研究員

村山 和生

ファシリテーター：金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教

山下 貴弘

16:50~17:00 閉会挨拶

金沢大学 理事(教育・高大院接続・大学院改革・情報担当)/副学長

森本 章治

内 容：

令和5年11月28日(火) 13:30~17:00にて、「知識集約型社会を支える人材育成事

業 (DP)」共通テーマ 4 参加校 (金沢大学・東京都市大学・麻布大学・早稲田大学) 合同主催・教学マネジメントセミナー2023「文理横断・文理融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」を、会場の早稲田大学 早稲田キャンパス 国際会議場とオンラインのハイブリッドで開催し、学内外の教職員・学生 166 名が参加した。DP では、令和 4 年度から、事業の当該メニュー I・II・III を横断した共通テーマを 4 つ設定し、採択校 9 大学が各メニューを越えて相互連携することにより、汎用性ある成果を蓄積・発信することを目指している。このうち、共通テーマ 4 は「多様な学びの成果の測定及び社会通用性のあり方を情報交換・検討」をテーマに掲げている。

本セミナーでは、冒頭、早稲田大学の本間敬之常任理事 教学総括 (副プロボスト/教務部門総括・研究推進・産学連携) 担当が開会挨拶をした後、文部科学省高等教育局 大学教育・入試課 課長補佐の山田研市氏から来賓挨拶があった。

その後、九州大学の鏑木政彦副学長・共創学部長が「九州大学共創学部における学生の学びと進路状況」と題し、また、株式会社ベネッセ i・キャリア まなぶとはたらくをつなぐ研究所の村山和生主席研究員が「文理融合系学部の現状と課題」と題し、基調講演を行った。

続いて、金沢大学 教学マネジメントセンター副センター長の林透教授、東京都市大学 教育開発機構の杉浦正吾特任教授、麻布大学 大学教育推進機構 教学 IR センター長の菊水健史教授、早稲田大学 大学総合研究センターの山田寛邦次席研究員から「採択校からの成果報告」があった。

また、休憩時間には、採択校 9 大学によるポスターセッションを行い、参加者同士で活発な意見交換が行われた。

後半のパネルディスカッションでは、教学マネジメントセンターの山下貴弘特任助教によるファシリテートのもと、2 名の基調講演者に加えて金沢大学大学院 新学術創成研究科 ナノ生命科学専攻博士前期課程 1 年の原知輝さん、東京都市大学 理工学部 機械工学科 3 年の加藤凜香さん、麻布大学 獣医学部 動物応用科学科 4 年の古谷愛優加さん、早稲田大学 社会科学部 4 年の上條秀真さんの 4 名の学生を交えて、「文理横断・文理融合教育を通じた学生の成長」をテーマに、基調講演や採択校からの成果報告に関して寄せられた質問に沿って、「学びの意味付け」「履修学生の声」「学内における広報・PR」などについて意見交換を行った。文理横断・文理融合教育を通じた学修成果を見つめるとともに、実際に学んだ学生の成長実感や社会での活躍について考える貴重な機会になった。

最後に、金沢大学の森本章治理事 (教育・高大院接続・大学院改革・情報担当) /副学長が閉会挨拶を行った。

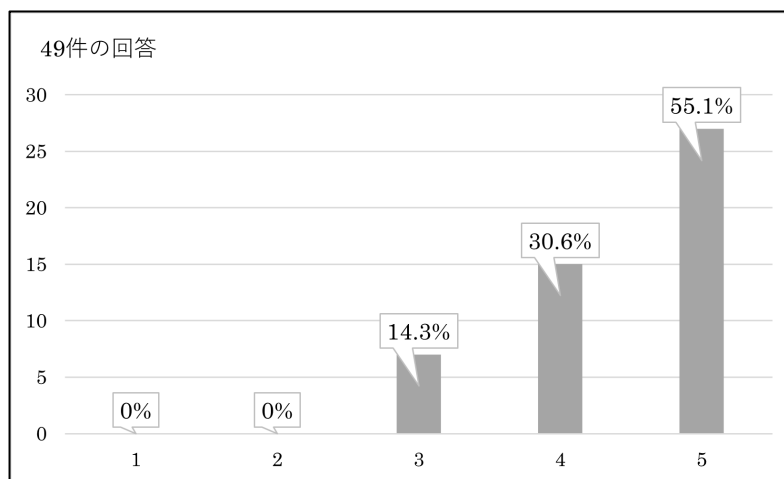
参加者のアンケート結果からは、「今後も同様のセミナーの開催を希望する」「各大学の特徴に合った文理横断・文理融合教育の報告であったため、実際に自大学に取り入れる際、選択肢が多く非常に良いと感じた」「各採択校における可視化の取組み、各事業において発表する学生の姿は非常に有意義だった。今後、これらに特化したセミナーを期待したい」という声が寄せられ、盛況のうちに会を終えた。



図表VII-6 セミナーの様子

**参加者アンケート：**

9. 本セミナーは有意義だったかを以下の5段階評価（1：有意義ではなかった～5：大変有意義だった）でお聞かせください。



図表VII-7 教学マネジメントセミナー2023 参加者アンケート集計結果

#### 4. 高大接続ラウンドテーブル特別企画「探究・STEAM フェスタ 2023 ～高校生の探究心に火を灯す～」

**日 時**：令和5年12月10日（日）13：00～16：00

**場 所**：金沢大学 ナノ生命科学研究棟 4階メインカンファレンスルーム

**対 象**：高校1年生

**参加者**：114名（本学の大学生・大学院学生を含む）

**主 催**：金沢大学 教学マネジメントセンター

**共 催**：金沢大学 高大接続コア・センター

**概 要**：

12：30～ 受付

13：00～13：10 開会挨拶・趣旨説明

13：10～13：30 アイスブレイキング（グラドルール説明を含む）

13：30～15：30 高校生の探究心に火を灯すラウンドテーブル

- ・大学生・大学院学生による司会進行
- ・高校生と大学生・大学院学生によるナナメの対話
- ・大学生・大学院学生によるリアル探究トーク
- ・明日に向けた誓い・宣言

15：30～15：40 KUGS 特別入試制度の紹介

15：40～16：00 クロージング・閉会挨拶

**内 容**：

令和5年12月10日（日）13：00～16：00にて、教学マネジメントセンターでは、文理融合・分野横断のSTEAM教育推進の一環として、探究学習やSTEAM教育をキーワードに、高校生と大学生・大学院学生が相互に学び合う場づくりとして、高大接続ラウンドテーブル特別企画「探究・STEAM フェスタ 2023 ～高校生の探究心に火を灯す～」を開催し、石川県・富山県・福井県の高校22校から定員を大きく上回る60名を超える高校生のほか、引率者の高校教員や父母等、本学の大学生・大学院学生を含む計114名が参加した。

教学マネジメントセンターでは、高等学校教育において必修化されている「総合的な探究の時間」をはじめとする教科横断型の探究学習を通じた高大接続・高大連携に着目し、高大接続コア・センターと連携した取組を進めている。これから探究学習を本格化する高校1年生を対象に、大学生・大学院学生との対話を通して、自らの探究心を高めるとともに、新たな学びや将来に向けたキッカケづくりを目指している。

森本章治理事（教育・高大院接続・大学院改革・情報担当）／副学長による開会挨拶からはじまり、教学マネジメントセンター副センター長の林透教授による趣旨説明を行い、高大接続コア・センターの荻谷千尋特任助教と田中千晶特任助教、KU-STEAM学生スタッフに

よるアイスブレイキングを実施した。

次いで、社会人ファシリテーターである一般社団法人 **motibase** 代表理事の和泉宏氏と **KU-STEAM** 学生スタッフによる司会進行、一般社団法人豊かな暮らしラボラトリーの田村早紀恵氏らのサポートのもと、大学生・大学院学生によるリアル探究トークや、探究等をテーマとした高校生との対話を行った。

そして、高校生がワークシートにもとづき明日に向けた誓い・宣言を行い、今日の学びを振り返るとともに、今後に向けた探究テーマのキーワードの発表や全体共有を行った。

また、「知識集約型社会を支える人材育成事業」で本学のプログラムオフィサーである千葉大学の野村純教授も会場にお越しいただき、エールをいただいた。

さらに、高大接続コア・センターの中野正俊特任助教が、**KUGS** 特別入試制度（※1）や金沢大学グローバルサイエンスキャンパス（**GSC**）（※2）、金沢大学 **STELLA** プログラム（※3）などの案内を行い、本学における高校生の多様な学びの機会を教えた。

最後に、教学マネジメントセンター長の片岡邦重教授から閉会挨拶があり、今後の探究・**STEAM** 教育に対する期待のメッセージが贈られた。

参加した高校生からは、「参加した高校生や大学生から新しい考え方を知り、探究活動のテーマも決めることができたので、有益だった」「大学での探究的な学びや同じ高校生が探究したい分野を知り、視野を広めていきたいと思った」「いろんな先輩方の話を聞くことができ、探究心が高まった」といった感想があった。また、アンケート結果でも探究心は「とても高まった」という回答がもっとも多く、引率者の高校教員や父母等からも今後の継続開催を期待する声が寄せられた。

（※1）**KUGS** 特別入試制度：<https://www.kanazawa-u.ac.jp/admission/bachelor/kugs>

（※2）金沢大学グローバルサイエンスキャンパス（**GSC**）：

<https://gsc.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

（※3）金沢大学 **STELLA** プログラム：<https://jr-doc.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

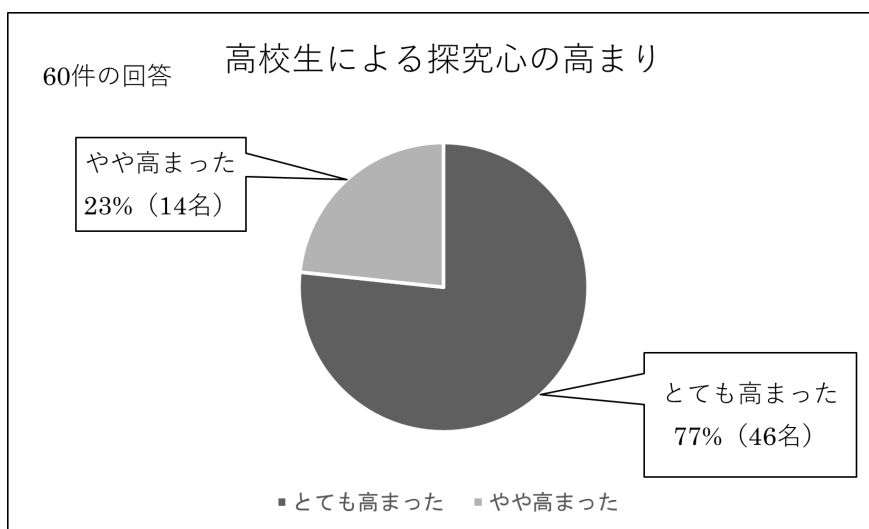
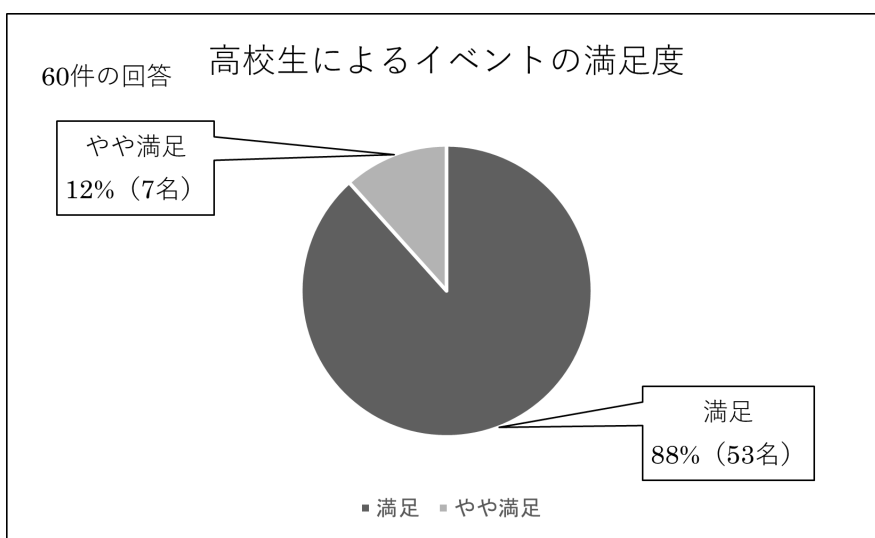






図表VII-8 イベントの様子

参加者アンケート：



図表VII-9 探究・STEAM フェスタ 2023 参加者アンケート結果



## 5. 令和5年度第1回採択校連絡会

**日 時**：令和5年12月14日（木）15：00～15：50

**場 所**：Zoomによるオンライン開催

**対 象**：各採択校の事業実務担当者（教員・職員各1～2名程度）

**参加者**：40名

**概 要**：

- (1) 開会挨拶
- (2) 共通テーマ取組の進捗報告
- (3) 令和5年度成果発信シンポジウム企画案
- (4) 採択校ポータルサイト利活用の活性化
- (5) 東京都市大学 第3回「ひらめき・こと・もの・ひと」づくりプログラムシンポジウムの案内

**内 容**：

令和5年12月14日（木）15：00～15：50にて、令和5年度第1回「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」採択校連絡会をオンライン開催し、メニューⅠ・Ⅱ・Ⅲ採択校9大学の教職員ら40名が参加した。採択校連絡会は、採択校9大学が本事業に関する意見交換を行う場として年に数回開催しているものである。

冒頭、本学の教学マネジメントセンター長の片岡邦重学長補佐（教育改革・学修支援担当）が開会挨拶を行った。11月28日に早稲田大学で開催した共通テーマ4参加校合同主催・教学マネジメントセミナー2023「文理横断・文理融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」にご協力いただいた各採択校と文部科学省高等教育局大学教育・入試課の山田研市課長補佐に対し謝意を表した。

まず、以下の共通テーマ1～4それぞれの代表校事業担当者から、各共通テーマの取組みについて進捗報告があった。

- ・共通テーマ1：金沢大学 教学マネジメントセンター 副センター長 林透 教授
- ・共通テーマ2：千葉大学 国際学術研究院 縣拓充 特任講師
- ・共通テーマ3：新潟大学 教育基盤機構 未来教育開発部門 神田麻衣子 特任准教授
- ・共通テーマ4：早稲田大学 大学総合研究センター 山田寛邦 次席研究員

次に、教学マネジメントセンター副センター長の林透教授から、令和5年度成果発信シンポジウム企画案について提案があり、令和6年2月にハイブリッド開催で計画を進めることとなった。

続いて、教学マネジメントセンター副センター長の林透教授から、採択校ポータルサイト利活用の活性化について提案があり、幹事校である本学から別途連絡する旨、説明があった。

最後に、今後行われるイベントについて、東京都市大学の杉浦正吾特任教授が12月21日開催予定の第3回『ゲームチェンジ時代の製造業を切り拓く「ひらめき・こと・もの・ひ

と「づくりプログラムシンポジウム』を案内し、各採択校からの参加を呼び掛けた。

今後の更なる採択校同士の情報交換や本事業の企画について期待が持てる、大変有意義な時間となった。



図表VII-10 本学会場の様子

6. 令和5年度「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」成果発信シンポジウム  
「STEAM教育を通じた高大院接続による人材育成エコシステムの構築を目指して」

日 時：令和6年2月27日（火）13：00～16：40

場 所：金沢大学 ナノ生命科学研究棟4階 メインカンファレンスルーム  
※対面，Zoomによるハイブリッド開催

参加者：145名

主催：金沢大学（幹事校）新潟大学，信州大学，大正大学，東京都市大学，  
麻布大学，千葉大学，早稲田大学及び名古屋商科大学

後援：一般社団法人 学びのイノベーション・プラットフォーム（PLIJ）

概要：

13：00～13：10 オープニング

13：10～13：20 文部科学省来賓挨拶

13：20～13：50 基調講演（1）

「今なぜ，異分野融合・協働が必要なのか，そして，その価値とは？」

東京大学生産技術研究所 所長／

一般社団法人 学びのイノベーション・プラットフォーム（PLIJ）理事 岡部 徹氏

13：50～14：10 基調講演（2）

「学域学類制の歩み15年の軌跡」

金沢大学理事（教育・高大院接続・大学院改革・情報担当）／副学長 森本 章治

14：10～15：00 採択校からの成果報告

新潟大学 教育基盤機構副機構長・副学長，教学マネジメント部門長 福島 治

新潟大学 教育基盤機構 准教授 上島 洋佑

信州大学 先鋭領域融合研究群 社会基盤研究所 特任准教授 坂本 泰宏

大正大学 教学マネジメント推進機構 学修支援センター 教授 前田 長子

千葉大学大学院 国際学術研究院 特任講師 縣 拓充

名古屋商科大学 商学部 学部長 小野 裕二

（15：00～15：10 休憩）

15：10～16：30 パネルディスカッション

[パネラー]

東京大学生産技術研究所 所長／

一般社団法人 学びのイノベーション・プラットフォーム（PLIJ）理事 岡部 徹氏

石川県立金沢二水高等学校 副校長 石尾 和彦氏

株式会社 箔一 管理部 人事課 宮吉 信行氏

大正大学 文学部 人文学科 国際文化コース 3年 赤野間 妃葵

千葉大学 国際教養学部 4年 久留島 怜乃

名古屋商科大学 商学部 3年 玉置 嶺雄

金沢大学 教学マネジメントセンター 副センター長・教授 林 透

[ファシリテーター]

金沢大学 教学マネジメントセンター 特任助教 山下 貴弘

16:30~16:40 クロージング

## 内 容:

令和6年2月27日(火)13:00~16:40にて、令和5年度「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」成果発信シンポジウム「STEAM教育を通じた高大院接続による人材育成エコシステムの構築を目指して」を開催した。金沢大学ナノ生命科学研究棟4階メインカンファレンスルームを会場に、対面参加とオンライン参加によるハイブリット形式で開催し、学内外の教職員・学生等145名が参加した。

本シンポジウムでは、冒頭、和田隆志金沢大学長が開会挨拶をした後、文部科学省 高等教育局視学官の中村真太郎氏から来賓挨拶があった。

その後、東京大学生産技術研究所 所長/一般社団法人学びのイノベーション・プラットフォーム(PLIJ)理事の岡部徹氏が「今なぜ、異分野融合・協働が必要なのか、そして、その価値とは?」と題し、また、森本章治金沢大学理事(教育・高大院接続・大学院改革・情報担当)/副学長が「学域学類制の歩み15年の軌跡」と題し、基調講演を行った。

続いて、「採択校の成果報告」では、新潟大学 教育基盤機構副機構長・副学長/教学マネジメント部門長の福島治教授、新潟大学 教育基盤機構の上畠洋佑准教授、信州大学 先鋭領域融合研究群 社会基盤研究所の坂本泰宏特任准教授、大正大学 教学マネジメント推進機構 学修支援センターの前田長子教授、千葉大学大学院 国際学術研究院の縣拓充特任講師、名古屋商科大学 商学部の小野裕二学部長が各大学における取組みを発表した。

後半のパネルディスカッションでは、金沢大学 教学マネジメントセンターの山下貴弘特任助教によるファシリテートのもと、基調講演者の岡部氏に加えて、石川県立金沢二水高等学校 副校長の石尾和彦氏、株式会社宿一 管理部人事課の宮吉信行氏、大正大学 文学部 人文学科 国際文化コース 3年の赤野間妃葵さん、千葉大学 国際教養学部 4年の久留島怜乃さん、名古屋商科大学 商学部 3年の玉置嶺雄さん、金沢大学 教学マネジメントセンター 副センター長の林透教授の計7名によって、「STEAM教育を通じた高大院接続による人材育成エコシステムの構築を目指して」をテーマに、学修者の視点からの学びのエコシステム構築や高大院接続、各大学で取り組まれている事業の周知方法などについて意見交換がなされた。大学・高校・企業の視点、教える側・学ぶ側の視点を交えながら、DP事業による取組みの意義や持続性について考える大変有意義な機会になった。

最後に、金沢大学 教学マネジメントセンター長の片岡邦重学長補佐(教育改革・学修支援担当)が閉会挨拶を行った。

参加者のアンケート結果からは、「自身の考えの幅が広がった。大学のみならず、もっと

広い目で教育を考えようと感じた」「同じようなプログラムを行っているかと思いきや、全く内容の異なるものを行っている大学が多く、色々なことを知ることができた会だった。そうはいっても、学びで得られることや感じている課題は同じで、DP事業全体に別のアプローチがあっても良いのではないかと感じた。学生側が実際にやって思うことと、教員側の理想と少しギャップがあるのが現状かもしれないと考えるきっかけになる良い機会だった」

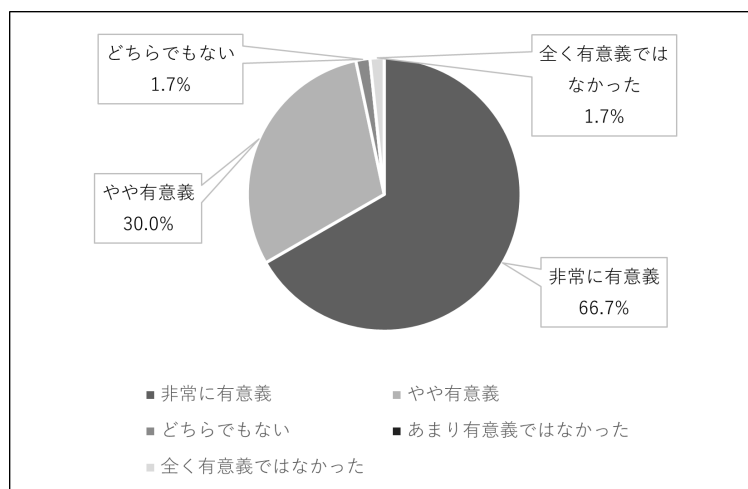
「今回は大学起点でのDP事業の成果が伺え、有意義だった。とは言え、探究活動やSTEAM教育をもっと実のあるものとしていくには、初等教育、大学、社会とバラバラな施策を展開するだけではなく、連携した施策が重要だと思った」「教育界・経済界など様々な課題が山積みされる現代社会において、このようなシンポジウムの視点をさらに拡大させ、社会変容を促していく基礎となることを期待する」という声が寄せられ、今後の更なる期待を感じる会となった。



図表VII-11 シンポジウムの様子

参加者アンケート：

11. 本シンポジウムは有意義でしたか。（60件の回答）



図表VII-12 令和5年度成果発信シンポジウムアンケート集計結果

## 7. 令和5年度「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」成果発信シンポジウム 第二部 令和5年度第2回採択校連絡会（情報交換会）

**日 時：**令和6年2月27日（火）17：00～18：00

**場 所：**YABU&CAFÉ 丹（金沢大学 角間キャンパス（南地区）自然科学系図書館 南福利施設2階）

**対 象：**各採択校の事業実務担当者（教員・職員各1～2名程度）

**参加者：**43名

**概 要：**

17：00～17：10 オープニング（KU-STEAM 学生スタッフによる進行）

17：10～17：30 各採択校の学生による「学びトーク」

17：30～17：55 グループ対話による意見交換（学生・教職員による対話）

17：55～18：00 クロージング

**内 容：**

令和6年2月27日（火）17：00～18：00にて、令和5年度「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」成果発信シンポジウムに引き続き、本事業採択校関係者による令和5年度第2回採択校連絡会（情報交換会）を会場のYABU&CAFÉ 丹とオンラインのハイブリッド形式で開催し、教職員・学生43名が参加した。

今回の採択校連絡会は、本事業採択校の学生が集い、学修者目線で本事業を通じた学びや成長を話し合う場を設けるため、新たに企画したものである。本連絡会では、幹事校である本学のKU-STEAM 学生スタッフが司会進行を務め、採択校の学生同士のフリートークによる交流を促した。

本連絡会には、「知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）」成果発信シンポジウムで講師を務められた東京大学生産技術研究所・所長／一般社団法人学びのイノベーション・プラットフォーム（PLIJ）理事の岡部徹氏、パネルディスカッションに登壇された石川県立金沢二水高等学校 副校長の石尾和彦氏及び株式会社箔一 管理部人事課の宮吉信行氏にも同席いただいた。

KU-STEAM 学生スタッフの1人である伊藤公登さん（融合学域先導学類2年）による司会進行のもと、採択校9大学の教職員・学生が大学を越えたグループで、それぞれの大学で取り組まれている授業の特徴や良かった点、改善点について意見交換を行った。それらの情報をもとに、目標と現実のギャップを見つけ、より良い授業につなげる改善案を各グループで話し合った。その後、各グループの代表者が「色々な人と出会う場、自分の人生を振り返る時間が大事」「カリキュラムの受講者間で意識に差があり、授業後もつながるコミュニティづくりが必要」という学修者の経験に基づいた意見を発表し、「学部間連携や他のカリキュラムとの競合によって受講を希望する全ての学生が履修できない状況に対して、高校生のときに大学の必修科目を先に履修することで、必修科目が競合することで履修できない



不利益を回避できる」といった具体的な改善案の提案をした。

最後に、教学マネジメントセンター副センター長の林透教授が、次年度以降に向けて本事業の企画の検討を進めていくことを確認し、本連絡会を終了した。採択校の学生同士の活発な交流ができた意義深い会となった。



図表VII-13 令和5年度第2回採択校連絡会の様子

## VIII. 活動日誌・編集後記

## 活 動 日 誌

(令和 5 年 4 月 1 日～令和 6 年 3 月 31 日)

年月日	活動内容
令和 5 年 4 月 20 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー & ガイダンス
令和 5 年 4 月 26 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー & ガイダンス
令和 5 年 5 月 11 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 5 年 5 月 17 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 5 年 5 月 18 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 5 年 5 月 19 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 5 年 6 月 23 日	ガクセイ社会科見学 (ヤマト・糺パーク (金沢市), 金沢市大野町)
令和 5 年 6 月 29 日	第 1 回プログラム企画実行委員会
令和 5 年 7 月 19 日	第 1 回プログラム運営委員会 (書面附議)
令和 5 年 8 月 3 日	「共通テーマ 4」第 1 回会議
令和 5 年 8 月 8 日	令和 5 年度第 2 回全学 FD 研修会「分野を超えた専門知の組み合わせとは ～Society 5.0 における人材育成の姿～」【幹事校企画】
令和 5 年 8 月 23 日	「共通テーマ 3」第 1 回会議 (新潟大学・大正大学)
令和 5 年 8 月 28 日	「共通テーマ 3」第 1 回会議 (新潟大学・金沢大学・早稲田大学)
令和 5 年 8 月 29 日	「共通テーマ 2」第 1 回会議
令和 5 年 9 月 26 日	「共通テーマ 4」第 2 回会議
令和 5 年 9 月 27 日	令和 5 年度第 3 回全学 FD 研修会 KU-DP アドバイザリーボード 「実践インターンシップを通じた学びの成果発表と意見交換」
令和 5 年 11 月 2 日	ガクセイ社会科見学 (ぶどうの森 本店)
令和 5 年 11 月 10 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 5 年 11 月 14 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 5 年 11 月 16 日	先導 STEAM 人材育成プログラム (KU-STEAM) ランチョンセミナー
令和 5 年 11 月 26 日	「共通テーマ 2」第 2 回会議
令和 5 年 11 月 28 日	令和 5 年度「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」共通テーマ 4 採択校合同主催・教学マネジメントセミナー2023「文理横断・文理融合教育を通じた学修成果の可視化と学生の成長」
令和 5 年 12 月 10 日	高大接続ラウンドテーブル特別企画「探究・STEAM フェスタ 2023 ～高校生の探究心に火を灯す～」
令和 5 年 12 月 11 日	「共通テーマ 1」第 1 回会議

令和5年12月14日	令和5年度第1回「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」採択校連絡会
令和5年12月25日	第2回プログラム企画実行委員会
令和6年1月21日	「共通テーマ2」第3回会議
令和6年2月5日	第3回プログラム企画実行委員会
令和6年2月27日	令和5年度「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」成果発信シンポジウム「STEAM教育を通じた高大院接続による人材育成エコシステムの構築を目指して」
令和6年2月27日	令和5年度「知識集約型社会を支える人材育成事業 (DP)」成果発信シンポジウム 第二部 第2回採択校連絡会 (情報交換会)
令和6年3月11日	第4回プログラム企画実行委員会
令和6年3月18日	第2回プログラム運営委員会 (書面附議)
令和6年3月21日	令和5年度外部評価委員会

## 編集後記

令和 5 年度は、文部科学省・知識集約型社会を支える人材育成事業（DP）（メニュー I：文理横断・学修の幅を広げる教育プログラム）にとって、補助事業期間 5 年のうち 4 年目に当たり、これまで取り組んできた事業取組の真価が問われました。

融合学域では、先導学類、観光デザイン学類及びスマート創成科学類の 3 学類の設置が完了し、各学類の特徴を活かしながら、文系・理系にとらわれない文理融合教育のカリキュラムを通じた学生の自律的な学びが展開しています。全学域学生を対象とした「先導 STEAM 人材育成プログラム（KU-STEAM）」では、本事業で充実を図った共通教育科目 GS 科目 6 群及び学域 GS 科目を一層有効に活用するカリキュラム改訂を行い、令和 6 年度より新しいカリキュラムの運用が始まるとともに、KU-STEAM 修了証を取得する学生が誕生します。「学びの幅」と「学びの深さ」を支えるアカデミック・アドバイジングとピア・サポートを融合した学修支援モデルの実践も着実に広がりを見せています。また、正課授業だけではなく、ヒドゥン・カリキュラムに当たる正課外活動「ガクセイ社会科見学」を継続実施することで、初年次段階から地域や企業の現場に触れ合う機会づくりを進めています。

文理融合教育・STEAM 教育による人材育成には、ステークホルダーと協働したエコシステムの構築が必須であり、令和 5 年度には、エコシステムの“川上”に当たる高大連携を目的とした「探究・STEAM フェスタ」の更なる充実とともに、“川下”に当たる地域や企業等の関係者とのアドバイザリーボードの開催を通して、人材育成の協働化と価値共有を推進してきました。

本事業もいよいよ最終年度を迎えます。これまでの歩みと成果を礎に、社会に向けた成果発信とともに、本事業に関係する方々との対話を通して、新しい時代の人材育成の扉を開いていきたいと思えます。引き続きご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

金沢大学 教学マネジメントセンター副センター長・教授 林 透

---

「未来知」をもった STEAM 人材を全学体制で育むためには、教職員の協力はもちろん KU-STEAM 学生スタッフの存在も、欠かせません。現在 50 名に迫る学生スタッフの参画を得ることができた背景には、文理融合・分野を越えた実践や学びを振り返り自分の言葉で語る各種セミナー、イベントの司会進行、学生のアクションをサポートする相談会を通じた、学生による憧れの連鎖が生じていると推察されます。また、幅広い学びを求める学生が集うことで、映像やチラシの制作からはじまった STEAM ラボ(教学マネジメントセンター)の学修環境の整備は、今年度新たにレーザーカッターや 3D プリンターを導入し、春休みでも学生たちが試行錯誤する様子が見られます。今後も希望ある未来社会を創成するべく、多様な学生のチャレンジをステークホルダーの皆さまとともに取り組む所存です。どうぞ引き続きご意見・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

金沢大学 教学マネジメントセンター特任助教 山下 貴弘

## 金沢大学・知識集約型社会を支える人材育成事業 (KU-DP) アニュアルレポート 2023

---

発行 : 金沢大学 教学マネジメントセンター  
〒920-1192 石川県金沢市角間町  
2024年3月 発行

---

